

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 44 —

福岡県朝倉郡杷木町所在 笹隈遺跡の調査

1997

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 44 —

福岡県朝倉郡杷木町所在 笹隈遺跡の調査

序

福岡県教育委員会では、九州横断自動車道のうち福岡県内の大分自動車道建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度から実施し、その調査報告を逐次行ってまいりました。本書はその第44集にあたります。

この報告書に掲載した杷木町所在の笠隈遺跡は昭和62年度に発掘調査を行ったもので、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世といった長期間にわたる人々の営みの痕跡が住居跡や墓地として検出されました。とくに5世紀代の古墳の石室がこの山間部で検出されたことは意義あることと考えます。

これまで杷木町における原始・古代の様相はあまり明確ではありませんでしたが、このたびの横断道関係の考古学的な調査によって多くの遺跡が知られるところとなりました。今後その結果を分析・研究していくことで、今まで不明瞭であった杷木町の歴史の一端がよりよく解明されていくことと思われます。本書に報告する調査成果もその研究の一助ともなれば幸甚であります。

最後に、発掘調査および報告書作成において多数の方々に御協力・御援助を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例言

1. 本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した、九州横断自動車道関係遺跡についての44冊目の報告書である。
2. 本書に収録したのは、1987（昭和62）年度に発掘調査を行った福岡県朝倉郡杷木町所在の笠隈遺跡である。
3. 遺構については、実測は伊崎俊秋・木村幾多郎・佐土原逸男・日高正幸が行い、高瀬セツ子・本石セツ子・中村光恵・後藤カミヨ・矢野静子・牟田サエ子の援助を受けた。
写真は伊崎・木村が撮影した。
4. 出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもとに九州歴史資料館および福岡県文化課甘木事務所とで行った。鉄器については九州歴史資料館の横田義章氏のもとで保存処理を実施した。
5. 遺物については、実測は伊崎・大野愛里・西田美代子・辻啓子が行い、写真は北岡伸一が撮影した。
6. 遺構・遺物の浄書は塩足里美・渡辺輝子・伊崎が行った。
7. 本書で使用した方位は、新平面直角座標系のII系に基づく座標北である。
8. 本書の挿図・付図において、古墳・住居跡はそのままの数字で示すが、土坑はDまたは土・SK・SX、溝はSD、柱穴はPの略号を番号の前に冠する場合がある。
9. 本報告書にかかる図面・写真的記録と遺物については、当分の間、九州歴史資料館および文化課太宰府事務所・甘木事務所において保管している。
10. 本書の執筆・編集は伊崎が行った。

本文目次

I	序論	1
A.	はじめに	1
B.	調査の組織と関係者	1
C.	調査の経過	4
II	遺跡の位置と環境	5
A.	位置	5
B.	歴史的環境	7
III	調査の内容	11
A.	A・B区の遺構と遺物	13
1.	土坑	13
2.	溝	14
3.	その他	16
B.	C・D区の遺構と遺物	16
1.	古墳	18
2.	竪穴住居跡	36
3.	土坑	63
4.	溝	66
5.	その他	69
a.	竪穴	69
b.	掘立柱建物跡	73
c.	石垣	74
d.	柱穴出土遺物	75
e.	C・D区の出土遺物	77
C.	E区の遺構と遺物	99
IV	総括	113

図版目次

- | | | |
|------|-----------------------------------|-----------------------------|
| 図版1 | 1 笹原遺跡遠景（北から） | 2 笹原遺跡遠景（西：高山から） |
| 図版2 | 1 笹原遺跡全景気球写真（東上空から） | 2 笹原遺跡全景（東から） |
| 図版3 | 1 A・B区気球写真（東上空から）
3 B区SD1（北から） | 2 B区SX1（北から） |
| 図版4 | 1 C・D区気球写真（北上空から） | 2 C-2～4区気球写真 |
| 図版5 | 1 1号墳気球写真
3 同上（南から） | 2 1号墳石室（西から） |
| 図版6 | 1 2号墳石室（東から）
3 3号墳石室（東から） | 2 同 鉄器出土状態（北から） |
| 図版7 | 1 4号墳石室（西から）
3 同 遺物出土状態（西から） | 2 同 遺物出土状態（南から）
4 同（北から） |
| 図版8 | 1 5号墳石室（北から）
3 6号墳石室（東から） | 2 6・7号墳（北から） |
| 図版9 | 1 7号墳石室（西から） | 2 同上（北から） |
| 図版10 | 1 7号墳石室（北東から）
3 同上（北から） | 2 同 遺物出土状態（南から） |
| 図版11 | 1 8号墳全景（西から）
3 1号墓（北から） | 2 8号墳石室（北東から） |
| 図版12 | 1 2・3号住居跡、SX2（東から） | 2 4・5号住居跡（南から） |
| 図版13 | 1 6号住居跡（西から）
3 1号住居跡カマド（南西から） | 2 7号住居跡（北から） |
| 図版14 | 1 C-2・3区住居群全景（東から） | 2 29～42号住居跡（東から） |
| 図版15 | 1 37～47号住居跡（東から） | 2 21～28号住居跡（東から） |
| 図版16 | 1 1号土坑（南から）
3 2号土坑（西から） | 2 同上（南から） |
| 図版17 | 1 4号土坑（北から）
3 6号土坑（東から） | 2 5号土坑（南西から） |
| 図版18 | 1 SD4（北西から） | 2 4号墳石室周辺柱穴群気球写真 |
| 図版19 | 1 SR1（南から）
3 SR3（南西から） | 2 同（東から）
4 同（東南から） |
| 図版20 | 1 E区気球写真（南上空から） | 2 E区全景（東から） |
| 図版21 | 1 E区包含層（西から）
3 E区P106・107（南から） | 2 E区P100・101（北から） |
| 図版22 | B・C区出土土器 | |
| 図版23 | C区出土土器 | |
| 図版24 | 41・42号住居跡出土土器、押型文土器 | |

- 図版25 繩文土器・弥生土器・焼塙土器
- 図版26 古墳出土鉄器
- 図版27 ナイフ形石器・鎌・打製石鎌など
- 図版28 スクレイパー・使用剝片・十字形石器など
- 図版29 打製石斧・磨製石斧など
- 図版30 棒状石器・打製石斧など
- 図版31 棒状石器
- 図版32 棒状石器・打欠石錐
- 図版33 すり石・叩石
- 図版34 すり石・叩石・砥石・土錐など
- 図版35 E区出土土器等
- 図版36 E区出土土器・陶磁器・すり石

插図目次

(頁)

第 1 図	九州横断自動車道路線図 (1/842,000)	VI
第 2 図	笠隈遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50,000)	6
第 3 図	笠隈遺跡周辺地形図 (1/2,000)	8
第 4 図	笠隈遺跡旧地形図・区割 (1/1,000)	10
第 5 図	A～D区遺構配置図 (1/300)	折込 (P 12-13)
第 6 図	B区SX 1実測図 (1/40)	13
第 7 図	B区K 1・SD 1実測図 (1/20・1/40・1/400)	14
第 8 図	B区出土土器等実測図 (1/3)	15
第 9 図	C-2～4区南壁・C-4区土層図 (1/120・1/600)	17
第 10 図	1号墳周溝実測図 (1/40・1/100)	19
第 11 図	1号墳石室実測図 (1/40)	20
第 12 図	1号墳周溝 (SD 5・6) 出土土器実測図 (1/3)	21
第 13 図	1～3号墳関連土器実測図 (1/3)	22
第 14 図	2号墳石室実測図 (1/30)	23
第 15 図	3・4号墳石室実測図 (1/30)	25
第 16 図	4号墳・1号墓出土土器実測図 (1/3)	27
第 17 図	5号墳石室実測図 (1/30)	28
第 18 図	6号墳石室実測図 (1/30)	29
第 19 図	7号墳石室実測図 (1/30)	31
第 20 図	8号墳石室実測図 (1/30)	33
第 21 図	1号墓実測図 (1/30)	34

第 22 図	1・3・4・8号墳、S R 1出土鉄器実測図 (1/3)	34
第 23 図	2・7号墳出土鉄器実測図 (1/3・1/6)	35
第 24 図	1号住居跡実測図 (1/60)	36
第 25 図	1号住居跡カマド実測図 (1/30)	37
第 26 図	2・3号住居跡実測図 (1/60)	38
第 27 図	4・5号住居跡実測図 (1/60)	39
第 28 図	1・3・4号住居跡出土土器実測図 (1/3)	40
第 29 図	6号住居跡実測図 (1/60)	41
第 30 図	7～9号住居跡実測図 (1/60)	42
第 31 図	5～7・9号住居跡出土土器実測図 (1/3)	43
第 32 図	21～25号住居跡実測図 (1/60)	45
第 33 図	21～23号住居跡出土土器実測図 (1/3)	46
第 34 図	26～28号住居跡実測図 (1/60)	48
第 35 図	29～35号住居跡実測図 (1/60)	51
第 36 図	24・25・27・29・30・32・33・36号住居跡出土土器実測図 (1/3)	52
第 37 図	36～42号住居跡実測図 (1/60)	54
第 38 図	38～40・43～45号住居跡出土土器実測図 (1/3)	56
第 39 図	41号住居跡出土土製品実測図 (1/3)	57
第 40 図	41号住居跡出土土器実測図 (1/3)	58
第 41 図	42号住居跡出土土器実測図 (1/3)	60
第 42 図	43～47号住居跡実測図 (1/60)	62
第 43 図	1～6号土坑実測図 (1/30)	64
第 44 図	土坑出土土器実測図 (1/3)	65
第 45 図	S D 3・4実測図 (1/80・1/400)	67
第 46 図	3号溝 (SD 3) 出土土器等実測図 (1/3)	68
第 47 図	4号溝 (SD 4) 出土土器等実測図 (1/3)	70
第 48 図	S X 2実測図 (1/60)	71
第 49 図	S X 2出土土器実測図 (1/3)	72
第 50 図	C-4区据立柱建物跡? 実測図 (1/120)	73
第 51 図	S R 1・2出土土器等実測図 (1/3)	74
第 52 図	C区ピット出土土器等実測図 (1/3)	76
第 53 図	C・D区出土土器等実測図 1 < C-2・3区 > (1/3)	78
第 54 図	C・D区出土土器等実測図 2 < C-3区 > (1/3)	79
第 55 図	C・D区出土土器等実測図 3 < C-3区 > (1/3)	80
第 56 図	C・D区出土土器等実測図 4 < C-4区 > (1/3)	82
第 57 図	C・D区出土土器等実測図 5 < C-4・5区、D区 > (1/3)	83
第 58 図	旧石器時代遺物実測図 (2/3)	84
第 59 図	C・D区住居跡等出土打製石器実測図 (2/3)	85

第 60 図	C・D 区住居跡等出土打製石器実測図 (2/3)	86
第 61 図	C・D 区出土打製石斧・十字形石器等実測図 (1/3)	88
第 62 図	C・D 区出土打製石斧実測図 (1/3)	89
第 63 図	C・D 区出土磨製石斧実測図 (1/3)	90
第 64 図	C・D 区出土石錐実測図 (1/3)	92
第 65 図	C・D 区出土棒状石器実測図 (1/3)	93
第 66 図	C・D 区出土すり石・叩石実測図 1 (1/4)	95
第 67 図	C・D 区出土すり石・叩石実測図 2 (1/4)	96
第 68 図	C・D 区出土すり石・叩石実測図 3 (1/4)	97
第 69 図	古墳その他出土石器実測図 (1/3・1/6)	98
第 70 図	C・D 区出土土鏡・土玉・ガラス玉実測図 (1/2・2/3)	99
第 71 図	E 区遺構配置図 (1/300)	100
第 72 図	E 区掘立柱建物跡? 実測図 (1/120)	101
第 73 図	E 区包含層土層図 (1/60)	102
第 74 図	E 区出土土器等実測図 1 <ピット> (1/3)	103
第 75 図	E 区出土土器等実測図 2 <ピット> (1/3)	104
第 76 図	E 区出土土器等実測図 3 <ピット> (1/3)	105
第 77 図	E 区出土土器等実測図 4 <遺構面> (1/3)	107
第 78 図	E 区出土土器等実測図 5 <遺構面> (1/3)	108
第 79 図	E 区出土土器等実測図 6 <遺構面> (1/3)	109
第 80 図	E 区出土土器等実測図 7 <包含層> (1/3)	110
第 81 図	E 区出土土器等実測図 8 <包含層> (1/3)	111
第 82 図	E 区出土石器・土製品・鉄器実測図 (1/4・1/3・1/2・2/3)	112
第 83 図	笠限遺跡出土土師器 (1/4)	116
第 84 図	塚堂遺跡・松木遺跡出土土師器 (1/4)	117

写真挿図目次

Photo. 1 作業風景 ①	26
Photo. 2 作業風景 ②	55
Photo. 3 作業風景 ③	81

表目次

表 1 九州横断自動車道関係遺跡一覧表	折込 (P2-3)
表 2 在原遺跡遺構番号新旧対照表	12



第1図 九州横断自動車道路線図 (1/842,000)

I 序論

A. はじめに

九州横断自動車道と統称されるうちの「大分自動車道」の福岡県内部分は、西端部の小郡市から東端部の朝倉郡杷木町まで約37kmの距離を測る。その建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査は、日本道路公団からの委託を受けて、福岡県教育委員会によって1979（昭和54）年から始められ、1990（平成2）年までの12年間に62箇所を対象として実施された。その発掘調査の総面積は約53万m²に及ぶ。

自動車道の供用開始に向けて発掘調査を最大限に優先してきた中においても、調査担当者それぞれが順次調査報告書を作成し刊行してきたところであるが、調査終了後の1991（平成3）年度からは年間5冊を目指して、1996（平成8）年3月現在、42集までを刊行している。平成8年度は、43集（杷木インター：クリナラ・若宮遺跡）、44集（45地点：笠原遺跡）、45集（41・42地点：志波桑ノ本・志波筒本・江栗遺跡）、46集（11地点：宮原遺跡Ⅲ）、47集（21-A・B地点：西法寺・経塚遺跡）の5冊であり、今後さらに10冊が予定されている。

報告書の作成にかかる遺物・図面等の整理は、福岡県文化課古木事務所および太宰府事務所、九州歴史資料館において行った。

本書に収録した笠原遺跡は、1987（昭和62）年2月5日に鳥栖-朝倉間が開通してのち、朝倉一日田間の早期開通をめざして発掘調査に追われた昭和62年度（1987年）に調査を行ったものである。

調査期間は1987年 6月5日～ 9月19日であり、約2366m²が対象であった。

B. 調査の組織と関係者

発掘調査を行った昭和60年度と、報告書作成の平成7年度における関係者は次のとおりである。

日本道路公団

福岡建設局

	昭和62年度	平成8年度
局長	杉田 美昭	藤波 健
次長	菱刈 庄二	吉岡 康行
総務部長	安元 富治	佐野 博志

管理課長	森 宏之	副島 紀昭	三根 敬正
管理課調査役			東 清彦
管理課長代理	三野 徳博		前田 正信
担当			中田 理絵（前任） 渡 宏之

福岡建設局甘木工事事務所

所 長	風間 徹	
副 所 長	西田 功	
副所長(技術担当)	友田 義則	
庶務課長	徳永 登	大河 尋光
用地課長	松尾 伸男	
工務課長	後藤二郎彦	豊里 栄吉
朝倉工事区工事長	上野 満	
杷木工事区工事長	小沢 公共	

福岡県教育委員会

	昭和62年度	平成8年度
〔総括〕		
教 育 長	竹井 宏	光安 常喜
教 育 次 長	大鶴 英雄	松枝 功
理 事		大村 寛
副 理 事		澤田 正弘
指導第二部長	大平 岩男	竹若 幸二
指導第二部参事	窪田 康徳	
文化課長	窪田 康徳（兼）	松尾 正俊（前任）
		石松 好雄
文 化 課 参 事		柳田 康雄
文 化 課 課 長補佐	平 聖峰	元永 浩士
〃 課 長 技 術 補 佐	宮小路賀宏	井上 裕弘
〃 参 事 補 佐	中央 真人	柴田 勝郎
〃 〃	加藤 俊一	黒田 一治
〃 〃	栗原 和彦	橋口 達也
〃 〃	大塚 健	川辺 昭人

表1 九州壊断自動車道關係施設一覽表

地点	道 路 名	所 在 地	内 省	面 積 m ²	国 税 年 度 と 国 税										地 主	相 告		
					54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H 1	H 2		
1 小郡正気道路	小郡市大字小郡	佐生・高瀬・越後宿	11,300							5,000	560					完了	7集	
2 朝倉道路	# #	佐生・古坂敷地	10,400							336	6,000					完了	11集	
3 大阪井波路	# 大阪井	糸原・古坂	5,400								3,000					小郡市役所	15集	
4 #	# #	大坂井新築	9,200							3,500	5,000					小郡市役所	15集	
5 井上町屋道跡	# 井上	佐生・中世新築	9,800							4,500	3,700						10・34集	
6 鶴見堂東道跡	# 鶴見町	佐生・古坂敷地(前割理)	32,000							560	7,300	19,100				完了	13・16集	
7 #	# 今嶺	佐生敷地	7,200							200	100					道場なし	—	
8 吉道溝跡	大刀洗町大字山崎	古代道溝跡	4,000							3,600						完了	26集	
9 伊庭道跡	# #	先土師・佐生・道庭・近野高	10,800							100	6,700					完了	26集	
10 十三郎道跡	# 中状本郷	古城無名	34,400			700				300						完了	26集	
11 立野・須坂道跡	甘木市大字下南	古坂・奈良高瀬・堀地	33,800			15,800	13,500	18,000		3,000						完了	26集	
12 小石川西向西屋	# 上北	中区	45,400			8,200										車積なし	—	
13 # 東屋差	# 上神馬尾		56,800			200	7,600								完了	1集		
14 上々酒匂道	# 上納	佐生・古坂舊落	18,400			200									完了	1集		
15 西原・千原通路	# 二ノ木屋屋	# #	54,800	A1800	7,600	C地主	4,200	1,400							完了	1・2・3集		
16 西浦道跡	# 永永	糸原・佐生・古坂無名	7,800							1,400	6,400					完了	31集	
17 ロノ口道跡	# 牛飼	近世松谷石	100								100					完了	31集	
18 #	# #	敷地	2,550							300						道場なし	—	
19-A #	坂ノ上道路	# #	參良庄高	30,000						700	8,200					完了	9集	
19-B 大坂城跡	朝倉町大字古城	古城無名・奈良高瀬	20,000								8,400					光了	39集	
19-C #	石城久保跡	# #	古坂無名	20,000							6,100					完了	39集	
20 中通道跡	# 大坂	糸原・佐生・奈良高瀬	15,400							300	11,400					中通	39集	
21-A 古寺寺道跡	# #	奈良庄・中性	8,400												完了	47集		
21-B 恵那道跡	# #	敷地	880		600	2,300									完了	47集		
21-C 大庭久保通	# #	佐生庄・奈良高瀬	46,900								9,650					完了	36集	
22 中の通路跡	# #	佐生庄・堀地・古坂無名	12,300												完了	17・27・33集		
22-A #	船ノ上道路	# 入地	糸原・佐生・古坂無名	5,600			300	4,800							完了	32集		
22-C 打吹田道跡	# #	佐生・中世高瀬・堀地	5,800								3,420					光了	25集	
23 鹿野守安道	# #	鹿野庄、古坂	2,600							2,600						完了	32集	
24 才田通路	# #	古坂・茅原・中世高瀬	5,400							1,050	8,650						完了	30集
25 才才田道跡	# #	# #	4,000							1,300	4,400							
26 #	御川	敷地在地	1,600													車積なし	—	
27 長島道跡	# #	糸原・佐生・古坂・奈良高瀬	16,000								560	16,000					34集	
28 中妙見寺跡	# #	糸原・歴史無名	2,400			200	450											
29-A #	坂ノ庄通路	# 金原	糸原・佐生高瀬	16,800				600								完了	29集	
29-B 妙見寺古道	# #	合領・糸原周辺	16,800								4,660						完了	29集
30 鶴原通路	# 茂原・山田	糸原・佐生無名	4,000								6,850						完了	22集
31 山ノ神道跡	# 山田	糸原	7,000								1,980					完了	22集	
32 #	# #	敷地地	2,600			300										車積なし	—	
33 黄糸道跡	# #	糸原・佐生・古坂無名	2,000								5,500	2,800				完了	30集	
34 金坂道跡	# #	糸原・古坂	3,600								680	15,400						
35-A #	坂ノ上道路	# #	佐生・敷地	2,800							880	2,900				完了	20集	
35-B 椿山通路	# #	古坂無名	2,800								2,400					光了	20集	
36 開畠道跡	# #	古坂放地地	2,000								3,860					完了	25集	
37 大迫道跡	# #	佐良・安久火葬場・某落	2,600								5,410	9,900	700			完了	24集	
38 外之賀通路	# #	佐生・中世・織代石槽	125								5,150	12,600	1,200			完了	35・40集	
39-A #	大木寺道跡	武木市大字大木	佐生・古坂・中世敷地	22,000							320	3,400				完了	21集	
39-B 中町高瀬道	# # #	# # #	22,000								11,000					完了	21集	
40 宮森島・本遠道	# # #	中世・敷地	2,500								360	7,700				完了	45集	
41 宮代木本遠道	# # #	# # #	18,000								360	9,400				完了	45集	
42 江原通路	# # #	中世・森治遺構	8,200								360	9,700				完了	43集	
43 大谷通路	# # #	岩谷	古坂頃	12,000							560	7,560				完了	41集	
44 #	# 久慈宮	寄生地	1,800								150					道場なし	—	
45 新坂道跡	# #	白石原～中世・堀地・堀落	2,600								490	3,710				完了	44集	
46 少・天照道跡	# 古賀	# #	1,800								300	2,210	225			完了	42集	
47 上田山道跡	# 施田	糸原・古坂・中世敷地	4,000								3,200					完了	42集	
48 田畠道跡	# #	糸原・張生・中世無名・堀地	1,800								5,800					車積なし	—	
49 #	# #	耕田	敷地	3,300							150					道場なし	—	
50 #	# #	# #	2,400								200					車積なし	—	
51 耕田道跡	# #	糸原無名	5,200								6,600					完了	25集	
52-A 小原通路	# #	# #	2,000								1,050	1,250				車積なし	—	
52-B 二十谷通路	# #	穂坂	3,500								5,700					道場なし	—	
53 脇内通路	# #	穂坂	1,800								2,700					車積なし	—	
54 上野原通路	# #	佐生・中世	1,800								1,000					道場なし	—	
55 #	# #	敷地	1,600								100					車積なし	—	
56 #	# #	# #	2,400								800					道場なし	—	
57 鶴羽原通路	甘木市大字鶴羽原	古坂無名・糸原・佐生無名	200,000	14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400						上野原・完了	4・5・6・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23集		
58 山田古道跡	稻木市大字山田	古坂無名	40,650	4,430						2,500	2,500	8,710				上野原・完了	23集	
59-1 #	御坂道跡	稻木市大字水原																
59-2 #	坂道	佐生無名																
59-3 #	坂道	佐生高瀬・堀落	100,000								1,270	1,270				完了	43集	
60-1 #	クリナニ通路	# #	糸原・古坂無名									4,180				完了	43集	
60-2 #	西吉通路	# #	糸原									2,400	4,800			完了	43集	

〃 〃
〃 〃
〃 〃
〃 〃

柳田 康雄

木下 修
児玉 真一
中間 研志
小池 史哲

〔庶務〕

文化課庶務係長
〃 管理係長
〃 事務主査
〃 主任主事

加藤 俊一（兼）

黒田 一治（兼）
鶴我 哲夫

〔調査〕

文化課技術主査
〃 〃
〃 主任技師
〃 〃
〃 技 師
〃 文化財専門員
〃 臨時職員
〃 調査補助員
〃 〃
〃 〃
〃 〃

井上 裕弘（現 文化課課長技術補佐）
木下 修（現 文化課参事補佐）
中間 研志（現 文化課参事補佐）
佐々木隆彦（現 九州歴史資料館参事補佐）
伊崎 俊秋（現 甘木歴史資料館副館長）
小田 和利（現 九州歴史資料館主任技師）
木村幾多郎（現 大分市歴史資料館長）
日高 正幸（現 小石原村教育委員会）
高田 一弘
武田 光正（現 遠賀町教育委員会）
佐土原逸男
向田 雅彦（現 鳥栖市教育委員会）

〔整理……平成 8 年度〕

甘木歴史資料館 副館長 伊崎 俊秋
文化課 整理指導員 岩瀬 正信
〃 〃 北岡 伸一

【発掘調査従事者】

井手 役人・安部 龍喜・鳥居 貞美・仲山 宗利・田中 静夫・高瀬セツ子・本石セツ子
中村 光恵・矢野 静子・牟田サエ子・後藤カミヨ・丸山 啓子・山口由美子・和田 賦子
石橋 丸子・谷口 晶子・安高マキ子・井手美喜惠・田中伊都子・因間美枝子・足立イツエ
阿部恵美子・坂本ヨリ子・岩下 幸子・鳥居アイ子・財津キヨカ・日吉キヨノ・日野智恵子
梶原トミエ・石井 律子・伊藤千代香・熊谷ヨリ子・武藤ヒデ子・高倉美智子・津村カヅエ

塚本ヤエ子・日吉スミ子

【整理作業従事者】

豊福 弥生・小島佐枝子・中塩屋リツ子・石井紀美子・藤井カオル・渡辺 輝子・塙足 里美
高瀬 照美・大野 愛里・西田美代子・秋吉 邦子・岡 泰子・辻 啓子・井上久美子

調査中及び報告書作成の段階で多くの方々に御指導・御教示を得た。とくに縄文土器については西健一郎・小池史哲・水ノ江和同、中世の遺物については横田賛次郎の各氏に負うところがあった。深甚の謝意を表します。

C. 調査の経過

日誌から調査経過を振り返っておく。

(昭和62(1987)年)

6月5日(晴れ)	45地点にテント設営
6日(晴れ)	52-A地点・小覚原遺跡より器材搬入
8日(雨)	北部九州の梅雨入り
9日(曇り一時晴れ)	テントを全て設営
10日(晴れ)	調査区の区分け(A・B・C-1~C-5・D・E)を行う。
11日(晴れ)	C-1・2区発掘。C-4・5区遺構検出。古墳を確認する。また縄文晩期土器出土。
16日(晴れ)	C区に7基の古墳を確認。C-4区のPitよりガラス玉出土。
17日(晴れ)のち曇り	近年の耕種時の穴をSKとする。測量用の杭打ち。古墳の発掘。
20日(晴り)時々雨	C-2・4・5区に住居跡を検出。
23日(晴れ)のち曇り	C-4区より塞ノ神式土器出土。石室の実測にとりかかる。
24日(晴れ)のち雨	C-4区の住居跡発掘。
26日(晴れ)	暑い一日。住居跡のプランが明確でなく、全体を少し下げる。
30日(晴れ)	C-3区の住居跡上面に土器多し(縄文晩期中頃から後半)。
7月4日(晴れ)のち雨	D区の遺構検出にとりかかる。
6日(晴り一時雨)	A・B・E区の遺構検出にかかる。
8日(晴れ)	E区発掘。C区は実測。
15日(晴れ)	台風接近のためテントの屋根除去。
23日(晴れ)時々雨	D区古墳発掘。
24日(晴り)時々雨	B区発掘にかかる。
29日(晴れ)	E区の発掘ほぼ終了。
31日(晴り一時雨)	43地点(大谷遺跡)の砂防堤築造に行く。8月8日まで。
8月6日(曇り)	写真撮影のため全区清掃。

7日微曇り	気球写真撮影。
10日晴雨	C-2・3区包含層掘り下げ。
11日微曇り一時雨	一部が27日の猿煙実験の準備。
19日微晴れ	C-2・3区掘り下げ。
24日晴雨一時雨	雨がひどかったので各現場を巡視する。
26日微晴れ時々晴り	43地点の補修(27日まで)。
27日微晴れ	猿煙の実験。
28日微晴れ	C-3・4区掘り下げ。
31日晴雨	C-3区住居跡検出作業。
9月1日微晴れ	C-4区にトレンチ設定。
2日微晴れ	発掘と実測を同時進行。
9日微晴れ	A・B区平板測量終了。
14日晴雨のち晴り	S D4発掘。
17日微晴れ	C-2~4区南端にトレンチ設定。
18日微晴れ	46地点との間の低い所の平坦面を試掘。
19日晴れ	調査終了。

II 遺跡の位置と環境

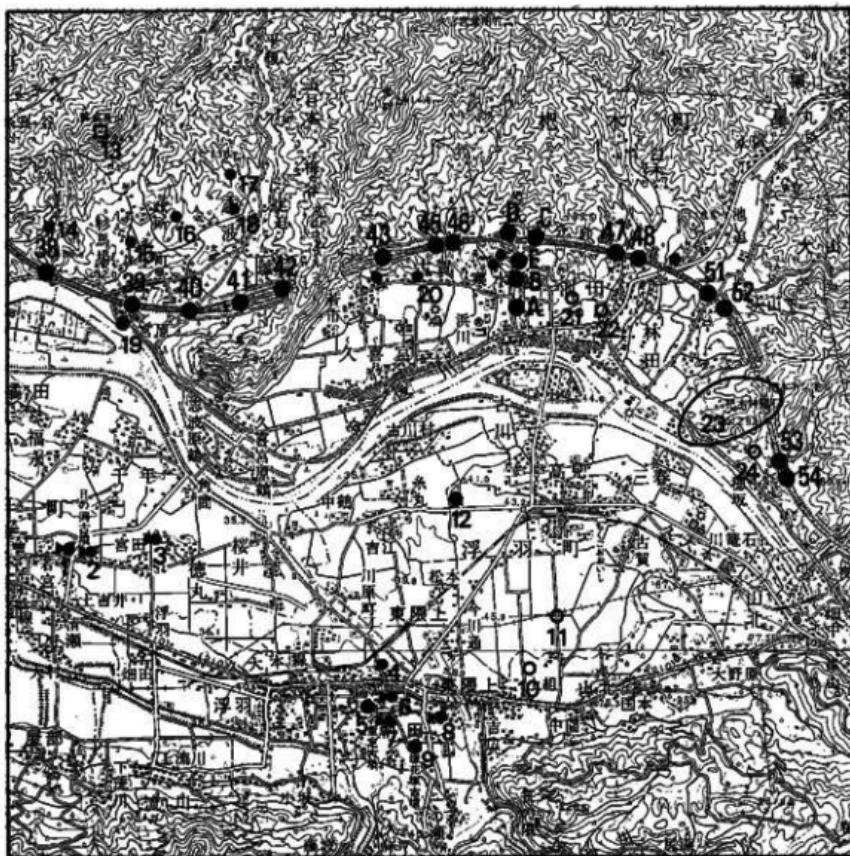
A. 位置 (図版1、第2図)

(所在地)

・~~世良~~遺跡(45地点) ………………福岡県朝倉郡杷木町大字久喜宮字世良152・146-1ほか

朝倉郡杷木町は福岡県中部のやや南に位置し、その東端部は大分県日田市と境を接する県境の町である。西は朝倉町、北は甘木市・小石原村・宝珠山村、南は筑後川を挟んで浮羽郡浮羽町・吉井町が隣接する。

九州山地北部の霧峰英彦山(標高1200m)から南西に岳誠鬼山(1037m)・糸迦ヶ岳(844m)・大日ヶ岳(840m)と連なった山並みは、さらに西へは古処山系へと続き、いわゆる筑紫山地を形成する。大日ヶ岳より南西へは谷を介しながらも広蔵山(696m)・米山(591m)と続き、筑後川に向かっては麻底良山・高山などの丘陵を派生している。これら丘陵の間には筑後川に注ぐ北川・寒水川・白木谷川などの小河川が南流する。



- | | | | |
|-----------|-------------|-------------|------------|
| 1. 日向古墳 | 13. 麻庭良城跡 | 38. 外之間道跡 | 51. 桃田道跡 |
| 2. 月面古墳 | 14. 本陣古墳 | 39A. 柏木宮深造跡 | 52A. 小覚川道跡 |
| 3. 塚堂古墳 | 15. 杉馬場古墳 | 39B. 中町裏道跡 | 52B. 二十谷道跡 |
| 4. 西隈上古墳 | 16. 茅白山古墳 | 40. 志波島ノ本道跡 | 53. 庫内道跡 |
| 5. 植名古墳 | 17. 岩河内古墳 | 41. 志波岡本道跡 | 54. 上野原道跡 |
| 6. 重定古墳 | 18. 赤堀古墳 | 42. 江葉道跡 | A. 駿術道跡 |
| 7. 法正寺古墳 | 19. 志波宝洞古墳 | 43. 大谷道跡 | B. 稲田道跡 |
| 8. 座次郎丸古墳 | 20. 御天御吉古墳 | 44. 管脚道跡 | C. 西ノ道道跡 |
| 9. 塚花塚古墳 | 21. 長光寺造跡 | 45. 天園道跡 | D. クリナラ道跡 |
| 10. 日永道跡 | 22. 立願造跡 | 46. 夕月道跡 | E. 老富道跡 |
| 11. 沖出道跡 | 23. 柏木神籠石 | 47. 上池山道跡 | |
| 12. 田烏北道跡 | 24. 稽曉天神原造跡 | 48. 番田道跡 | |

第2図 笠限遺跡と周辺道跡分布図 (1/50,000)

笹隈遺跡は高山丘陵から南東に派生した台地状小丘陵北端の細尾根上（A・B区）とその東斜面（C・D区）、そして別の小丘陵突端部（E区）とを含んだ一帯を指している。

九州横断自動車道の路線では、佐賀県鳥栖市から大分県大分市までの「大分自動車道」は、福岡県内は小郡市・三井郡大刀洗町・甘木市・朝倉郡朝倉町・同杷木町を通過するが、朝倉町で国道386号線と交差するまで平野・低台地部を走ってきたのが、それより東側になると山間部を縫うようにして路線を繋いでゆき、杷木町に入って最初のトンネルである「高山トンネル」を抜けてまもなくの所がこの笹隈遺跡である。横断道の路線STATIONナンバーといえばNo266～No267+20の間にあたる。その東側には谷川を挟んでまさしく指呼の間に46地点の天園遺跡があり、さらに東の丘陵上には夕月遺跡がある。

遺跡の原状はA・B区が標高88m前後の畠地、C・D区が標高77～83mで柿畠に造成され、E区は標高80m前後の田圃となっていた。遺跡内を町道研石杉谷線が蛇行しながら北上し、またこれから分歧して林道笹隈線が笹隈池と塵芥焼却場を右手に見やりつつ北西に登ってゆく。A～D区とE区の間にはもともと小谷があり、その谷頭の湧水点がいまの笹隈池のある所であろう。

B. 歴史的環境（第2図）

杷木町においては、九州横断自動車道関係の発掘が始まった昭和60年（1985）頃まではほんの数カ所の遺跡が調査されていたに過ぎない。それも不時発見の折に緊急的に調査されたものが殆どであった。

古く昭和初期には志波宝満宮古墳が報告され、また発掘ではないが志波普門院の瓦が取り上げられたりした。^{註1}

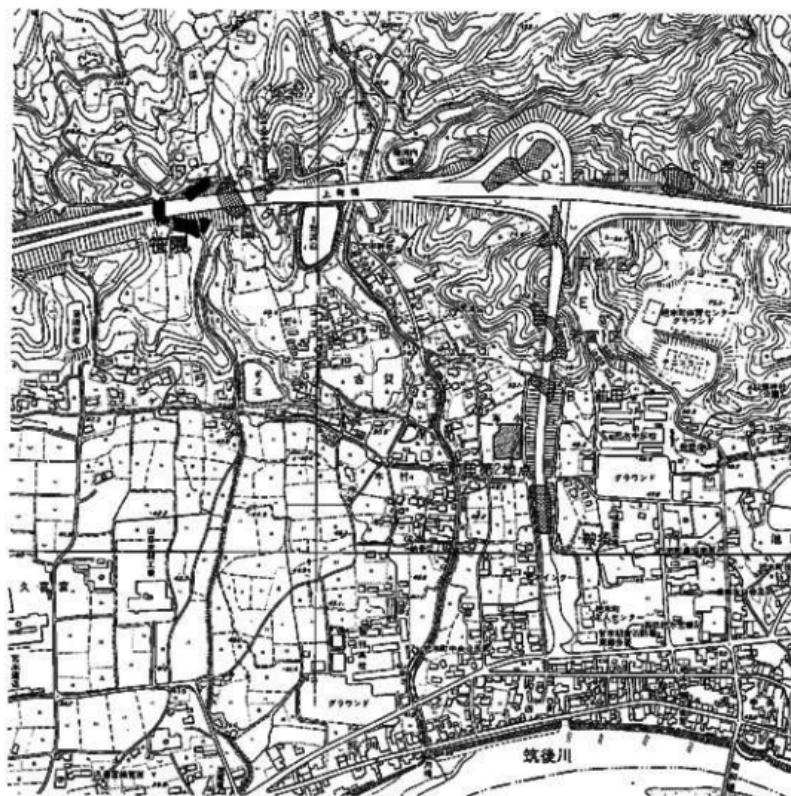
昭和42年（1967）には県内6カ所目の神籠石として杷木神籠石が発見され、昭和44年（1969）に列石・土壙と水門の一部が調査されてのち、昭和60年（1985）に保存管理計画策定報告書が刊行された。^{註2}

以上の報告があるもののほかに昭和44年（1969）1月の新聞記事によれば穂坂のぶどう園で「支石墓から壺棺」が出土したと報道されている。また町の歴史資料室に保管されている石器や土器は縄文時代と弥生時代後期のものなどがあり、町内にその時期の遺跡のあることが知られていた。

県立朝倉高校史学部が甘木・朝倉地方で考古学において先駆的な業績を挙げたことは既に知られているが、その集大成である昭和44年（1969）刊行の『埋もれていた朝倉文化』には杷木町の遺跡に関する記述は見られない。これらからすると杷木町には遺跡が少ない印象があ

ったのは否めない。

ところが、横断道の建設は杷木町の平地からやや奥まった場所に幅30~50m前後の長大なトレンチを入れたようなもので、杷木町の東西約8kmの間に20箇所の遺跡が発掘調査されたのであった。それは志波地区では杷木宮原遺跡〔39-A〕、中町裏遺跡〔39-B・C〕、志波桑ノ本遺跡〔40〕、志波岡本遺跡〔41〕、江栗遺跡〔42〕があり、久喜宮-古賀-寒水-池田-林田地区では大谷遺跡〔43〕、笹張遺跡〔45〕、天園遺跡〔46〕、夕月遺跡〔46〕、クリナラ遺跡〔IC-D〕、西ノ追遺跡〔IC-C〕、若宮遺跡〔IC-E〕、前田遺跡〔IC-B〕、鞍掛遺跡〔IC-A〕、上池田遺跡



第3図 笹張遺跡周辺地形図 (1/2,000)

(47)、⁵⁹畠田遺跡 (48)、⁶⁰補田遺跡 (51)、⁶¹小覚原遺跡 (52-A)、⁶²二十谷遺跡 (52-B)、そして穂坂地区では陣内遺跡 (53)、上野原遺跡 (54) といった遺跡である (〔 〕は地点名。ICはインターチェンジの略)。

これらの遺跡からは繩文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町・江戸期のほぼ全ての時代にわたる遺構・遺物が検出されており、杷木町の原始・古代のみならず中世～近世までの様相の解明に多大なる寄与をなすものといえよう。とくに畠田遺跡の弥生早期の支石墓、西ノ迫遺跡の高地性集落、志波地区的宮原・桑ノ本・岡本遺跡における掘立柱建物などは特筆されるものである。

横断道の調査のち、平成5年(1993)には穂坂天神原遺跡、小覚原遺跡第2地点、二十谷跡第2地点が相次いで調査され、同7年(1995)には前田遺跡第2地点、同8年(1996)年には下池田遺跡が各種開発に先だって調査された。

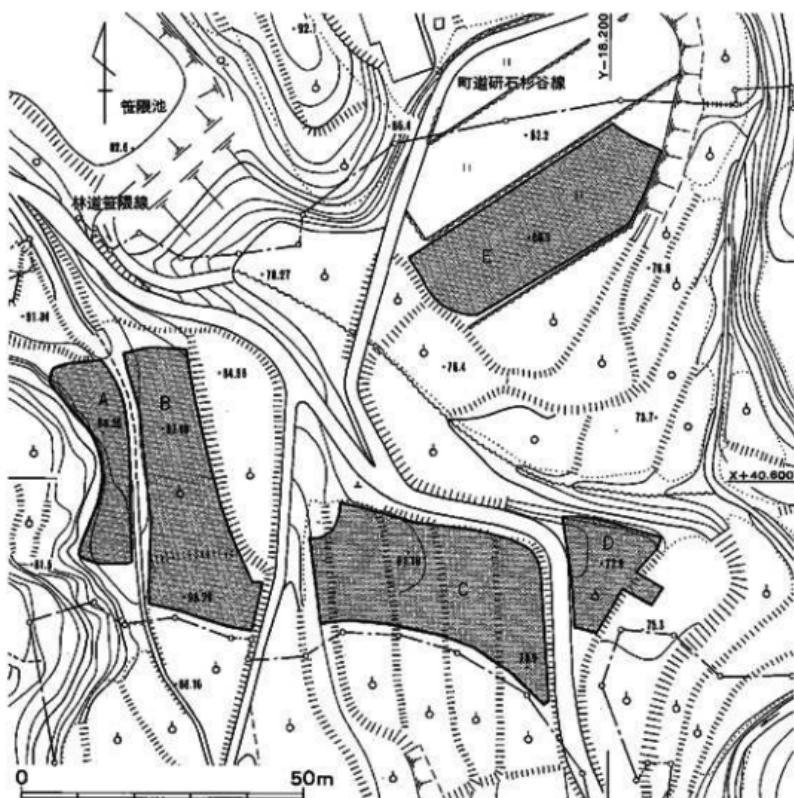
こういった調査を見ると、從来持たれていた印象は誤りといってよく、実はまだ地下に多くの遺跡が眠っていることを示唆しているものといえる。今後の発掘調査にも大きな期待が持たれるところである。

なお、地元の古老から、E区北側の民家のさらに上方のあたりに「ぎょくせんじ」(玉泉寺)、A・B区西北方の塵芥焼却場近くには「えいらくじ」(永楽寺)と称する寺があったということを聞いたが、分布地図によれば玉泉寺はA～D区の南に亘びた丘陵上に位置しており(第3図)、「安土桃山時代：天正の兵火で消失」と記されている。また「玉泉寺脇袖の御仏」という民話もあるという。これらの寺に関する古文書等は不明であるが、あるいはE区などの舶載陶磁器を含む中世の遺物がそれに関連するものであろうか。

註

1. 島田寅次郎 1932 「箱式石棺内に於ける合葬遺跡の調査」
福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第7編
2. 島田寅次郎 1933 「筑前に於ける歴代時代の遺跡遺物について」
福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第8編
3. 杷木町教育委員会 1970 「杷木神龍石」
杷木町文化財調査報告書 第1集
4. 杷木町教育委員会 1985 「史跡杷木神龍石保存管理計画策定報告書」
5. 福岡県立朝倉高等学校史学部 1969 「埋もれていた朝倉文化」
6. 福岡県教育委員会 1991 「九州横断道関係埋蔵文化財調査報告-21-」
7. 福岡県教育委員会 1997 「九州横断道関係埋蔵文化財調査報告-45-」
8. 福岡県教育委員会 1996 「九州横断道関係埋蔵文化財調査報告-41-」
9. 福岡県教育委員会 1996 「九州横断道関係埋蔵文化財調査報告-42-」
10. 福岡県教育委員会 1997 「九州横断道関係埋蔵文化財調査報告-43-」

11. 福岡県教育委員会 1993 「九州横断道関係埋蔵文化財調査報告－25－」
12. 把木町教育委員会 1995 「穂坂天神原遺跡」 把木町文化財調査報告書 第2集
13. 把木町教育委員会 1995 「二十谷遺跡第2地点・小覚原遺跡第2地点」
把木町文化財調査報告書 第3集
14. 福岡県教育委員会 1978 「福岡県遺跡等分布地図(甘木市・朝倉郡編)
15. 把木町史編さん委員会 1981 「把木町史」



第4図 笠瀬遺跡旧地形図・区割 (1/1,000)

III 調査の内容

【概要】

前述したように、笠限遺跡は高山丘陵から南東に派生した台地状小丘陵北端の細尾根上とその東斜面、そして別のある丘陵突端部とを含んだ一帯を指している。遺跡内を蛇行しながら走る町道・林道・農道があり、それと畑等の区画によって区分けを行った。

台地状小丘陵北端の細尾根上をA・B区とした。

その東側のC区は農道を介して4mほども低くなってしまっており、もと斜面であった所を段々の柿畠に造成していたので段ごとに西側からC-1~5区とし、C区の東側は町道を挟んでD区とした。

そしてこれらA~D区の北側には笠限池を谷頭とする小谷があり、その北東に伸びてきた別の小丘陵の突端部をE区とした。

以下においては、それぞれA・B区(701.3m²)、C・D区(988.3m²)、E区(676.8m²)というまとまりごとに報告する。調査した総面積は2366.4m²。

なお、調査時には遺構名の上に、最も新しい柿植栽時関係の穴：SK、土坑・竪穴もしくは不明遺構：SX・土、溝：SD、石垣部分：SRを冠し、古墳・住居跡はそのまま～号としていた。今報告においても基本的にそれを踏襲したが、番号のみは多くが改めている。その新旧対照は第2表に記した。

この遺跡で検出された主な遺構・遺物は下記のとおりである。

【A・B区】

- ・土坑 1基
- ・溝 2条
- ・その他

〈出土遺物……縄文土器・弥生土器・青磁〉

【C・D区】

- ・古墳 8基
- ・木棺墓 1基
- ・竪穴住居跡 36軒
- ・掘立柱建物跡 1棟?
- ・土坑 6基
- ・溝 3条
- ・石垣状遺構 1箇所

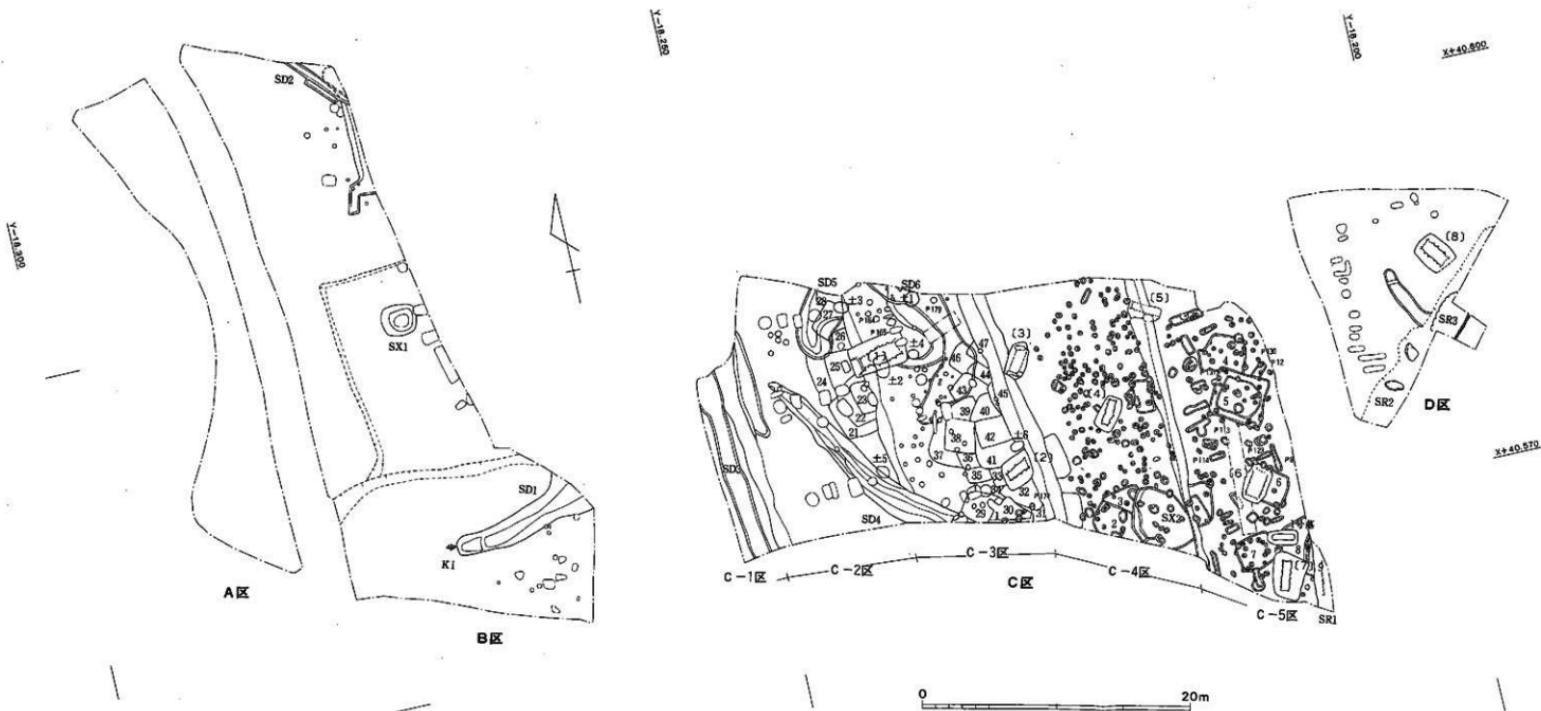
- ・性格不明遺構
 - ・柱穴群

<出土遺物……ナイフ形石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・石器・鐵器・土製品・ガラス玉>
- [E区]
- ・掘立柱建物跡 1棟?
 - ・柱穴群

<出土遺物……ナイフ形石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・青磁・石器・鐵器>

表2 篁隈遺跡遺構番号新旧対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
住 1	住11	住28	住31	住44	住22	SD 1	SD 5
2	9	29	35	45	27	2	6
3	10	30	37	46	21	3	1
4	2	31	38	47	23	4	3
5	1	32	36	なし	住 7	5	2
6	3	33	33	なし	8	6	4
7	6	34	34			7	7
8	5	35	32	1号墳	1号墳		
9	4	36	19	2号墳	2号墳	SX 1	SX 8
21	15	37	20	3号墳	3号墳		
22	16	38	13	4号墳	4号墳		
23	28	39	25	5号墳	7号墳		
24	17	40	26	6号墳	5号墳		
25	18	41	12	7号墳	6号墳		
26	29	42	14	8号墳	8号墳		
27	30	43	24	1号墓	1号墓		



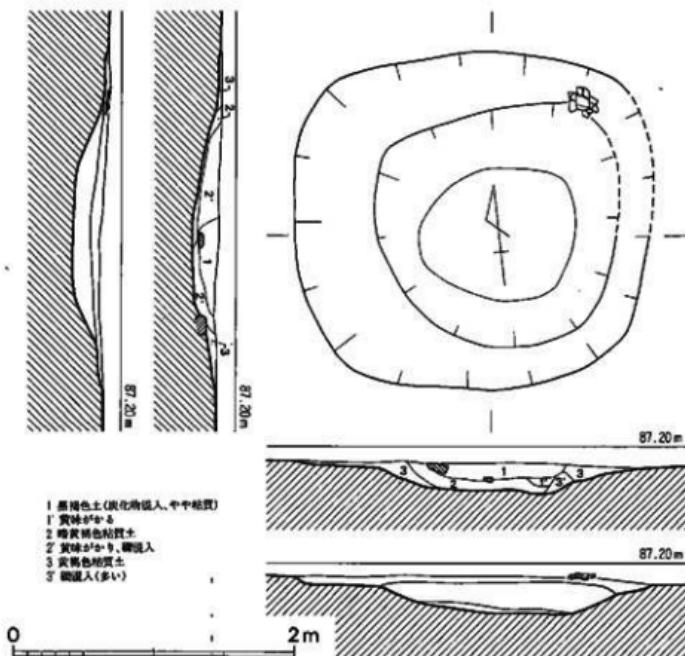
A. A・B区の遺構と遺物

A区は検出面の標高が87.26～88.25mで中央西端部が低くなっている。ここには遺構・遺物とも何ら検出されなかった。よって以下の記述は全てB区である。B区は北側が高く、南側は削平もあって低くなっている。土坑と溝が存したのみであった。

1. 土坑

S X 1 (図版3、第6図)

B区の中央東端部にある。上面の一辺が238～255cmの隅円方形プランの土坑であり、周縁が浅くて内側は一辺170cm前後の不整円形の二段掘りとなっている。底面は94～112cmの椿円形ブ



第6図 B区S X 1 実測図 (1/40)

ランで、検出面から最深部までは深さ20cmを測る。埋土中に礫と黒曜石・サヌカイトの剥片があり、最上面から弥生土器が出土した。

出土遺物（第8図-7）

弥生土器 壺の底部である。復元底径10cm。中期未頃か。

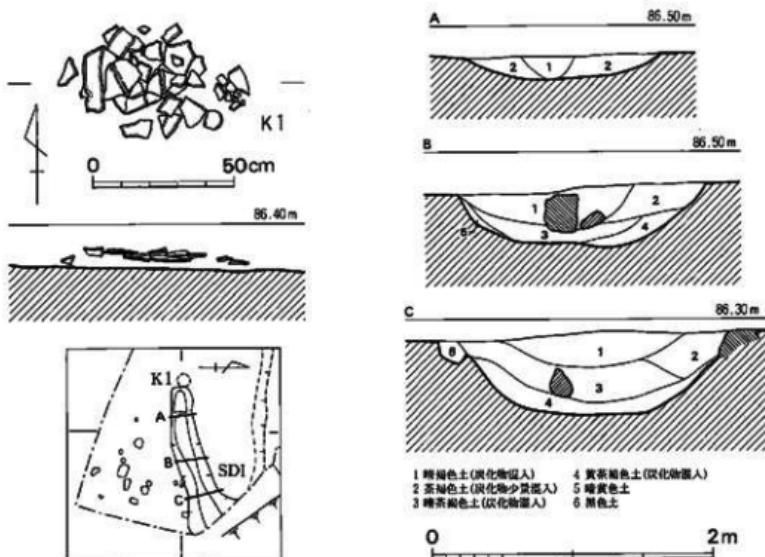
2. 溝

SD 1 (図版3、第7図)

B区南端近くで略東西方向に長さ約10mを検出した。幅は西端部で1.6m、東端部で約4mを測り、底面は西端部近くで10cmほどの段が見られたのち徐々に東へと低くなっていく。その東側は原状で1m以上の段落ちとなって調査区外になる。埋土は自然堆積の様相を示し、弥生後期土器のほか縄文晩期土器片、礫、黒曜石片が出土した。

出土遺物（第8図）

縄文土器（1・2）ともに晩期で、1は浅鉢、2は深鉢になる。どちらかと言えば粗製に近い。

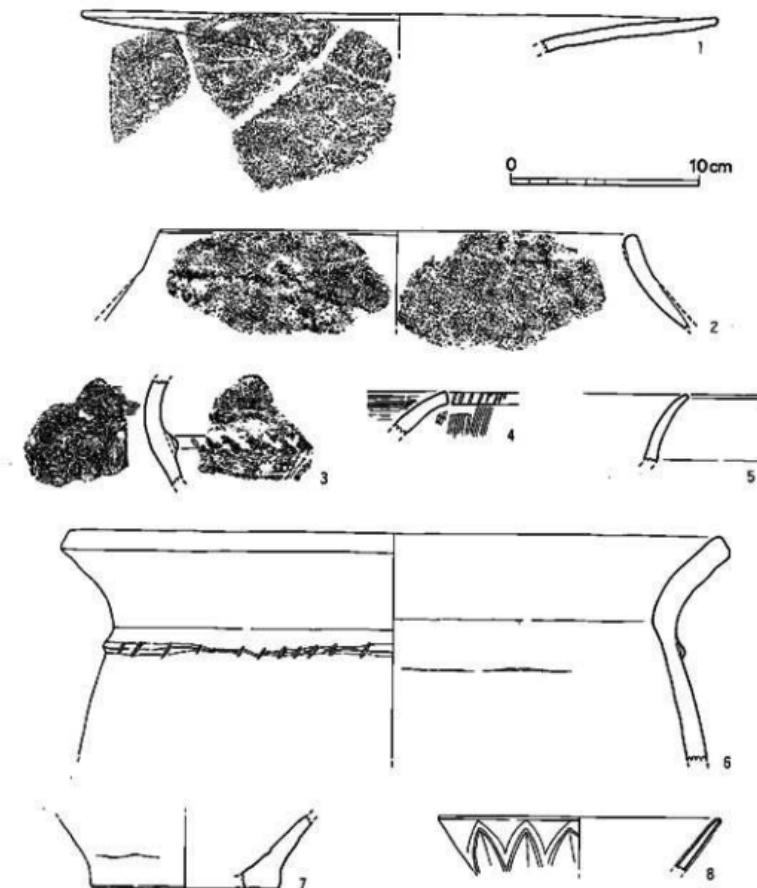


第7図 B区K 1・SD 1実測図 (1/20・1/40・1/400)

復元で口径は 1 が 34cm、 2 が 25.5cm。

伴生土器 (3~5) 3・4 は壺で、 4 が 3 の口縁部になるのかもしれない。3 の突帯の刻みは刺突による。5 は高壺の破片で精製品である。後期後半から終末であろう。

SD 2 (図版 3、第 5 図)



第 8 図 B 区出土土器等実測図 (1/3)

B区北東端で北西—南東方向に長さ約5.7mを検出した。幅は0.6m、深さは20~50cmほどで東南側が低くなっている。黒曜石片1点が出土したのみである。

3. その他

K 1 (図版3、第7図)

B区南端近くの溝S D 1の西端部付近にて、弥生土器の壺が40×70cmの範囲に潰れた状態で出土した。検出した時は溝の外であったので壺棺の可能性があるものとしてK 1としておいたが、掘り形が不明であることもふまると、本来は溝の中に含まれていたものが溝の肩部が削平されたために単独で存在するように見えたのかも知れない。溝出土の弥生土器と時期的に同じであることもそのことを証しているように思われる。周辺に黒曜石片2点があった。

出土遺物 (図版22、第8図)

弥生土器 (6) 壺の破片で頸部直下に刻みを施した突帯が巡る。器表の磨減が著しく調整は不明。復元口径35.6cm。後期末であろう。

・他の遺物 (第8図8)

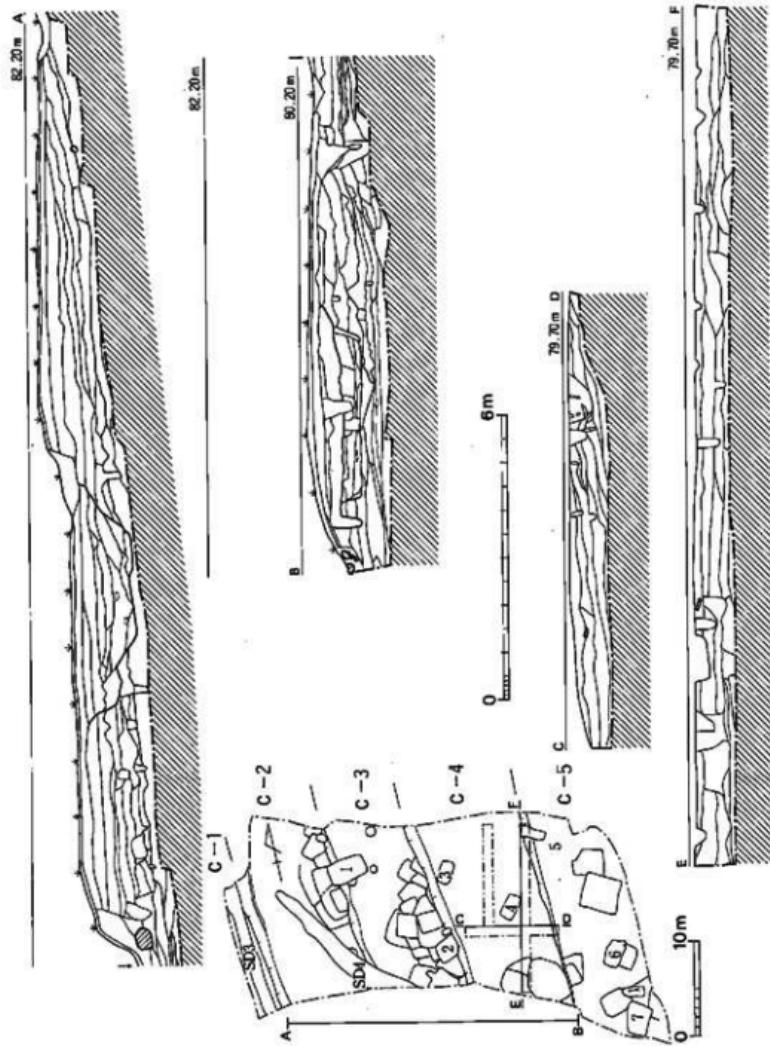
青磁 採集されたもので、外面に綺麗弁をあしらった龍泉窯系の碗である。釉は緑灰色を呈するが口縁部は黄色く変色する。復元口径15cm。

B. C・D区の遺構と遺物

C区は柿畠造成時の造作によって5つの段だったので、西からC-1~C-5区とした。C-5区とD区とは町道を挟んで1m近い比高差があるが、これは一連の丘陵の続きが段差となっているだけである。C-2~4区の南端部はトレントを設定して土層をみたが(第9図)、上層は黒っぽく、その下が黄色味を帯び、さらに茶色もしくは灰色に近くなる層序であり、さらにその下は黄色系の粘質土があってのち灰黒色~灰褐色の砂質土・砂礫土の基盤となる。地形に沿って西から東へと傾斜した堆積を示しており、これはC-4区内に設定した東西トレント(A-A')でも同じであった。

ここでは古墳がC-3~5区とD区に、堅穴住居跡のうち古墳時代以降のものがC-3~5区、縄文時代のものがC-2・3区に、土坑がC-2・3区に、溝がC-1~3区に存した。これらの検出遺構はいずれも上面の削平が著しい。古墳は全てがもと有していたはずの墳丘はなく、かつ主体部の天井石をも失っていた。また、堅穴住居跡については一部に確実性を欠くものもあったが、基本的には調査時の判断に則って報告する。

第9図 C-2～4区南壁、C-4区土層図 (1/120・1/600)



1. 古墳

1号墳（図版5、第10・11図）

C-2・3区にまたがってその北半部にある。西に開口する竪穴系横口式石室を主体部とする。縄文時代の22・25・26号住居跡、2号土坑を切る。

周溝は明確ではないが、不整形ながらもC-2区のSD5とC-3区のSD6とがそれに該当するものかと思われる。大胆ながら周溝の内側ラインを通る円の中心を求めるにそれは石室中心とほぼ一致し、その径約8mを墳丘径としておく。周溝幅は2mから6mまでまちまちなので外側ラインの中心および径を求めておきたいが、およそ12~13mを測るものと捉えておきたい。

主体部の掘り形は240×420cmの長方形プランで、当然のことながら東側の遺存度は悪い。西側の横口部に墓道は取り付かないが、階段状にあったものが削平されているのであろう。東端部は新しい穴に切られていた。

玄室は奥壁が抜かれ、両側壁の最下段の石と敷石が残る。腰石とする最下段の石は北壁が5個残るも玄門に近い所にはもう1個が存したとみてよい。南壁は6個が据えられている。床面は胴張りの長方形プランをなし、奥壁幅100cm、中央部幅108cm、玄門側幅は推定で65cmを測る。袖石も存しないが玄門幅は50cm前後と思われる。敷石は大小の角砾、扁平石を敷き詰めるが、二重になるところもあるので追葬がなされたとみられる。主軸方位はN-76°-E。床面中央北寄りから鉄錆が出土した。

玄門は石がすでに抜かれ、南側に抜き跡の穴がある。推定で幅50cmほどであったと思われる。

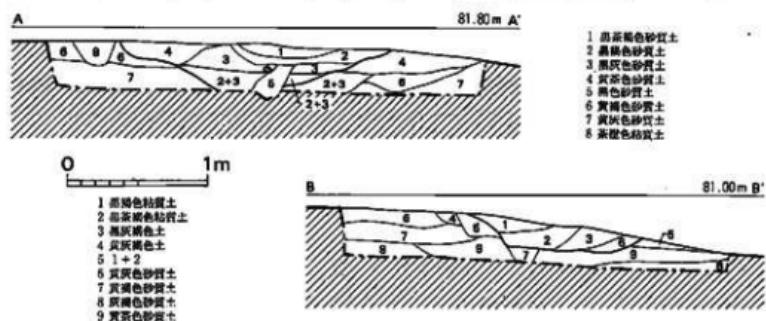
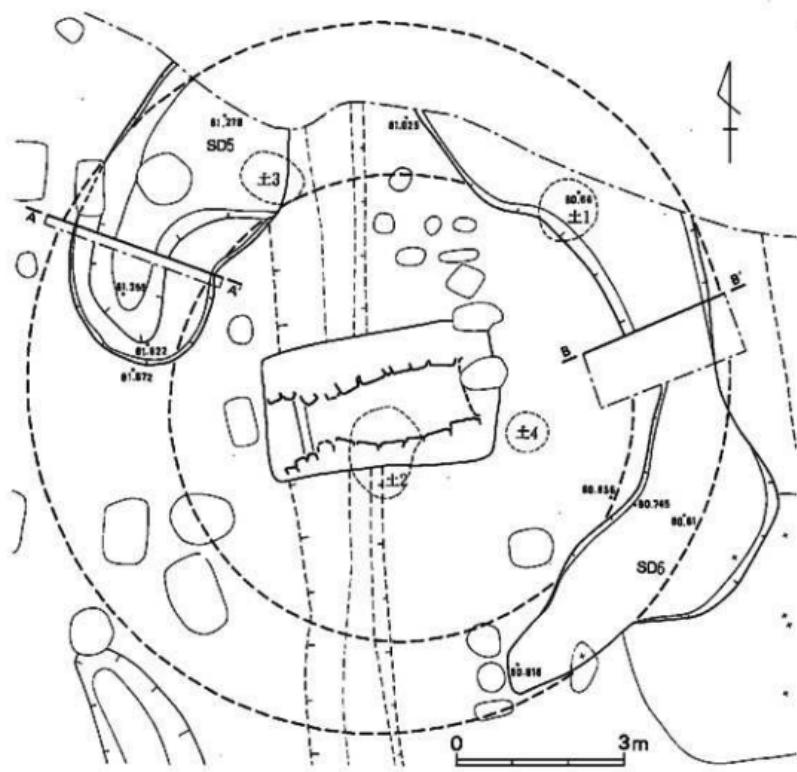
前庭部は側面に2~3個の石が外向きに「ハ」の字状に開いて貼り付いたように置かれている。
出土遺物（図版26、第12図1~14、22図1~3）

この古墳の周溝であろうとしたSD5・6からは古墳に直接関連するような土器は殆ど出土しておらず、異なった時期のものばかりである。1~3がSD5、4~13がSD6、14はSD6の下層のSD7から出土した。また石室掘り形内や周辺からも縄文土器・黒曜石・サヌカイト片などが出土しているが、これらはC区の遺物として後述する。

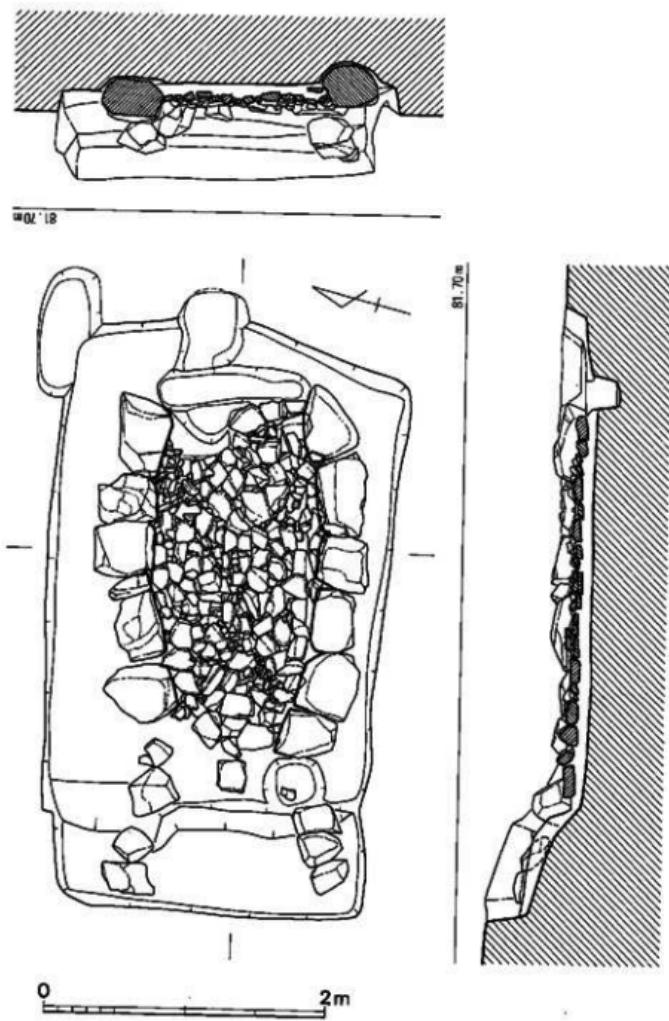
なお、C-3区内の1号墳主体部の東南部で2号墳主体部の北側、そして3号墳の西側付近の一帯、それは縄文時代の43~46号住居跡の上層にあたるが、そこから土師器が出土している。この幾つかの土器は1~3号墳のいずれかに関連するものであろうと捉えた。「1~3号墳間出土土器」として示すことにする。

縄文土器（4~7・14） 7が半精製で他は粗製である。4は口縁部に突起のあるもので、外面は横方向の擦過だが一部に刷毛目らしいものが見える。5~8は深鉢であろう。14は高台風の底部である。すべて晩期。

弥生土器（1・9・10） 3点とも壺の底部片で、9は接合部の剝離面が擬口縁状となる。後期



第10図 1号墳周溝実測図 (1/40・1/100)



第11図 1号墳石室実測図 (1/40)

であろう。

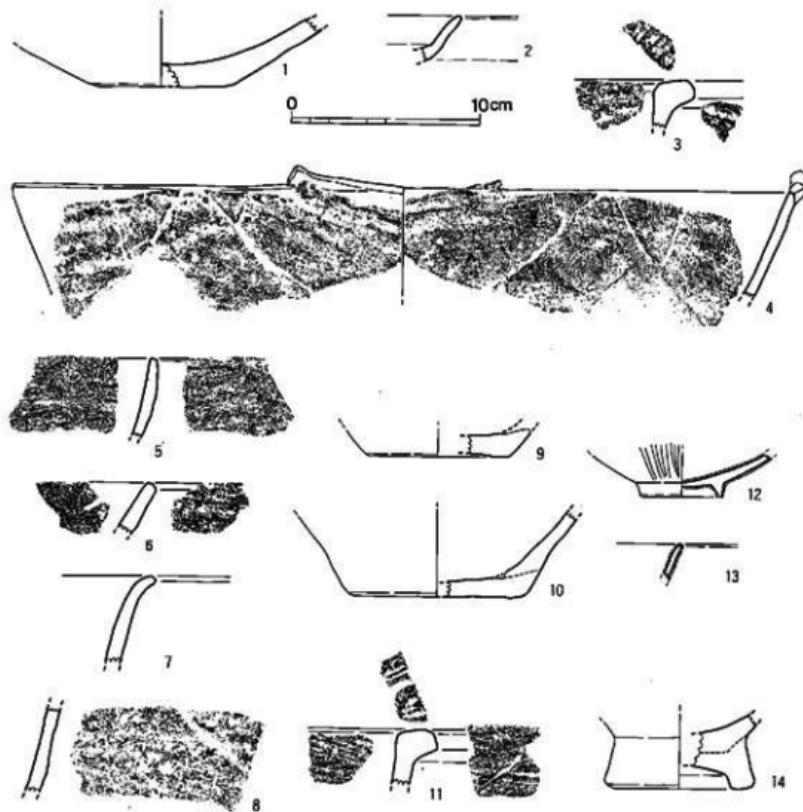
土器器 (2・3・11) 2は壺、3・11は土鍋の破片である。

磁器 (12・13) ともに龍泉窯系の青磁で、12は外面に連弁が入る。

鉄器 (第22図1~3) 3点とも鎌である。2は身に逆刺がつくかどうか不明。

● 1~3号墳間出土土器 (第13図1~9)

土器器 1~3は精製の椀で3は深みがある。復元で口径は1が13.7cm、3は15cm。4~6は



第12図 1号墳周溝 (SD 5・6) 出土土器実測図 (1/3)

高杯の破片で、ともに精製品である。7～9は壺もしくは壺で粗製である。9は復元口径17.6cm。

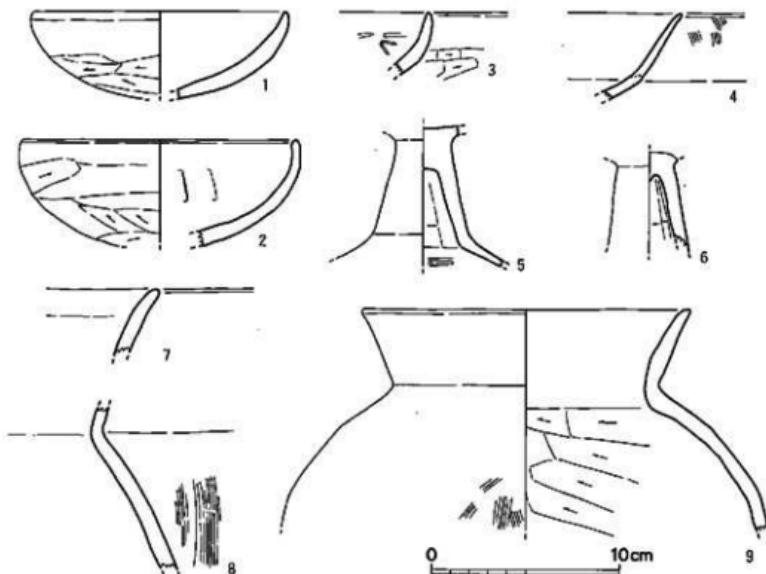
6が2号墳石室の西側で出土したほかは、1号墳石室の南側および東南部、縄文時代の43～46号住居跡の上層周辺から出土している。

2号墳（図版6、第14図）

C-3区と4区にまたがって南半部にあり、その段で削られている。主軸をN-69°-Eにおく石棺系の竪穴式石室が主体部である。周溝は確認できなかった。縄文時代の32～34・41号住居跡を切っている。

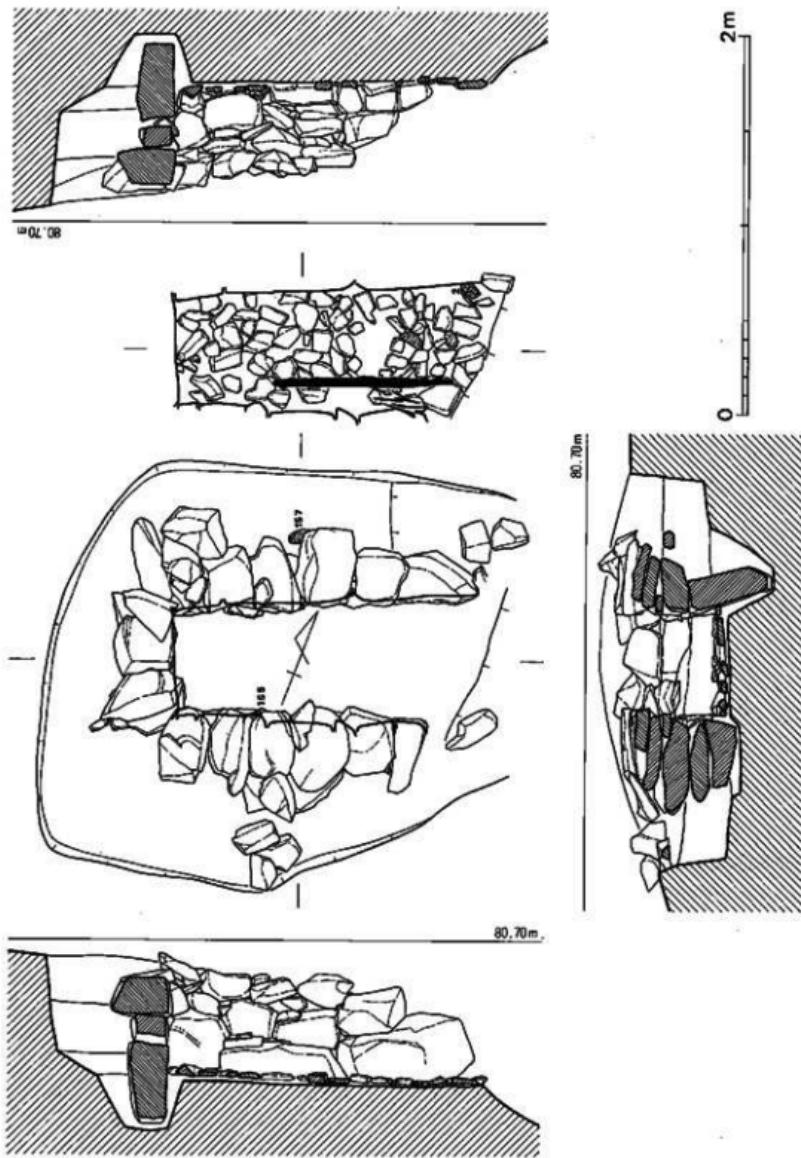
主体部掘り形は主軸にあわせて東西に長い長方形プランであるが、東半部が段落ちで削られている。南北が220cmで、東西は250cmまでが確認できる。推定で東西方向は350cmほどであろう。

石室も東側が削られて完存しない。室内は茶褐色粘質土で埋まっていた。床面で西小口部幅55cm、遺存する東端部の幅65cm、現存長176cmを測る。復元すれば200cm前後の長さであったと思われる。小口部は板石を横長に立て、その上に塊石2～3段が残る。側壁のうち北壁は小口



第13図 1～3号墳関連土器実測図 (1/3)

第14圖 2號磚室墓剖面圖 (1/30)



部と同じように横位置に板石を立てたのち塊石を積み上げるが、南壁は最下段から平積みの部分がある。床面から最大で55cmの高さまでが残っていた。壁材に作業台石を転用したものがある。また明確な控え積みは認められない。床面には敷石が置かれ、その中には砥石・石斧も転用されていた。南側壁寄りに鉄刀が切っ先を西に向けて、鐵鎌は先端を東に向けて副葬されていた。人骨は残っていなかったが、鉄刀のあり方から見て頭位は東であったろう。

出土遺物（図版26・34、第23図1～19、69図167）

鉄器（1～19） 1～17は鐵である。1は圭頭式1本に片刃式6本、2は片刃式が7本、3も片刃式が2本、4は2本の鎌と鉄板が銛着している。みな完形ではない。5～8も片刃式で完形の6は全長17.3cm。16・17は逆刺が深い。18は刀子であろう。19は直刀で切っ先を欠失し現存長99.2cm。復元すれば101cmほどとなろう。関部分の背には段が付くかどうかわからない。また茎は段の付くものかもしれない。

石器（第69図167） 石室の敷石に使われていた砥石である。砂岩で現存長10.8cm。中砥である。表面に赤色顔料が付着する。

3号墳（図版6、第15図）

C-4区内の北側、2号墳石室の8m北にある。石室の壁材は全て除去されており、床面の敷石しか残っていない。敷石の範囲すなわち石室の幅からみて北東に開口する竪穴系横口式石室であろう。主軸方位はN-147°-W。周溝は確認できない。

主体部掘り形は幅140cm、長さ250cmのやや脇張りをなす長方形プランで、北東部が37cmにわたって緩やかな傾斜で張り出している。ここが横口部の名残りであろう。

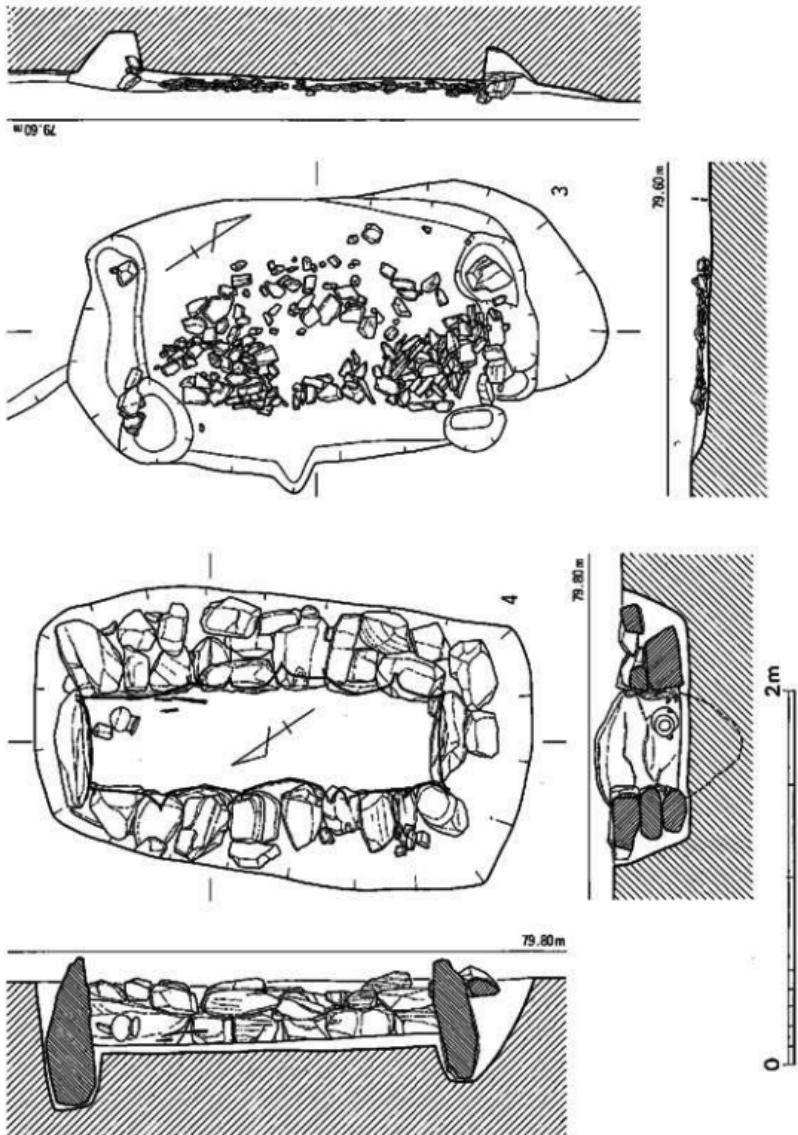
石室は前述のように壁材は一切残っていない。北東側の横口部にあたる所には袖石の抜き跡であるビットがあり、玄門幅は40cm前後であったことがわかる。また仕切石もあったとみてよい。南西部の奥壁にあたる所は溝状になっており、奥壁腰石が一枚石であったことを窺わせる。側壁を置くため掘り込みは南側両端に1個ずつあるのみでそのほかは見られなかった。敷石は床面全面に遺存しているわけではないが、そのあり方から見ると石室の幅は70～80cmであったと思われる。この幅は竪穴式石室にしてはやや広すぎるくらいがあるし、かつ北東側小口部の張り出した様相から竪穴系横口式石室と捉えたものである。床面全長は190cmほどに復元される。敷石には鮮やかな赤色顔料の塗布された痕跡をとどめている。主軸方位はN-147°-Wである。室内埋土中から鉄器のほか縄文晩期土器・黒曜石・サヌカイト剝片が出土している。

なお、前述のように縄文時代の43～46号住居跡上層から出土した土師器はこの古墳に関連する可能性もある。

出土遺物（図版26、第22図4）

鉄器 鐵の茎の破片であろう。

第15图 3·4号墓石室素描图 (1/30)



4号墳（図版7、第15回）

C-4区のほぼ中央付近ある。主軸をN-34°-Eにおく石棺系の堅穴式石室が主体部である。周溝は確認できなかった。

主体部掘り形は主軸にあわせて北東—南西に長い長方形プランで、幅110～150cm、長さ265cmを測る。

石室は両小口に扁平板石を縦長に立て、両側壁はともに6個の石を横長にして最下段に据え、その上は扁平気味の塊石を多くが小口積みしている。いま床面から35cmの高さまでが残る。床面は全長186cmで、小口部幅は北東側が49cm、南西側が46cmである。敷石はなく、床面には赤色顔料の痕跡があった。室内北東小口部に近い南寄りに、土師器壺が底部を東に向けて、鉄鍼が先端を東に向けて副葬されていたが、それらは床面よりわずかに浮いていた。

人骨は遺存していないが、小口部の幅と副葬品の位置から頭位は北東側であったと思われる。

前述の石室内遺物のほかに、掘り形内から土師器、繩文晩期土器、石器等が出土している。
出土遺物（図版22・26、第16図1、22図5～7）

土師器（1） 口縁の一部を欠くがほぼ完形の精製の壺である。丸底の底部に球形の胴部が付き、頸部はやや内湾しつつ外傾して開き、口縁部は外反する。頸部内外と胴部外面に丹塗りの



Photo. 1 作業風景 ①

痕跡があるが、底部付近はよくわからない。底部から胴部下半にかけて直径10cmほどの範囲に黒斑がある。口径10.2cm、頸部径7cm、胴部径13.4cm、器高14.5cm。

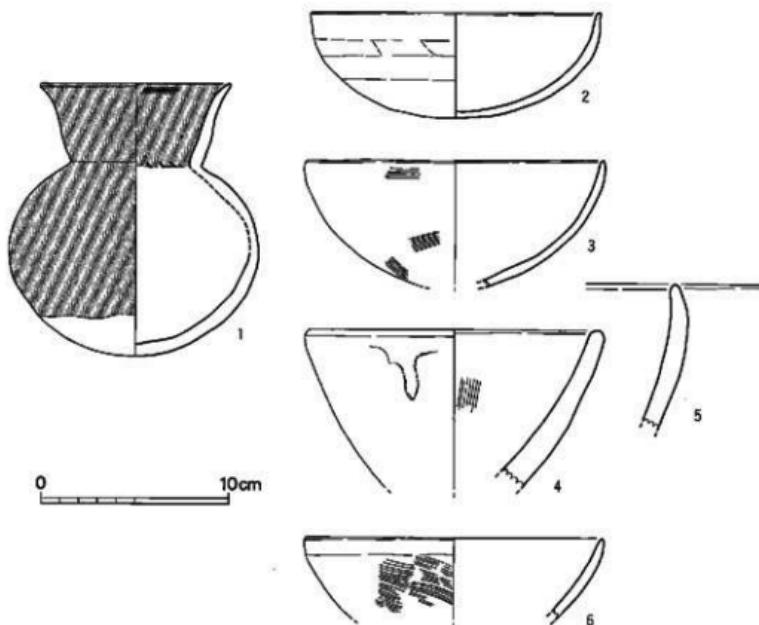
鉄器（第22図5～7） 3本とも鎌である。5は片丸造で、茎には外部桜皮巻きの矢柄が残る。6・7は片刃式である。

5号墳（図版8、第17図）

C-4区と5区にまたがってその北端にある。下段である東側はほとんど削平されていて石材は残らない。主軸をN-59°-Wにおく石棺系の竪穴式石室が主体部である。周溝は確認できない。同じ竪穴式石室を持つ4号墳主体部とは6.3mしか離れていないので、墳丘規模は半径3.5mとしても径7mを越える規模ではなかったとみてよい。

主体部の掘り形は主軸にあわせて北西-南東に長い長方形プランであったとみられるが、東半分は現存しない。

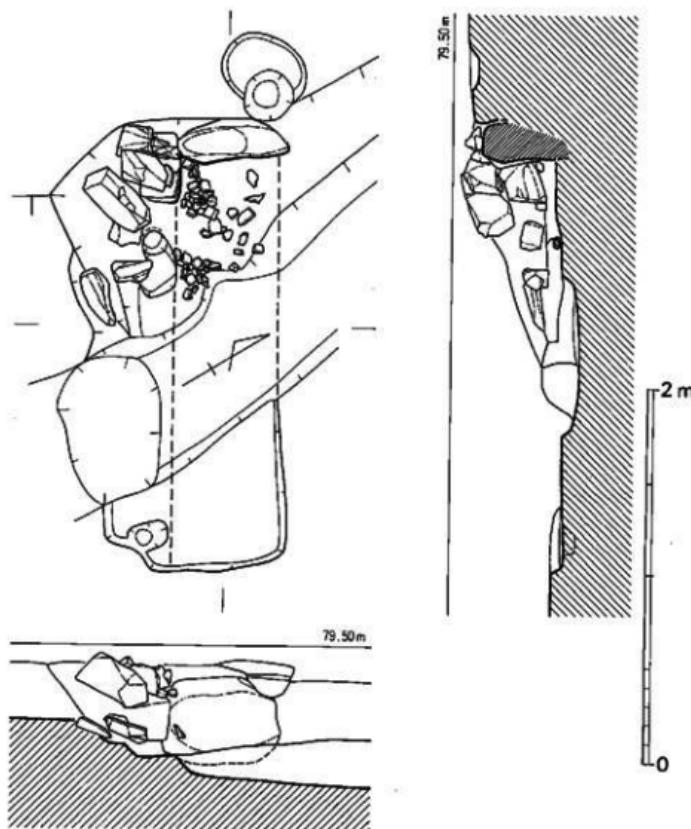
石室は北西小口部とその南壁のごく一部が残るのみである。小口には一枚石を横位置に据え、側壁は小口積みなので石棺系の竪穴式石室であることがわかる。床面には小さな赤色顔料の付



第16図 4号墳・1号墓出土土器実測図 (1/3)

着した砾石が敷かれているがこれも一部しか遺存しない。段落ち下部の浅い溝をはさんで東側は床面プランの延長と思われる部分が一段低くなっている。床面規模は推定で幅55~60cm、長さ200cmほどであったと思われる。

石室内に遺物はなく、掘り形内から土師器、縄文晩期土器などが出土しているが、この石室に伴うものではない。

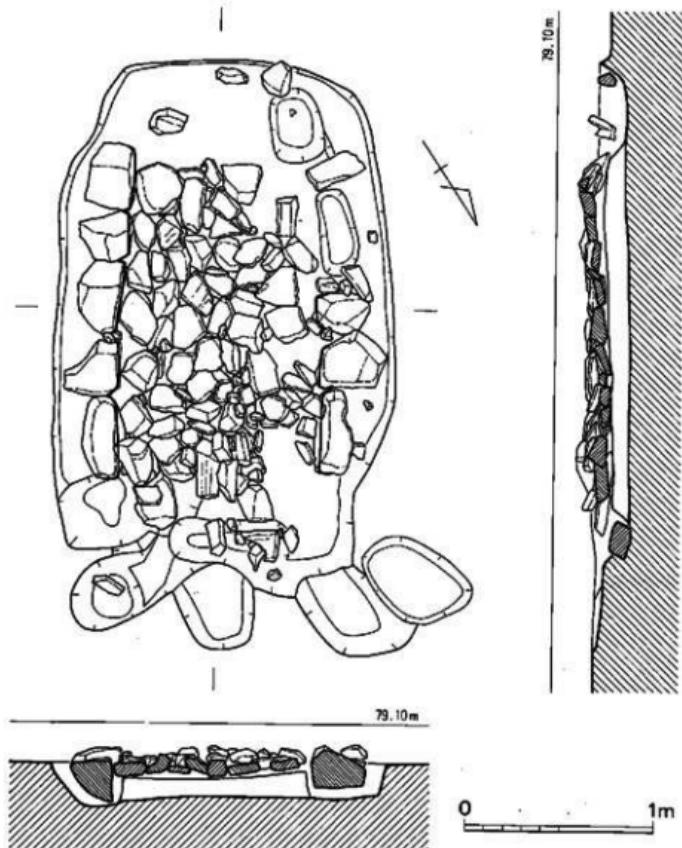


第17図 5号墳石室実測図 (1/30)

6号墳(図版8、第18図)

C-5区の南半寄りにある。石材は大半が除去されているが、北東に開口すると思われる竪穴系横口式石室である。6号住居跡を切っている。主軸方位はN-146°-W。周溝は確認できない。後述の7号墳主体部掘り形との距離が4mしかないので、もと存したであろう墳丘は最大でも直径10mを越えるものではない。

主体部掘り形は140~180×285cmの長方形プランで、やや胴張りとなる。北東部に浅い掘り



第18図 6号墳石室実測図 (1/30)

込みが接続するが、これは階段状になっていた横口部の最下段の部分の名残りであろう。

玄室は両側壁最下段の石が、東壁が5個、西壁が3個残る。最下段から平積みもしくは小口積みの形態をとる。奥壁は一枚の板石が立っていたのかどうかわからない。玄門部は溝状の抜き跡があるので仕切石があったものと思われる。敷石は大きめの礫石を置いている。敷石から見て床面はほぼ長方形のプランをなし、奥壁幅92~100cm、玄門部側幅108cm、長さ200cmほどに復元されよう。玄門幅は推定で70cmを測る。

玄室内からの出土遺物はなく、石室掘り方および石材抜き跡から土師器、瓦器、陶器、繩文晩期土器、黒曜石・サヌカイトの鏃や剣片、叩石が出土している。これらは後述する。

7号墳（図版8~10、第19回）

C-5区の南端にあり、6号墳の掘り形とは4mしか離れていない。主軸をN-17°-Eにおく石棺系の竪穴式石室が主体部である。周溝は確認できなかった。7~9号住居跡を切っている。この遺跡における石室の中では最も遺存状態がよいが、天井石が除去されていることを含めてすでに石室内は一部が荒らされた痕跡がある。

主体部掘り形は主軸にあわせて南北に長いが、幅190~260cm、長さ330cmあまりの台形に近いプランをなす。

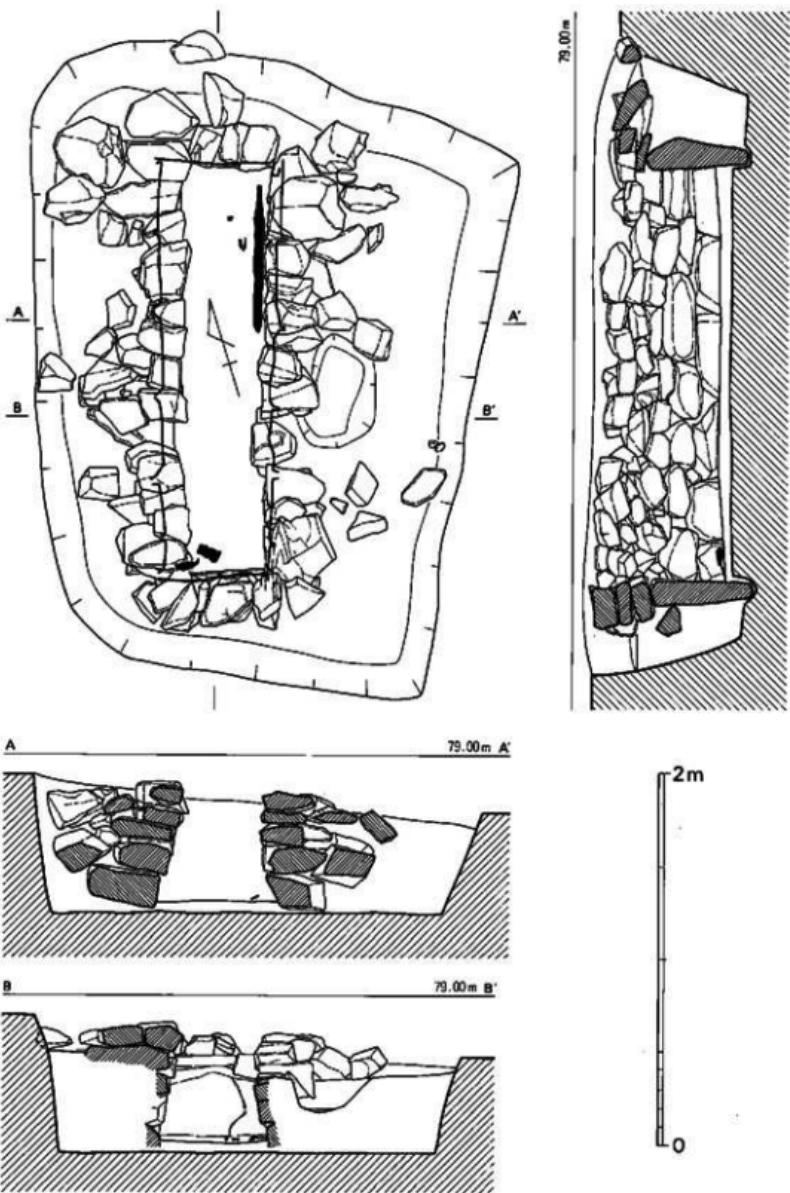
石室は両小口に扁平板石を横長に立て、両側壁はともに6個の石を横長にして最下段に据え、その上は扁平気味の塊石を小口積みしている。両側壁は上部に向かって徐々に内傾し、西壁の方が内傾度が大きい。いま床面から最大70cmの高さまでが残る。おそらく室内高はこの程度であり、この上に天井石が架けられていたであろう。南小口部の壁材には作業台石が転用されていた。図示していない石もあるが、控え積みがなされている。床面は全長220cmで、小口部幅は北側が64cm、南側が55cmである。敷石はなく、床面下には灰茶褐色弱粘質土が敷かれていた。床面・壁面には赤色顔料が塗布されており、分析を行っていないが、その色はベンガラというよりは朱に近い赤色であった。床面の北小口部に近い東壁寄りに鉄刀が切っ先を南に向けて副葬され、その周囲に刀子、鏃片などがあった。また南小口部には鐵鏃と鐵矛が副葬されていた。

人骨は遺存していないが、小口部の幅と副葬品の位置から頭位は北側であったと思われる。

前述の石室内遺物のほかに、石室埋土中および掘り形内から土師器、須恵器、白磁、繩文晩期土器、鐵器、石器等が出土している。

出土遺物（図版26、第23回20~28、69回166）

鐵器（20~28） 20は鏃の破片。21は鏃で全長13.1cm。22・23は刀子片。24は不明鐵片。25・26も不明品。27は斧で全長11cm、刃部幅4.6cm。28は刀で切っ先のごく一部を欠失するが全長77cmに復元される。茎に目釘穴が1個は確認できる。関の近くに木質が銹着しているのは輸入で副葬されたためか、または木棺の棺材のいずれかであろう。23が石室埋土中、25・26が掘



第19図 7号填石室実測図 (1/30)

り方内の出土で、他は石室床面にあった。

石器（第69図166） 石室南小口部壁体に使用されていた作業台石である。表裏ともにとてもよく磨れて寝んでいる。一部に敲打痕がある。重さ8.15kg。

8号墳（図版11、第20回）

D区内の東寄りにある。主体部は石材の多くが除去されているが、南西に開口する竪穴系横口式石室もしくは横穴式石室であろう。1・3・5号墳の例からして前者であった可能性が高い。主軸方位はN-53°-E。

主体部中心から3.5mほど西側に、幅100cm、深さ8~13cmの浅い溝が僅かに弧を描いて南北方向に長さ5mほど検出されたが、これが周溝の一部かもしれない。そうであれば、墳丘径は7m、周溝を含めても9mほどの規模ということになる。

主体部の掘り形は幅220cmで、長さ285cm以上の長方形プランとみてよいが、南西部は低くなっている遺存しない。

玄室は両側壁最下段の石が、東南壁が2個、北西壁が5個残る。この最下段の石は石室構築時に玄門部側、すなわち南西側から奥壁側に向かって順に平積みもしくは小口積みの置き方で掘えていたことがわかる。石材は花崗岩と頁岩が用いられている。北東部の奥壁にあたる所は溝状になっており、奥壁腰石が一枚石であったことを窺わせる。敷石は小さ目の角礫が置かれ、赤色顔料の付着したものがあった。玄門部側が不明瞭であるが、床面は長方形のプランをなし、奥壁幅80cm、玄門部側幅85cm、長さ190cmほどに復元されよう。

玄室内からは鉄器と土師器の破片が出土している。

出土遺物（図版26、第22図8~15）

鉄器 8~13は鐵の破片で、8・9は片丸造である。12・13には矢柄の一部が遺存する。14・15は刀子で、14はもと鹿角装であったらしい。全長17.6cm。

1号墓（図版11、第21回）

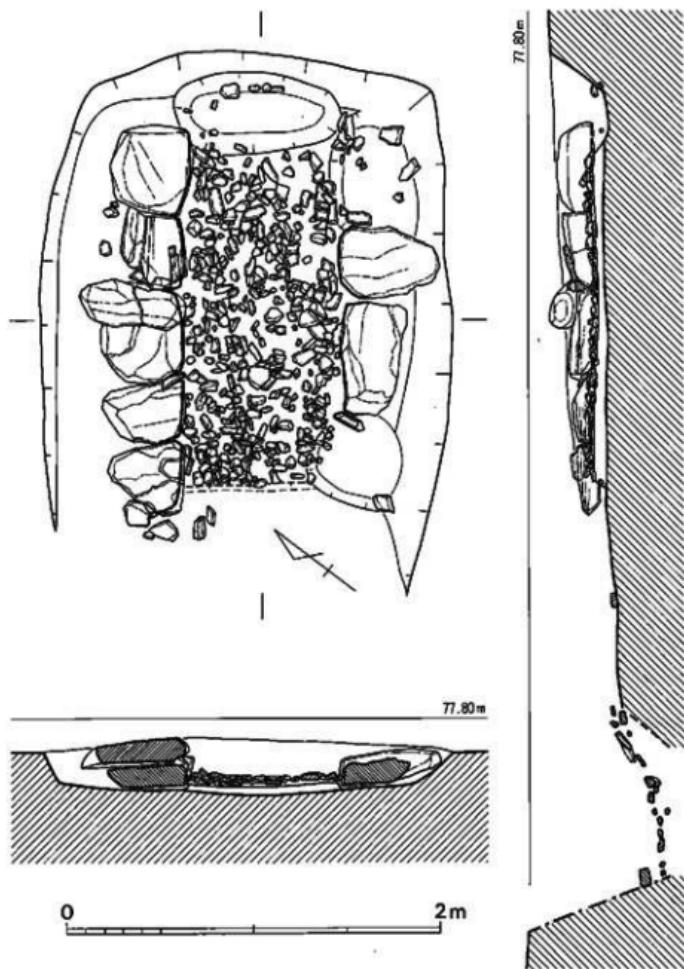
C-5区の南側、7号墳のすぐ北にあり、箱形の木棺墓と思われる。主軸をN-77.5°-Eにおくので、7号墳石室と大略直交する方向をとる。位置からみて7号墳に付属していた可能性が高いものと考えられる。

二段掘りとなって、一段目は最大幅116cm、長さ230cmの丸みをもった長方形プランであり、主体である二段目は床面で幅38~42cm、長さ164cmを測る。中央付近の横断面土層では木棺棺材の厚さが約2cmであった。床面は西から東へと低く傾斜している。

一段目の西小口部北側から土師器碗が出土しているが、これは木棺埋置時に棺外を埋め戻す前に置かれたものであろう。また、二段目の棺の埋土中に土器片や安山岩礫があったが、これ

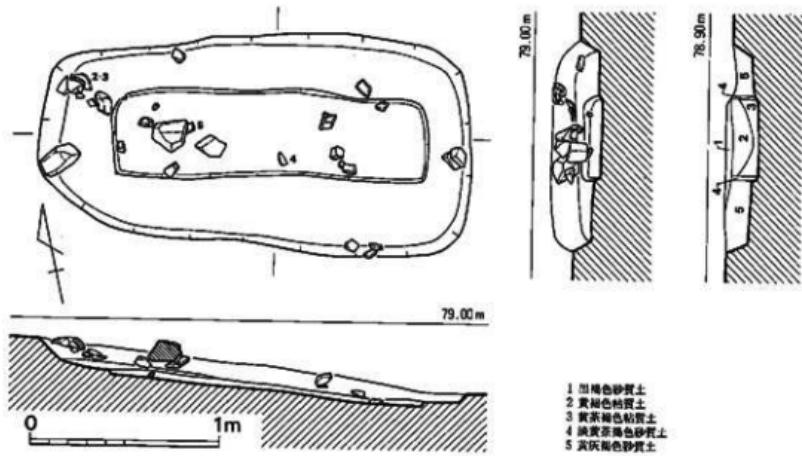
らは棺の上部に置かれていたものとみられる。

出土遺物（図版22、第16図2～6）

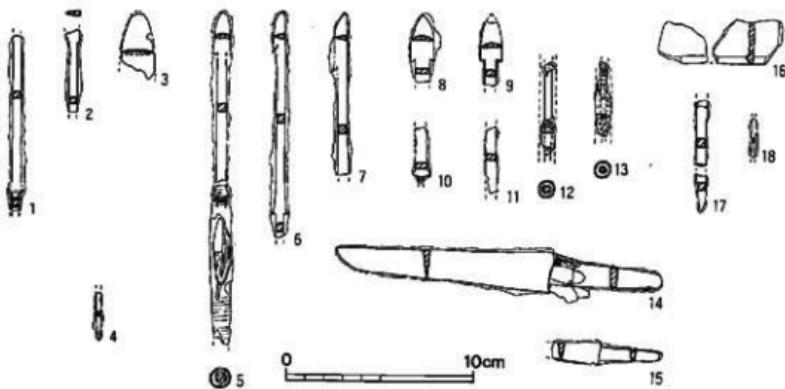


第20図 8号墳石室実測図 (1/30)

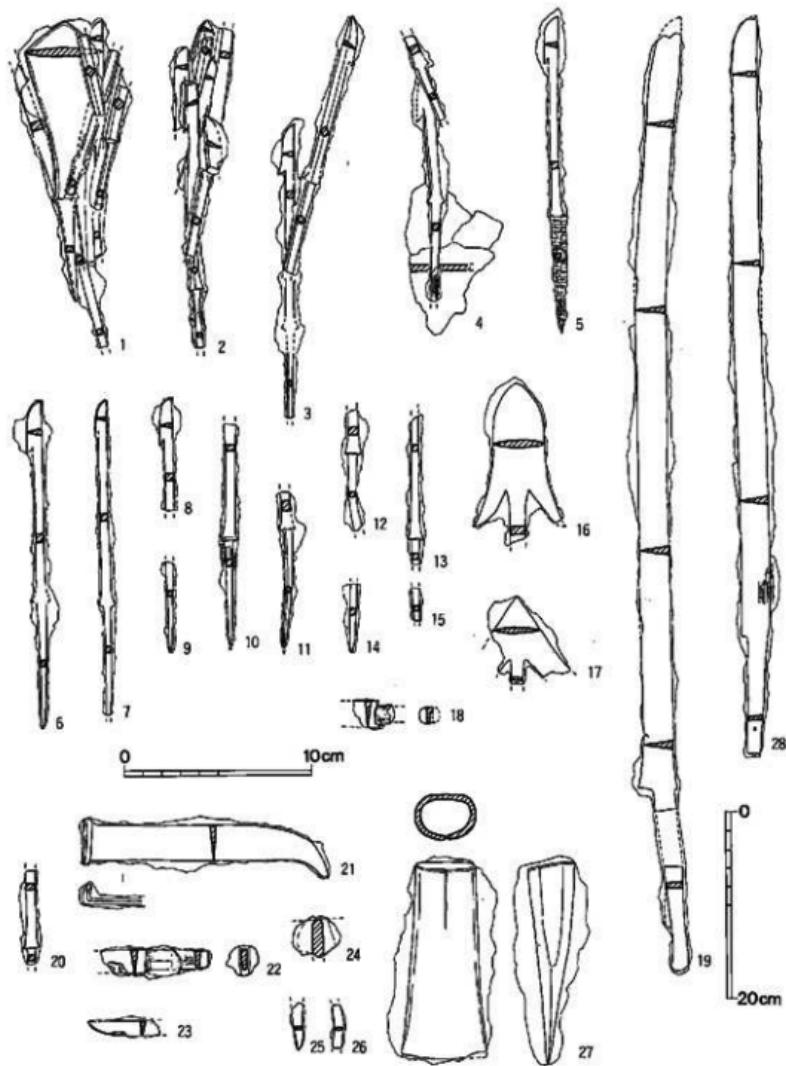
土器（2～6） 2・3・6は楕で、いずれも精製品である。2は口縁が僅かに外反し、口径15.5cm。3・6はともに復元口径15.8cmで外面に刷毛目が残る。4・5は粗製の鉢で、口縁の形態と傾きに違いがあるものの同一個体の可能性がある。4の復元口径15.4cm。2・3は一段目の西小口部棺外、4・5は二段目の棺の埋土中、6は棺外埋土中から出土した。



第21図 1号基実測図 (1/30)



第22図 1・3・4・8号墳、SR1出土鐵器実測図 (1/3)



第23図 2・7号墳出土鉄器実測図 (1/3・1/6)

2. 壁穴住居跡

古墳時代以降のものがC-3～5区に9軒（1～9号）、縄文時代晩期のものはC-2・3区にてそれぞれに全てが重複して27軒（21～47号）が検出された。住居跡としてやや不自然と思えるものもあったが、いまは調査時のままで報告する。古墳時代以降の1～9号住居跡から出土した遺物のうち混入の縄文土器はそのままここで触れるが、石器については後述する。

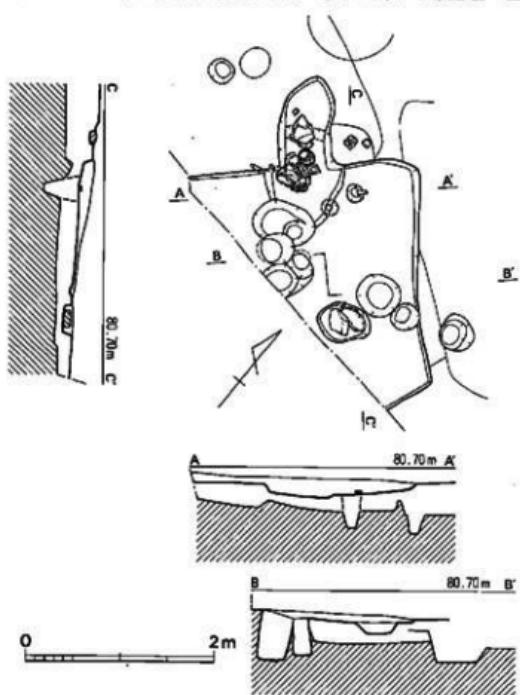
1号住居跡（図版13、第24・25図）

C-3区の南端にあり、縄文時代の34～38号住居跡を切っている。北東辺の2.3mは全部見えるが、住居の半分ほどが調査区外にある。2.5mまで検出された北西辺のやや北寄りにカマドが築かれている。主柱穴は特定できない。埋土中から須恵器・土師器の破片のほか混入の縄文

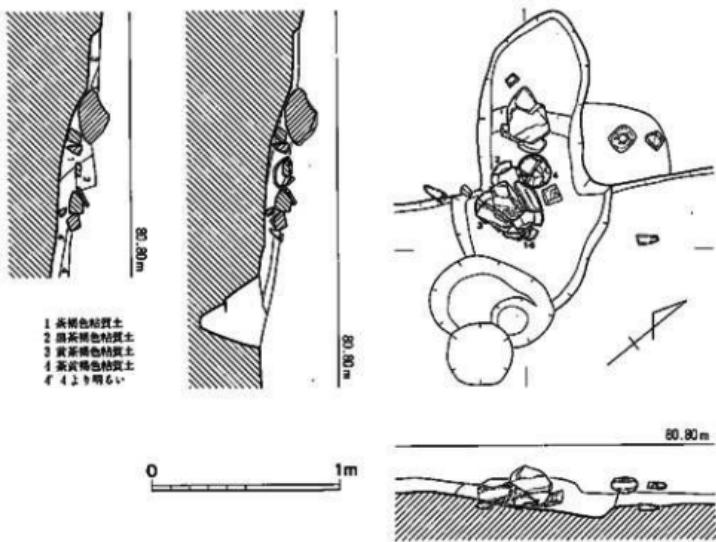
晩期土器、中世の土師器が出土している。

カマド（図版13、第25図）

北西辺から95cmが突出しているが、通常のカマドのように凸字形にならず、また住居内に袖が見られないこともあって、やや明確でないところがある。焚口部分とすべき所は一段低くなっている。支脚も見あたらないが、本来支脚が存するあたりには土師器碗の上に礫石が落ちてきたような状況が見られた。またこのカマドの北に住居に切られて焼土の入った部分があったが、これが住居に関連するものかどうかわからない。石斧やすり石も出土しているが、これらは29号住居跡に属していたものであろう。



第24図 1号住居跡実測図 (1/60)



第25図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (図版22、第28図1~9)

土器器 (1~9) 1~4は半精製の椀で、底部から口縁下2.2~2.8cmまではケズリもしくは強い擦過を施し、ほぼ完形に近い2~4には刷毛目が残る。口径と底径は1が15.3cmと6.0cm、2が15.8cmと6.0cm、3が16.2cmと6.5cm、4が15.5cmと6.9cm。5・6は精製の椀で、5は口縁が外反する。5の復元口径16.2cm。7は壊か。8・9は小皿の破片である。外底部は糸切りかと思われるが、磨滅して不明。1~5はカマド内の出土。

2号住居跡 (図版12、第26図)

C-4区の南端にあり、SX2に切られ、3号住居跡を切っている。南側は調査区外にかかる。北辺は直線であるが、西辺の南側は弧を描いており、住居として不自然なところもある。主柱穴も不明。カマドはない。縄文晩期土器片と打欠石錐 (第64図109)、黒曜石・サヌカイト剝片が出土しているが、全て混入である。

3号住居跡 (図版12、第26図)

C-4区の南端に近く、SX2と2号住居跡に切られている。主柱穴も含めて詳細は不明。カマドは見あたらない。土器器片のほか混入の縄文晩期土器片と打欠石錐 (第64図110)、黒曜石・サヌカイト剝片が出土している。

出土遺物（第28図-1～4）

縄文土器（1～3） 1は外面口縁下に沈線が入る深鉢。2は直口の鉢で口唇部に窪みがある。

3は壺でろうか。いずれも粗製。

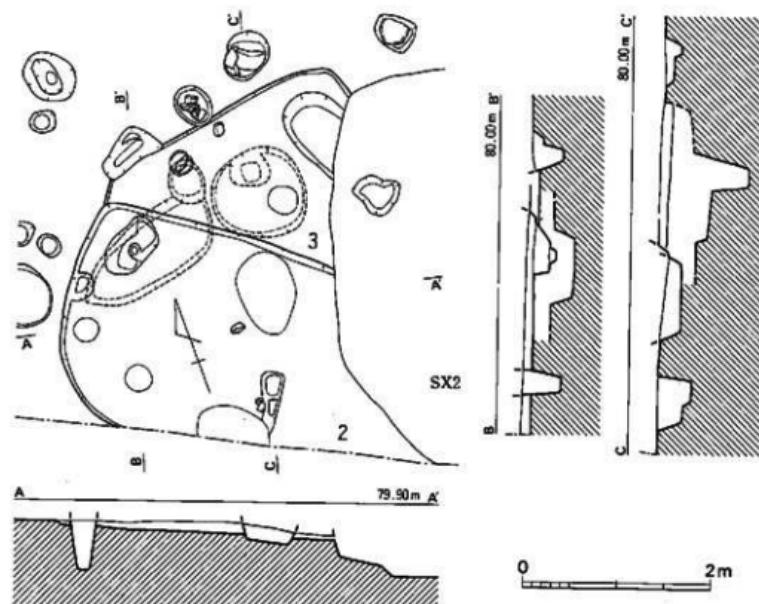
土師器（4） 精製品で壺になろうか。

4号住居跡（図版12、第27図）

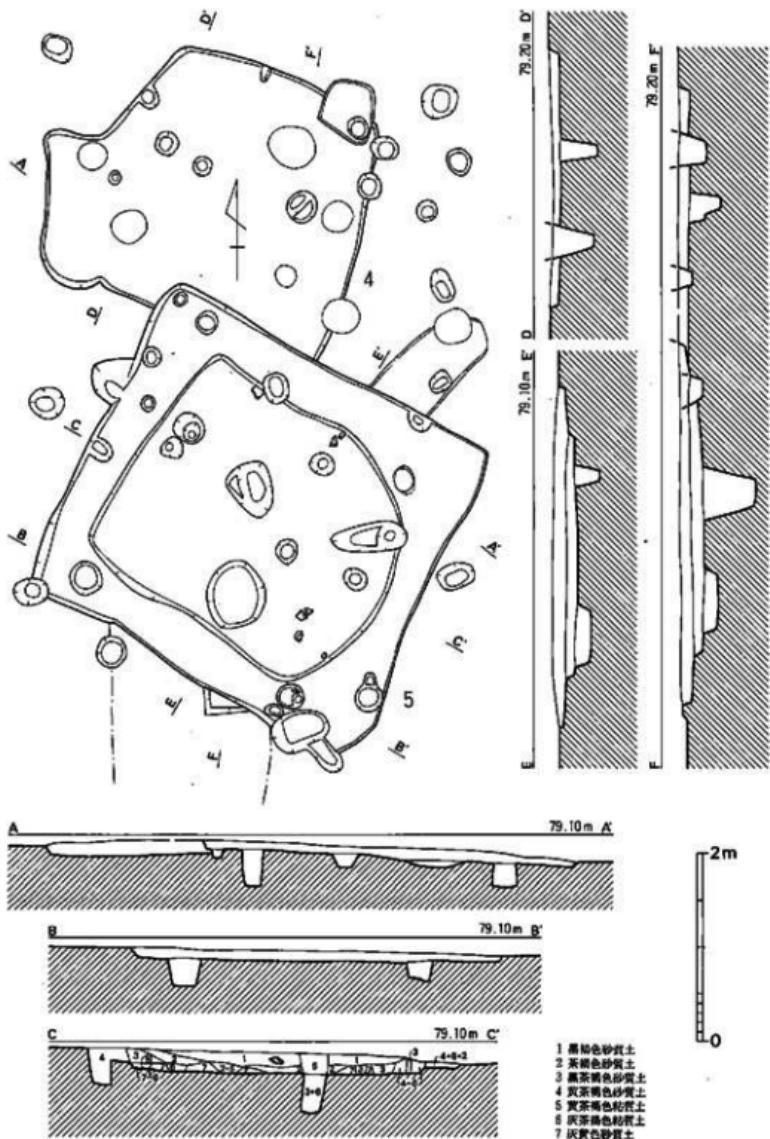
C-5区の北端に近く、5号住居跡に切られてその北にある。北辺が2.3mで、南北間2.8mを測る。西南部が張り出しているのは別の遺構との重複があったのかもしれないが確認できなかった。現状で面積は7.5m²。柱穴は床面に5個あるが、主柱穴は特定できない。カマドはない。混入の中世土器と縄文晩期土器片が出土した。

出土遺物（第28図1・2）

土師器（1） 外底部が糸切りの小皿である。復元口径8cm、底径6.1cm、器高1.3cm。



第26図 2・3号住居跡実測図 (1/60)

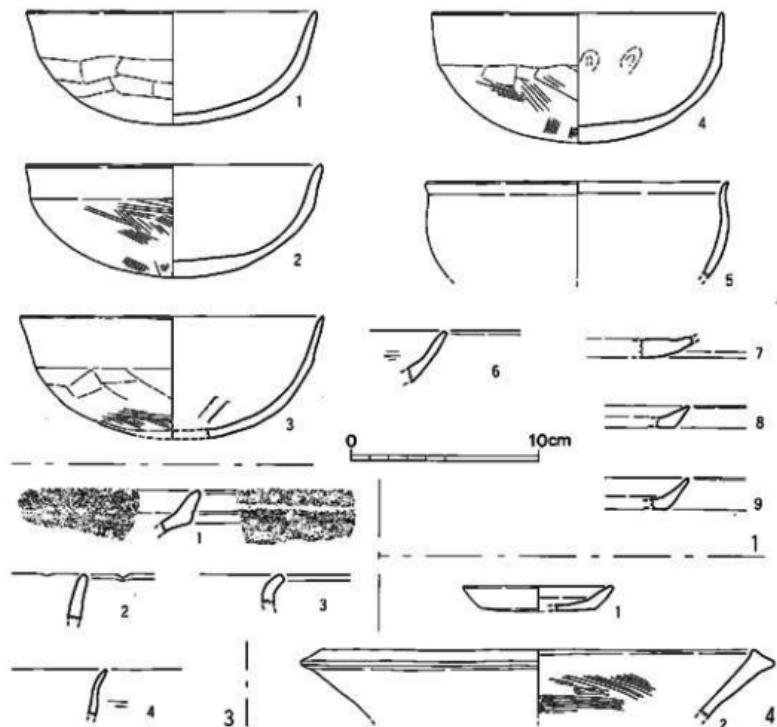


第27図 4・5号住居跡実測図 (1/60)

瓦質土器（2） すり鉢の破片である。復元口径23cm。住居を切る新しいピットからの出土であるからこの住居に伴うものではない。1の土器も混入である。

5号住居跡（図版12、第27図）

4号住居跡を切ってその南にある。3.5×3.9mほどの長方形プランをなし、面積は13.3m²。周壁に沿うかたちで内側の2.5×3.1mの範囲が10cmほど低くなっていて、この四隅の高まりはベッド状造構のごとく見えるが、果たしてその性格はわからない。主柱穴は四隅に近い所にある4個と考える。カマドはない。埋土中から土師器のほか青磁や繩文晩期土器、石錘（第64図111）、棒状石器（第65図119・120）、サヌカイトの鏡（第60図49・50）や黒曜石剣片、すり石が出土している。



第28図 1・3・4号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（図版24、第31図1～12）

縄文土器（1～7） 1・2は半精製、3は精製の鉢である。1の外面口縁下には二条の沈線の下に弧状の凹線が入る。4は半精製、5は粗製の深鉢になる。6の粗製の外底部には薺のような圧痕がある。7は口縁が波打つ形状で粗製である。これのみ中期阿高式系か。

土師器（8～12） 8～11は高环の破片で、いずれも精製品である。8は復元口径16.8cm。10は脚根の可能性もある。11は环部との接合面には刺突痕がある。12は瓦質に近い。摘みであろうか。

6号住居跡（図版13、第29図）

5号住居跡の南にあり、6号墳に切られている。東辺の長さ2.4mがわかるのみだが、たとえ長方形プランになったとしても東西長が3mは越えない。床面に柱穴は2個しかなく主柱は不明。埋土中から土師器、縄文晩期土器などが出土している。

出土遺物（第31図1）

縄文土器 底部片で底径10.2cm。

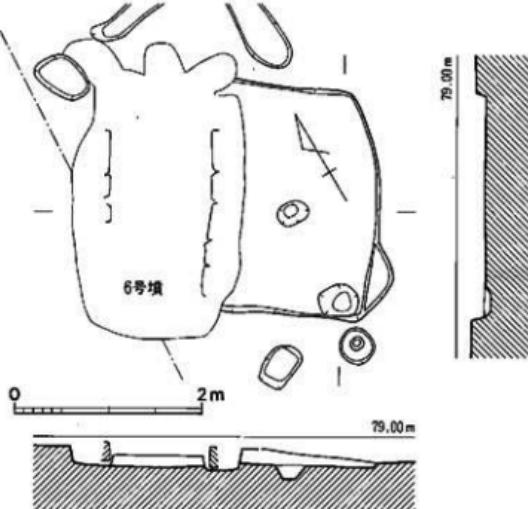
7号住居跡（図版13、第30図）

C-5区の南端近くにある。

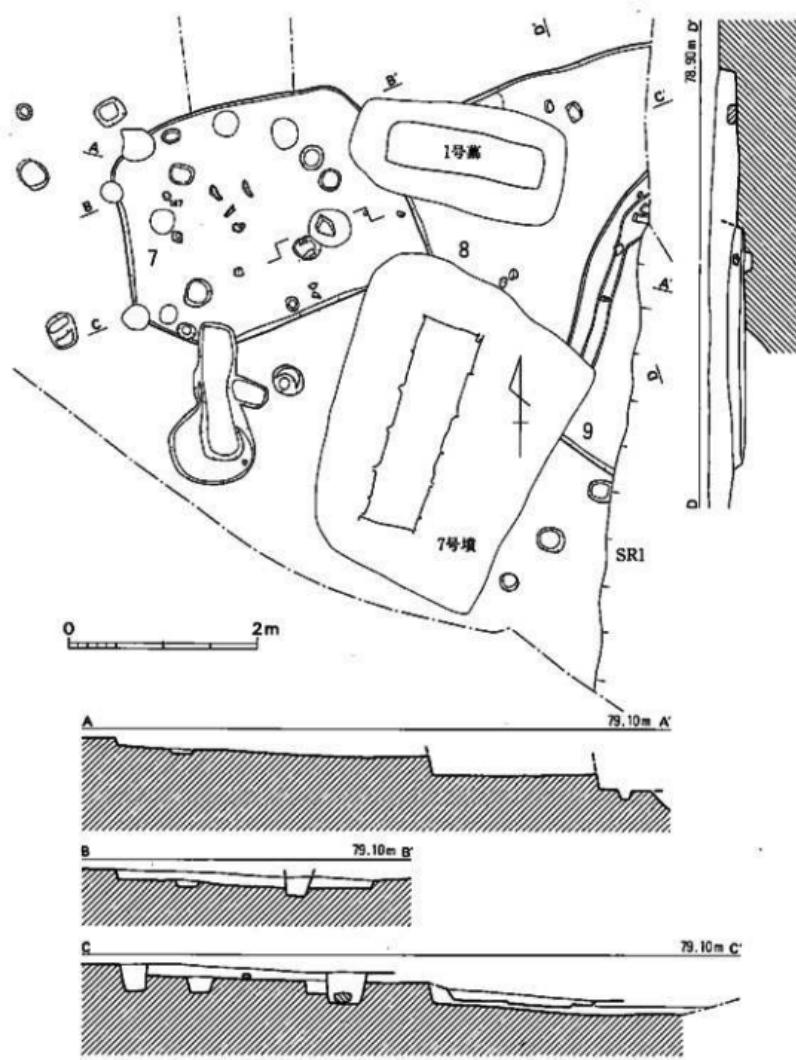
7号墳・1号墓・8号住居跡に切られている。東西長が2.7～3.1m、南北長が2.2～2.45mの長方形プランをなし、面積は現状で6.3m²。主柱穴は4個であろうか。カマドはない。埋土中から土師器のほか縄文晩期土器、床面からすり石（第67図147・148）などが出土している。

出土遺物（第31図1）

縄文土器 晩期の深鉢の破片である。内外ともミガキが施される。



第29図 6号住居跡実測図 (1/60)



第30図 7～9号居住跡実測図 (1/60)

8号住居跡（図版4、第30図）

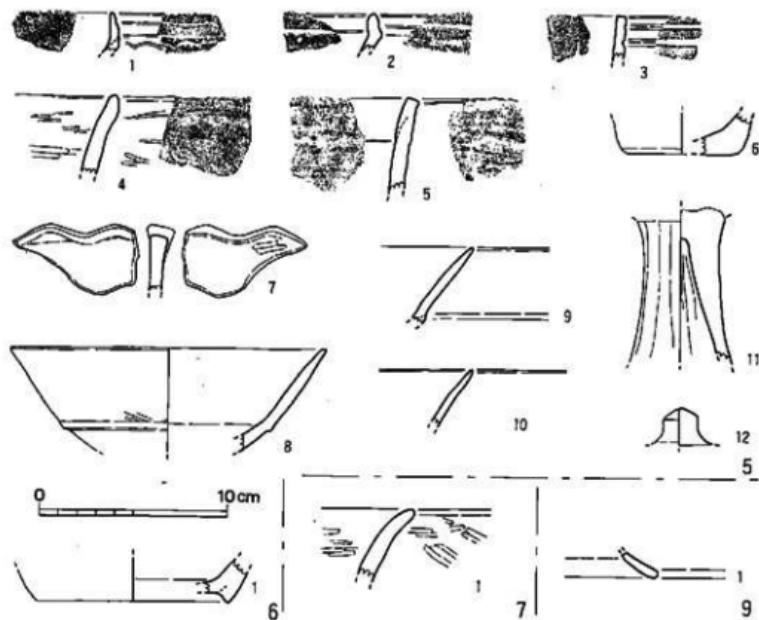
7号墳・1号墓・9号住居跡に切られ、7号住居跡を切っている。調査区外にかかる部分もあって全容は不明。北辺の西寄りで1号墓に切られて焼土が検出された。床面に柱穴は全くなかった。埋土中から土師器が出土しているが図示しえない。

9号住居跡（図版4、第30図）

7号墳に切られ、8号住居跡を切っている。ごく一部の検出なので詳細は不明。土師器と縄文晩期土器片が出土している。

出土遺物（第31図1）

土師器 高環の脚器と思われる破片である。精製品。



第31図 5～7・9号住居跡出土土器実測図 (1/3)

21号住居跡（図版15、第32図）

C-2区の中央付近にある。24号住居跡を切り、22号住居跡に切られている。西辺の約3mが残るのみで、南辺は2.3mの東は段落ちで削平されている。方形もしくは長方形プランであったろう。床面に柱穴は全くなかった。土器は少なく、石器には鐵・斧・すり石・剝片があった。

出土遺物（図版27、第33図1、60図15）

縄文土器（1） 粗製の鉢の破片である。後期の西平式系か。

石器（15） サヌカイト製の両翼の広がった鎌で、ごく一部を欠失する。全長13.7mm、幅18.5mm、厚さ3.4mm、重さ0.5g。

22号住居跡（図版15、第32図）

東側を23号住居跡と1号墳主体部に切られ、21・24・25・26号住居跡を切っている。南北長が3.1～3.6mで、東西長は2.6m以上になる。方形もしくは台形に近いプランであったろう。この住居も床面に柱穴はなかった。土器のほか、石器には鐵・斧・すり石・台石・スクレイパー・剝片があった。

出土遺物（図版27・29・32、第33図1～16、60図16～18、62図77、64図91～93、66図121）

縄文土器（1～16） 晩期土器で1～4は鉢、5～8は浅鉢になろう。10は椀状の鉢か。6はきわめて薄い造りである。10が精製、4・5・7・9は半精製、1～3・6・8・11～16は粗製である。

石器（16～18・77・91～93・121） 16・17は黒曜石の剝片鐵、18は泥岩かと思われる材質の鐵で、いずれも脚を欠失している。18の全長29.3mm。

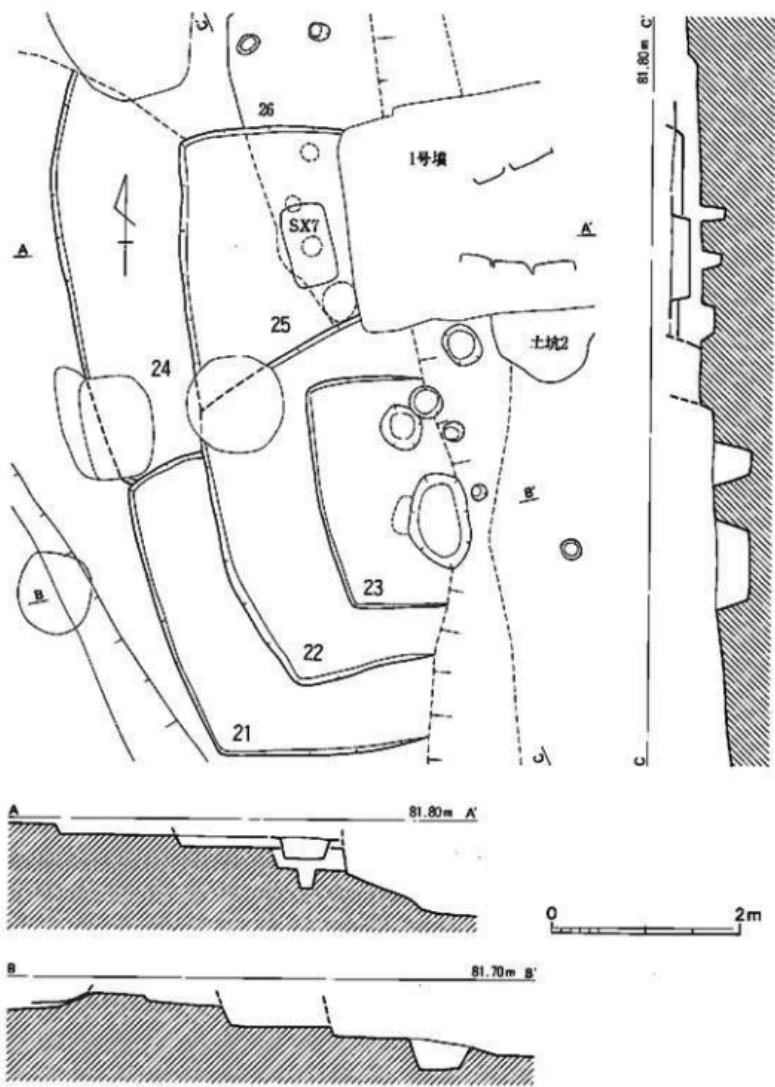
77は幅の狭い局部磨製石斧で刃部は明瞭でない。灰緑色の片岩である。一側面に小さな座みが多数あるのは敲打痕らしい。現存長105.3mm、幅15.9mm。

91～93は玄武岩質の打欠石鏸であるが、91については上下両端が打欠きというより敲打痕のようなので叩石とすべきかも知れない。92・93は表裏面ともによく磨れていて平らかである。鏸以外の用途があったのだろうか。長さ、幅、厚さ、重さは順に91が32mm・44mm・26mm・63.6g、92が46mm・41mm・14mm・40.1g、93が57mm・35mm・14mm・44gである。

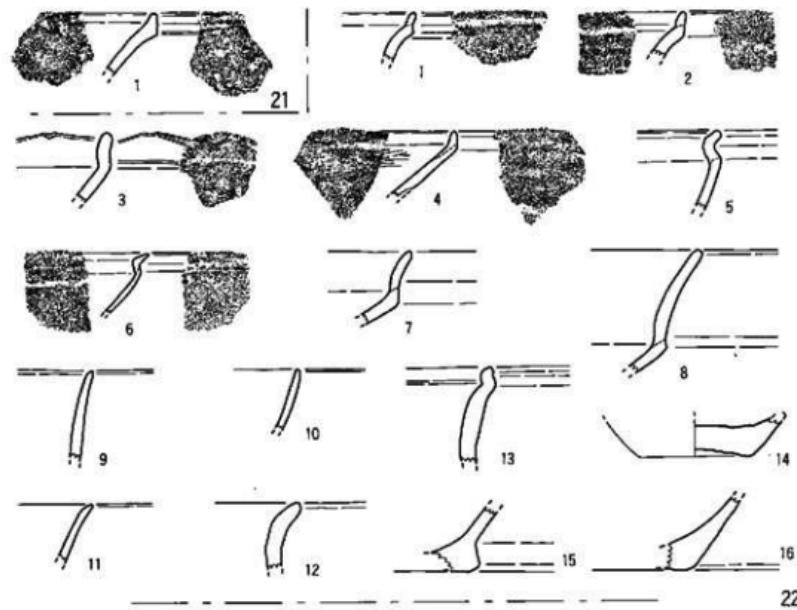
121は側面の一部に敲打痕のある玄武岩質石材で、叩石もしくは台石であろう。長さ168mm、幅131mm、厚さ89mm、重さ2730g。

23号住居跡（図版15、第32図）

22号住居跡のなかにすっぽり納まった格好で検出された。南北長は2.4mで、東西長は1.5m以上になる。方形に近いプランであろう。床面中央のやや南寄りに焼土があった。主柱穴は不明である。土器のほか、石器には斧・瑪瑙質石材の剝片があった。



第32図 21～25号住居跡実測図 (1/60)



第33図 21~23号住跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物（第33図1・2）

縄文土器（1・2）ともに晩期の粗製の深鉢である。1は壺の形状とも受け取れるが定かでない。1の復元口径19.2cm、2の肩部径32.8cm。

24号住居跡（図版15、第32図）

1号墳主体部の西にあり、21・22・25号住居跡に切られている。南北長は4.4m以上になる。床面に柱穴はなかった。少量の土器のほか、サヌカイトの剝片が出土している。

出土遺物（第36図1～4）

縄文土器（1～4）1～3は胎土に滑石粉末を入れた中期・阿高式系の土器である。3点ともに同一個体かもしれない。4は晩期の底部片。

25号住居跡（図版15、第32図）

1号墳主体部とS X 7、22号住居跡に切られ、24・26号住居跡を切っている。北辺と西辺の一部しかわからず柱穴も不明である。少量の土器のほか、黒曜石・サヌカイトの剝片が出土している。

出土遺物（第36図1・2）

縄文土器（1・2）ともに晩期の粗製の鉢である。

26号住居跡（図版15、第34図）

1号墳主体部と25号住居跡に切られ、27号住居跡を切っている。南北長は3.5m以上、東西長は1.5m以上となる。西辺の一部は25号住居跡の下層から検出された。柱穴は床面にいくつかあるが特定できない。少量の縄文晩期土器があるも図示できない。黒曜石の錐とサヌカイトの剝片が出土している。

出土遺物（図版27、第59図6）

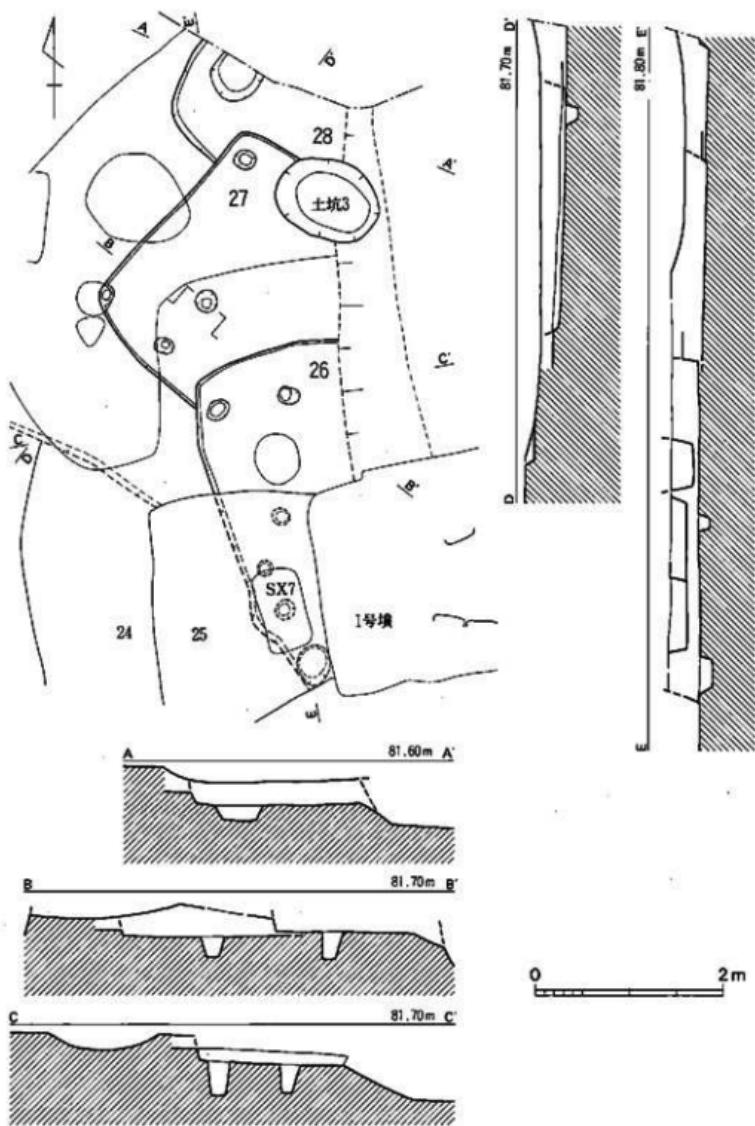
石器 少し透明がかかった黒曜石の錐で先端を欠く。残存部に使用痕はない。現存長29.1mm、幅18.2mm、厚さ4mm、重さ1.6g。

27号住居跡（図版15、第34図）

26号住居跡に切られてその北にあり、3号土坑にも切られ、28号住居跡を切っている。北西辺長が2.3mとわかるのみであるが、方形プランになろう。主柱穴はわからない。少量の縄文晩期土器片と黒曜石・サヌカイトの剝片、混入の土師器が出土している。

出土遺物（第36図1・2）

縄文土器（1・2）ともに粗製の鉢・深鉢である。



第34図 26~28号住居跡実測図 (1/60)

28号住居跡（図版15、第34図）

27号住居跡と3号土坑に切られてその北にある。北側は調査区外にかかり、東側は削られていて、一部が知られるのみであるが、方形プランになろう。ただ1点の縄文晩期土器片が出土しているが図示できない。

29号住居跡（図版14、第35図）

C区の南端にあり、1号住居跡と溝SD4に切られ、30・34号住居跡を切っている。北辺長が2.6mで、南北長は2.5m以上になる。方形プランであろう。柱穴は床面に2個しかなかったが、ほぼ中央にあるものには焼土、炭化物が入っていた。縄文晩期土器片のほか、石錐、黒曜石・サスカイトの剝片が出土した。なお、1号住居跡のカマド内とその周辺から出土した石器でこの住居に伴っていたと考えられるものがある。

出土遺物（図版27・29、第36図1～3、60図19、62図66、63図84、68図160）

縄文土器（1～3） 晩期土器で1は精製、2は半精製の鉢である。1はもとは黒色磨研であろう。3は粗製で深鉢になろうか。

石器（19・66・84・160） 19は黒曜石の剝片錐で片方の脚を欠失する。全長32mm、厚さ4.5mm。66は縄縞片岩の打製石器で、石斧であろうか。全長106mm、幅53mm、厚さ14mm、重さ110g。刃部は明瞭でない。

84は灰黄色の片岩を素材とする磨製石斧である。器面に擦過痕が著しい。刃部には使用痕が認められる。現存長63.4mm、幅42.8mm。1号住居跡カマド内出土。

160は側面に敲打痕のあるすり石である。幅94mm、厚さ35mm。玄武岩質の石材である。1号住居跡カマド北側の焼土部分より出土。

30号住居跡（図版14、第35図）

1号住居跡のほぼ直下から検出されたもので、29・32・34号住居跡に切られ、31号住居跡を切っている。南辺長が2.5m以上になるが、一辺3m前後の方形プランではなかったかと思われる。主柱穴は不明。縄文晩期土器片少量と黒曜石・サスカイトの剝片が出土した。

出土遺物（第36図1）

縄文土器 やや薄い器壁であるが粗製の鉢であろう。

31号住居跡（図版14、第35図）

30・32号住居跡に切られ、南側は調査区外にかかり、東側は削られていて、ごく一部が知られるにすぎない。ただ1点の縄文晩期土器片が出土しているが図示できない。

32号住居跡（図版14、第35図）

2号墳主体部と33号住居跡に切られ、30・31・34号住居跡を切っている。南西の辺長が3.2mなので、ほぼこの長さを一辺とする方形プランであろう。柱穴は床面に7個ほどあるが、主柱穴の特定はできない。少量の縄文晩期土器片と石鉈、黒曜石・サヌカイトの剝片が出土した。
出土遺物（図版27、第36図1、60図20）

縄文土器（1） 粗製の晩期土器で深鉢であろう。口縁にこぶ状の低い高まりがある。

石器（20） サヌカイトの石鉈で脚が付かない。裏面には風化した原材面が残る。全長27mm、幅20.9mm、厚さ7.4mm、重さ4.2g。

33号住居跡（図版14、第35図）

2号墳主体部と41号住居跡に切られ、32・34・35号住居跡を切っている。南西隅を挟んで西辺長1.6mと南辺0.8mが残るのみで大半は不明である。方形プランではある。柱穴は床面に4個あるが、もとより主柱穴の特定はできない。少量の縄文晩期土器片とサヌカイト・チャートの剝片、それに混入の土師器片が出土した。

出土遺物（第36図1・2）

縄文土器（1・2） 1は粗製で深鉢であろう。2の底部は上げ底になる。底径6.8cm。ともに晩期。

34号住居跡（図版14、第35図）

1号住居跡と29・32・33・35号住居跡に切られ、30号住居跡を切っている。東辺と南辺の一部が見えるのみで、南辺長が2.6m以上になること、方形プランであろうことがわかる程度で、不明の点が多い。主柱穴もわからない。図示できない縄文晩期土器片と黒曜石剝片が出土した。

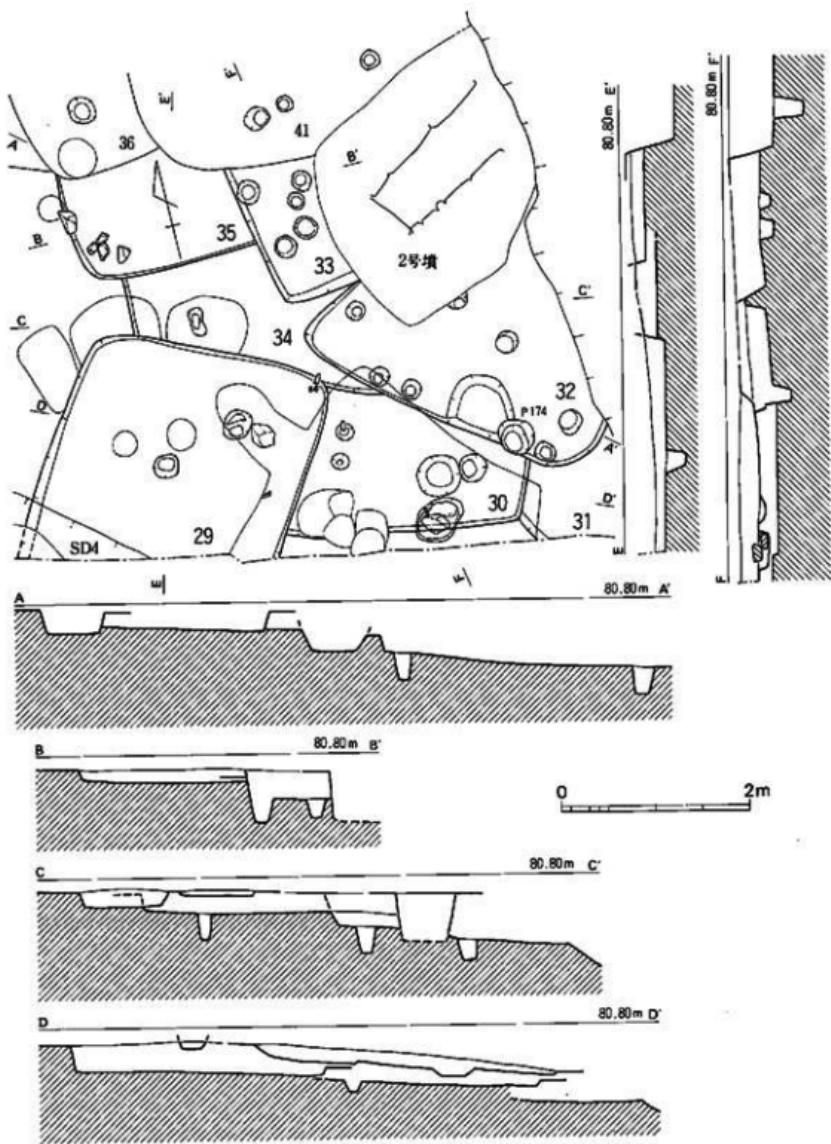
35号住居跡（図版14、第35図）

33・36・41号住居跡に切られ、34号住居跡を切っている。西南隅とそれを挟んだ西辺・南辺の一部がわかるのみで、方形プランではあるが大半は不明である。主柱穴もわからない。少量の縄文晩期土器片と石斧？、黒曜石・サヌカイト剝片、それに土師器が混入して出土した。土器は図示できない。

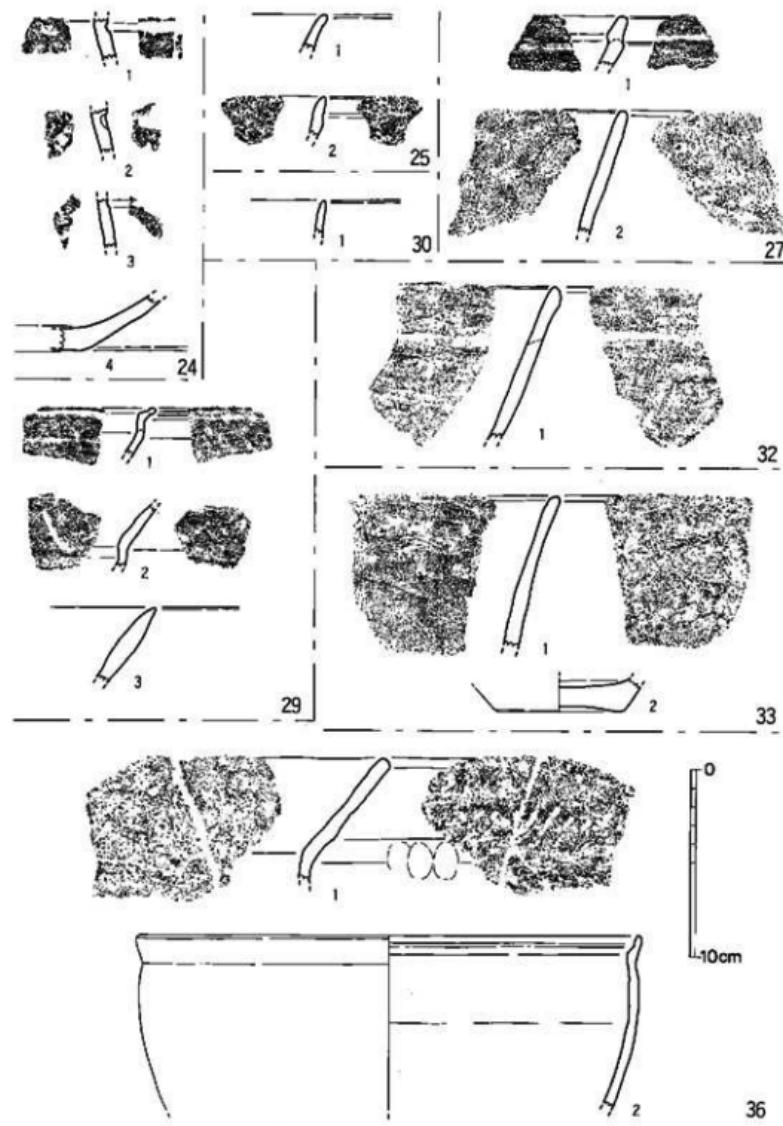
出土遺物（図版27、第59図13）

石器 黒曜石の縦長剝片に調整を施したもので、つまみ形石器であろうか。打点部分には原材面が残る。現存長27.4mm、幅20.9mm、厚さ7.7mm、重さ3.6g。

36号住居跡（図版14、第37図）



第35図 29～35号住居跡実測図 (1/60)



第36図 24・25・27・29・30・32・33・36号住居跡出土土器実測図 (1/3)

38・41号住居跡に切られ、35・37号住居跡を切っている。38号の下層から北辺が検出されたので、西辺長が1.9mの小型の住居跡であることがわかる。東辺は不明だが長方形プランかもしれない。少量の縄文晩期土器片と石斧、黒曜石剝片が出土した。

出土遺物（第36図1・2）

縄文土器（1・2） 1は粗製の深鉢で、外面口縁下には纖維質原体による押圧痕がある。2は半精製の鉢で、もとは磨研土器であろう。復元口径27cm。ともに晩期。

37号住居跡（図版15、第37図）

東側を36・38・39号住居跡に切られている。南北長は3.9mで、東辺は不明であるが隅円の方形プランになるものと思われる。このC-3区では最大の規模である。柱穴は床面に5個が認められるが、主柱はわからない。少量の縄文晩期土器片と台石、黒曜石・サヌカイトの剝片が出土したが、土器は図示できない。

出土遺物（第66図122）

石器 灰色を呈する凝灰岩質の台石で、周縁が欠損している。二次熱を受けているらしい。厚さは110mm。表裏面ともによく磨れている。

38号住居跡（図版15、第37図）

41・42号住居跡に切られ、36・37・39・40号住居跡を切っている。西辺長は2.5mで、北辺は2m、南辺は2.3mまでが現れている。東西にやや長い長方形プランかもしれない。主柱穴は不明。少量の縄文晩期土器片とすり石、石鎌、黒曜石・サヌカイトの剝片、土師器片などが出土した。

出土遺物（図版27・33、第38図1～3、59図7、60図21～23、66図124・125）

縄文土器（1～3） いずれも粗製の晩期土器で1・3は深鉢。2は外面に沈線のある鉢で、滋賀里系であろう。胎土中に黒曜石の破片を含んでいる。

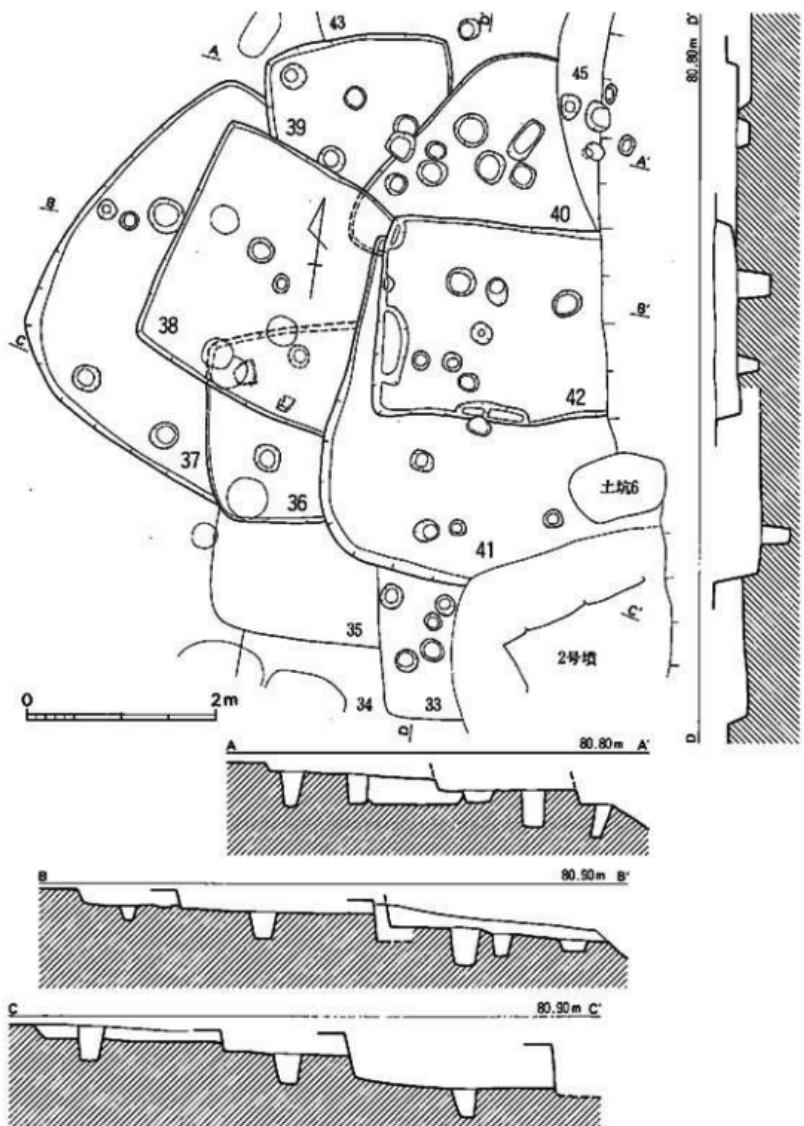
石器（7・21～23・124・125） 7は黒曜石の錐が折れたものであろう。現存長34.1mm、幅20.2mm、厚さ4.6mm、重さ3.2g。

21～23は鎌で、22は黒曜石、21・23はサヌカイト製。21は全長27.1mm、幅16.8mm、厚さ4.9mm、重さ1.3g。片方の脚が短いのは古い折損らしい。22は現存長20.9mm。23は幅12.5mm。

124は玄武岩質のすり石で一面は磨れている。厚さ55mm。125は三角柱状の上下両端に敲打による剝離があるので叩石とすべきか。全長135mm、幅52mm、厚さ46mm、重さ475g。

39号住居跡（図版15、第37図）

37・38・40号住居跡に切られ、43号住居跡を切った小型の住居跡である。北辺長は1.9mで、



第37図 36～42号住居跡実測図 (1/60)

南側を他の住居に切られる。床面に3個の柱穴があるが主柱穴は不明。縄文晚期土器片と石斧、黒曜石・サヌカイトの剥片が出土した。

出土遺物（図版24、第38図1～8）

縄文土器（1～8） いずれも晚期土器で2・3の浅鉢が精製であるほかは粗製である。1は内外とも条痕が著しい。5は波状口縁となる。7の底径は7cm。8は突起状の製品であるが、後期土器の底部に付く短い脚部片かもしれないし、あるいは土偶の一部かもしれない。

40号住居跡（図版15、第37図）

38・39・42・45号住居跡に切られ、43号住居跡を切った住居跡で、西南隅の部分は38号住居跡の下層から検出された。北西辺長が2.8mほどになる。やや隅内の方形プランであろうか。床面に7個の柱穴があるが主柱穴は特定できない。縄文早期・押型文土器片と晚期土器片、石斧、黒曜石・サヌカイトの剥片が出土した。

出土遺物（第38図1・2）

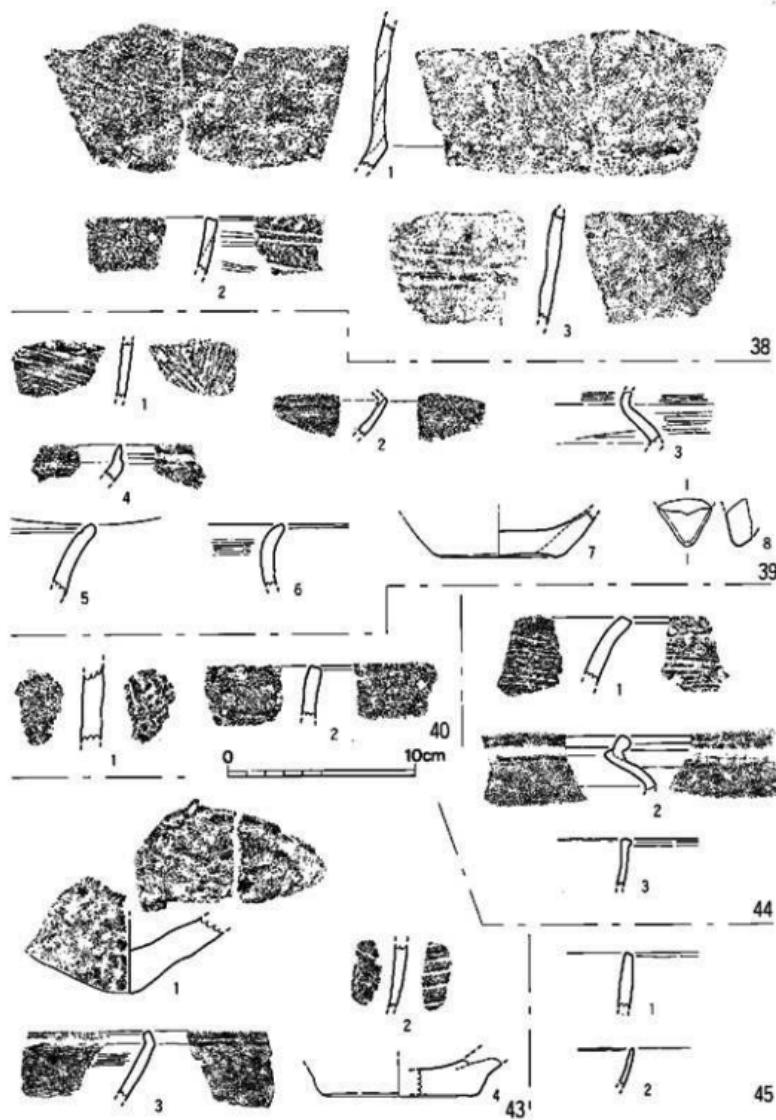
縄文土器（1・2） 1は表面に梢円形粒の印された押型文土器片。2は粗製の晚期深鉢である。

41号住居跡（図版14、第37図）

2号墳主体部に切られてその北にあり、42号住居跡・6号土坑にも切られ、33・35・36・38・40号住居跡を切っている。西辺長が3.4mで東西には3.6m以上の規模をなす方形に近いプランであろう。柱穴は床面に4個があったが、主柱穴はわからない。わりと多くの縄文晚期土器



Photo. 2 作業風景 ②



第38図 38~40・43~45号住居跡出土土器実測図 (1/3)

片のほか、押型文土器片、土製品、石斧、石鎚、十字形石器、石鏃、すり石、台石、黒曜石・サヌカイトの剝片、それに混入の土師器片・白磁片などが出土した。

出土遺物（図版22・24・27・28・29・30・32・33、第40図1～23、39図24、60図24・25、61図51・56・60・61、63図78・79、64図94～97、65図112、66図123・126～128）

縄文土器（1～21・24） 1・2は梢円の押型文土器。3～9は精製または半精製の浅鉢・鉢で、5は復元口径23.4cm。8は内外ともミガキ調整で赤色磨研と称してよいものである。10～21は粗製の鉢・深鉢で、11は口縁として図示したが違う可能性もある。13の口縁は波状になるかもしれない。16は復元口径25.2cm。外面に煤が付着している。17・19の外底面には種子のような圧痕がある。19の底径10.5cm。20・21は刻目突帯文土器である。

土師器（22） 精製の椀の破片である。

白磁（23） 黄白色釉のかかった輸入陶磁片である。

土製品（第39図24） 中央に焼成前の穿孔があり、器面および側面に凹線を巡らした円盤状の土製品である。通常であれば紡錘車とすべきところだが、孔径が2mmに満たない点で否定的要素が強い。周縁の対称の4カ所に紐掛けの切れ目があるのをみると車とすべきかもしれない。

石器（第60図24・25、61図51・56・60・61、63図78・79、64図94～97、65図112、66図123・126～128） 24・25は黒曜石の鏃である。24は側縁が少し透けている。現存長22.4mm。25は剝片鏃で、全長22.5mm、幅14.6mm、厚さ3.1mm、重さ0.7g。

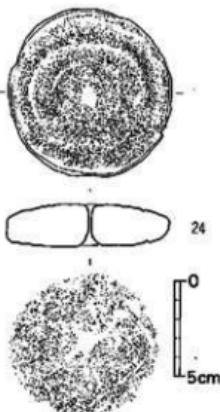
51はサヌカイトのスクレイパーで、全長72mm、幅39.8mm、厚さ13.4mm、重さ51g。

56は灰黄色軟質の片岩を素材とした十字形石器で、4つの突起のうち3つは欠損している。交点のL字部には紐掛けの小さな抉りがあり、その方向からX字状に紐掛けしたことがわかる。図示した面の反対側が表になるらしい。最大長81.9mm、厚さ10mm、重さ63.5g。

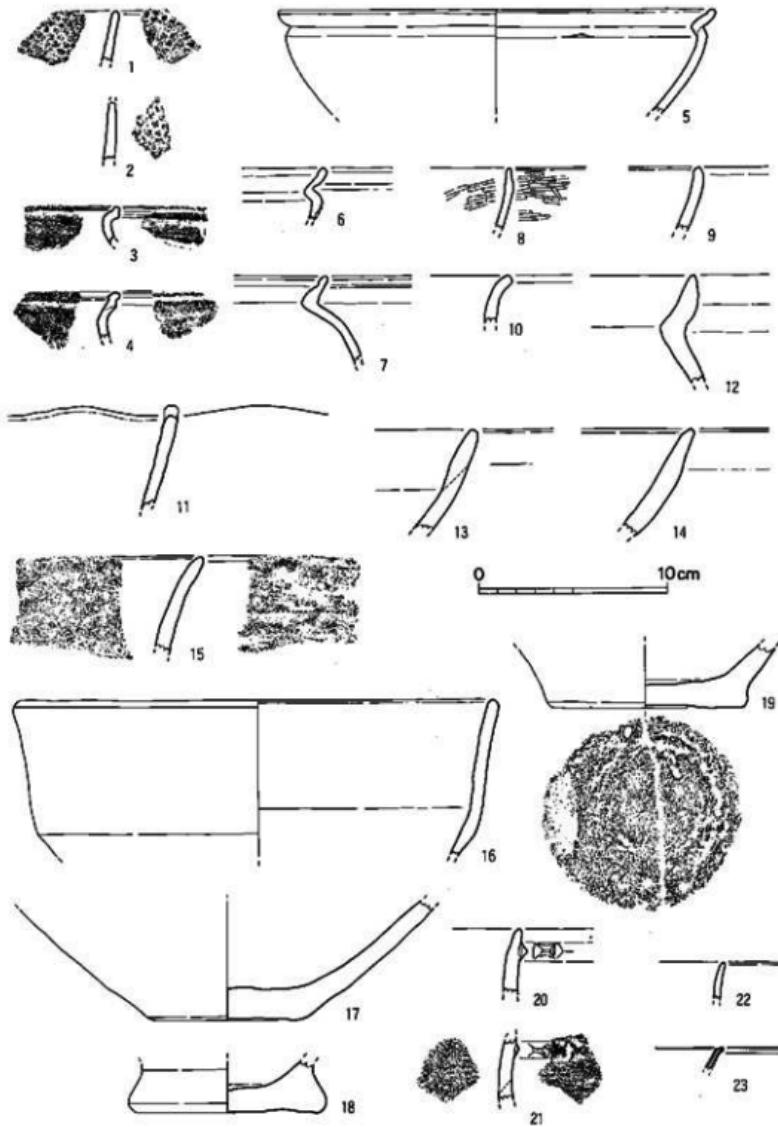
60・61は打製石斧とした。60は頁岩質の石材で、幅63mm、厚さ21mm。61は片岩で、幅54mm、厚さ19mm。

78・79は磨製石斧であるが、原材の剥離面が随所に残っており、磨きが全面には及んでいない。78はねずみ色の片岩で幅57.4mm、厚さ12.7mm。79は石英片岩で、頭部には敲打による欠損が見られる。幅50mm、厚さ25mm。

94～97は打欠石鎚で、いずれも玄武岩質石材を用い、器表はよく磨れている。96・97の打欠部には紐を掛けた時に擦れたらし痕跡がある。長さ・幅・厚さ・重さはそれぞれ順に94が50mm・



第39図 41号住居跡出土
土製品実測図(1/3)



第40図 41号住居跡出土土器実測図 (1/3)

41mm・18mm・59g、95が44mm・39mm・20mm・51.6g、96が59mm・43mm・19mm・70g、97が50mm・42mm・17mm・54.4g、である。

112は結晶片岩の円柱棒状の石器である。器表は磨いた痕跡は見えないが滑らかであり、人の手が加わっているのであろう。石斧とするには刃部がない。一端部には敲打痕があるので叩石とすべきであろうか。現存長104mm、幅39mm、重さ230g。

123・126～128は玄武岩質の石材である。123は台石で、表裏ともにとてもよく磨れている。長さ261mm、幅197mm、厚さ72mm、重さ5080g。126は表裏ともによく磨れており、すり石とすべきだろう。長さ180mm、幅65mm、厚さ36mm、重さ835g。127・128は表裏ともによく磨れているとともに周縁および器面の一部に敲打痕があるので叩石としておく。127は長さ106mm、幅113mm、厚さ44mm、重さ865g。128は幅98mm、厚さ42mm。

42号住居跡（図版14・15、第37図）

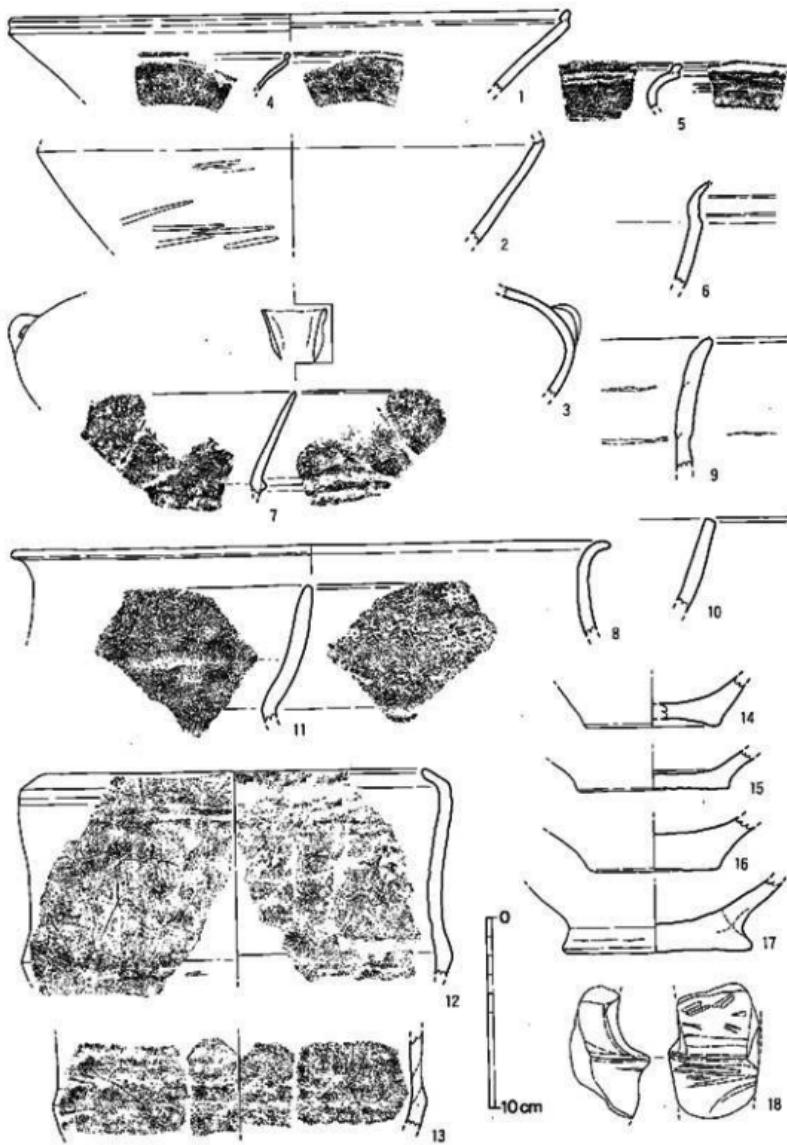
41号住居跡を切ってその上にほぼ重なっており、38・40・45号住居跡をも切っていて、この周辺では最も新しい。西辺長が2.1m、南辺長が2.5m以上の規模となるので、東西に長い長方形プランとなる。西辺と南辺には壁小溝が部分的に見られる。柱穴は床面に7個があったが、主柱穴はわからない。縄文晚期土器片のほか、石斧、石鎌、分銅形石器、台石、黒曜石・サヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物（図版27～30、第41図1～18、60図26、61図53・54・57、65図113）

縄文土器（1～18） 1～7は精製または半精製の浅鉢・鉢で、1は復元口径30cm。3は腹部に鞍状の突起が付く。胴径29.8cm。4は器壁がきわめて薄い。もとは黒色磨研であろう。8～13は半精製または粗製の鉢・深鉢で、8は復元口径32cm。12は外面にV字形に施された4本一組の細い条線があるが、これは4本まとめていっしょに施したものではなく1本ずつの施文である。復元口径20.3cm。15～17の底部外面には種子らしき圧痕がある。17の底径10cm。18は突出部のある棒状品の破片であり、器表はミガキが施される。土偶の脚にしては大きすぎると思われるが、果たして何であろうか。

石器（第60図26、61図53・54・57、65図113） 26は黒曜石の剝片鎌の破片である。脚は付かない。幅18.2mm、厚さ3.7mm、重さ1.3g。

53・54は抉りの入った分銅形石器または糸巻形石器と称されるものである。53は黄灰色をなす軟らかい玄武岩質の石材で、上下両端は刃部を形成しているらしい。くびれ部には緊縛時の紐ずれ痕があるよう見える。全長100mm、幅はくびれ部が35.6mm、最大で64.3mm、厚さ13mm、重さ105.4gをかる。54は灰緑色の片岩を素材としたもので、これの片方のくびれ部には紐ずれの痕跡がある。また一部に鉄錆が付着している。全長62.5mm、幅はくびれ部が24.5mm、最大で38mm、厚さ12.2mm、重さ38.4g。



第41図 42号住居跡出土土器実測図 (1/3)

57は安山岩質の打製石器で、石斧とするよりも總摘形石器として捉えた。長さ69mm、幅140mm、厚さ19mm、重さ185g。

113は石斧の基部であろうか。片岩で、表面は敲打にて面を整えたのち滑らかになるように仕上げているらしい。残存の幅59mm。

43号住居跡（図版15、第42図）

C区住居群の中では北寄りにある。44・46号住居跡を切り、39・40・45号住居跡に切られる。また、1号墳周溝としたSD6にも切られていた。南側の39・40号住居跡に切られた所はその下層から壁面の継ぎが検出されたので、ほぼ2.4mを一辺とする小型の方形プランであることがわかる。柱穴は床面に10個が認められたが主柱穴は特定できない。縄文晩期土器片のほか、押型文土器、石斧、石鎌、すり石、黒曜石・サヌカイトの剝片が出土した。黒曜石は使用剝片もある。

出土遺物（図版24・27・33、第38図1～4、60図27～29、66図129～131）

縄文土器（1～4） 1は文様は明確には見えないが押型文土器の尖底部である。器壁はかなり厚い。2～4は晩期土器で、2は外面に沈線が入っており滋賀里系の鉢であろう。2・3は半精製品。4は粗製で復元底径8.3cm。

石器（第60図27～29、66図129～131） 27～29は鎌で、27は黒曜石剝片鎌の未製品である。長さ21.1mm、幅15.6mm、厚さ4.3mm、重さ1.2g。28は緑灰色の瑪瑙質石材で先端部をごくわずかに欠損する。長さ19mm、幅18.8mm、厚さ4mm、重さ1g。29はサヌカイト製で五角形状になる。現存長29.2mm、幅14.5mm、厚さ5mm、重さ1.7g。

129～131は玄武岩質のすり石である。129・130は棒状で、129は全長122mm、幅59mm、厚さ38mm、重さ395g。130は全長137mm、幅54mm、厚さ39mm、重さ465g。131は表裏面とも磨れて滑らかであり、側面に小さな敲打痕がある。長さ120mm、幅105mm、厚さ38mm、重さ780g。

44号住居跡（図版15、第42図）

46号住居跡を切り、43・45・47号住居跡に切られる。北辺の一部が現れているのみで詳細は不明。縄文晩期土器片、すり石、黒曜石・サヌカイト剝片、混入の土師器片が出土した。

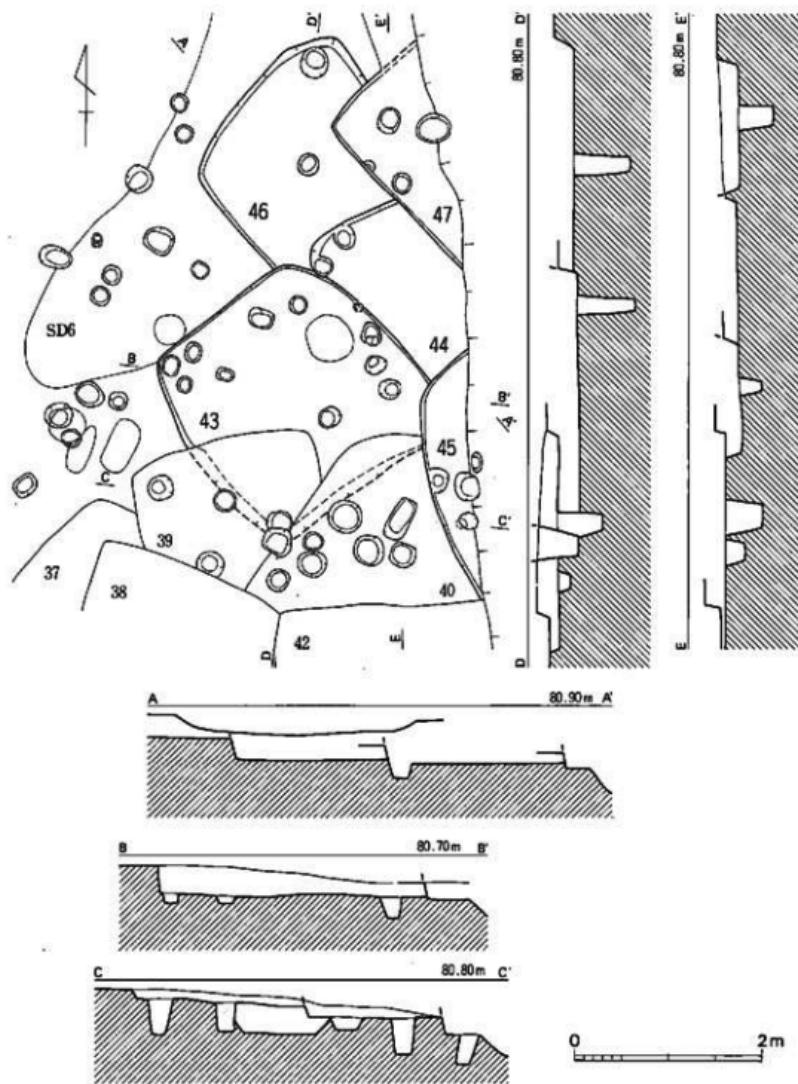
出土遺物（第38図1～3）

縄文土器（1・2） 1は粗製の深鉢片。2は精製の浅鉢。

土師器（3） 精良な土器で焼であろう。外面に化粧土の痕跡がある。

45号住居跡（図版15、第42図）

40・43・44号住居跡を切ってその東にあるが、段落ちの部分で大半が削られている。42号住居跡に切られる。隅円の方形プランであろうが、詳細は不明。縄文晩期土器片、黒曜石剝片、



第42図 43～47号住居跡実測図 (1/60)

混入の土師器片が出土した。

出土遺物（第38図1・2）

縄文土器（1） 粗製の深鉢片。内外ともナデである。

土師器（2） 精良な土器で柄であろう。内外面に化粧土を掛けている。

46号住居跡（図版15、第42図）

C区住居群の北端にある。43・44・47号住居跡に切られ、1号墳周溝としたSD6にも切られていた。北西辺長が2.1mであり、ほぼこの長さを一辺とする小型の方形プランであろう。主柱穴は不明。縄文晩期土器片、黒曜石剝片、混入の土師器片が出土したが図示できない。

47号住居跡（図版15、第42図）

44・46号住居跡を切ってその東にあるが、これも段落ちの部分で大半が削られている。西南辺長は2.1m以上。方形プランであろう。縄文晩期土器片、黒曜石・サスカイト剝片が出土しているが図示できない。

3. 土坑

C-2・3区に縄文時代晩期の土坑6基があった。みな土器片等が出土しているが、貯蔵穴といえるようなものでもなく、性格はわからない。

1号土坑（図版16、第43図）

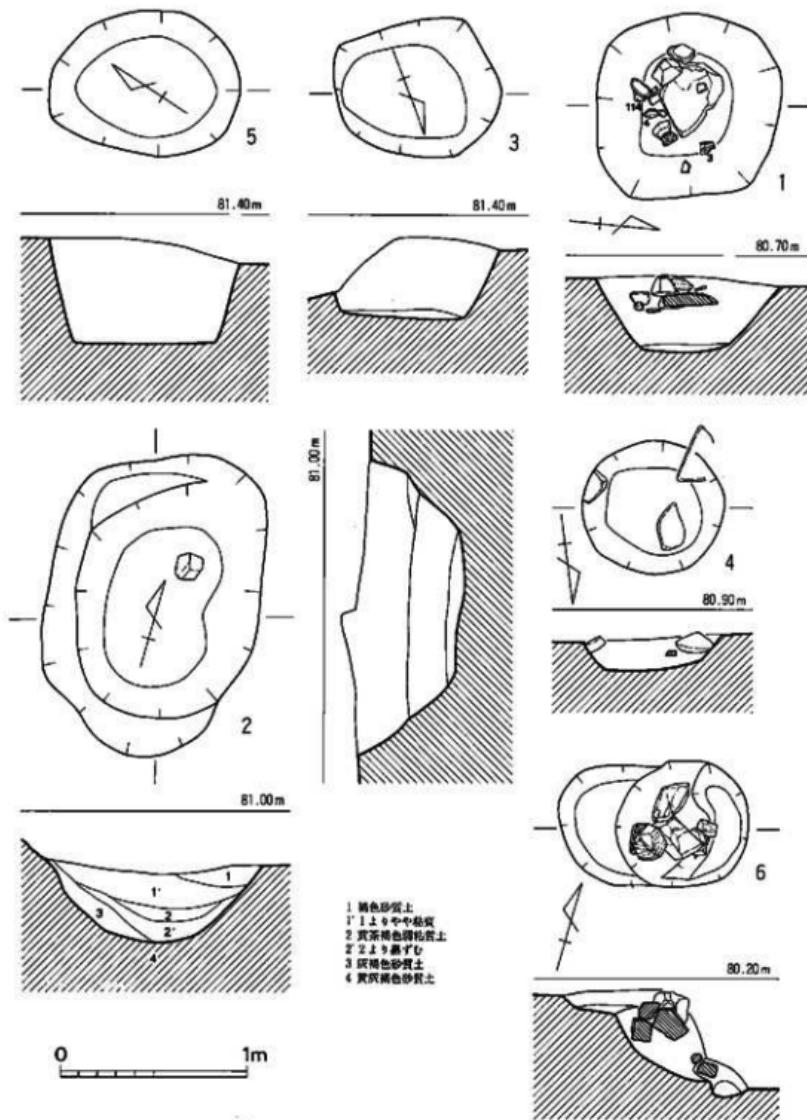
C-3区の北端にあり、1号墳の周溝としたSD6の下層から検出された。平面で直径95cmほどの円形プランが所々角張っており、底面が47×55cmの隅円長方形であることを見れば、本来は方形プランであったのかもしれない。断面は台形状である。底面から20数cm浮いて花崗岩の扁平石がほぼ水平にあり、その周囲上面に土器片や礫があった。埋土は黒褐色土であった。縄文晩期土器片のほか台石、棒状品、黒曜石剝片があり、土師器片が混入していた。

出土遺物（図版30、第44図1～6、65図114）

縄文土器（1～6） 1・2は精製の浅鉢、3～6は粗製の深鉢である。1は黒色磨研土器で波状口縁になる。復元口径22.6cm。2は浅鉢の口縁に付くリボンの部分である。3は内外に粗いミガキが施される。復元口径30cm。4の胴部径21cm。

石器（114） 円柱棒状の石器で、器面は敲打で面を整えたあと滑らかに仕上げているが磨製とはいえない。叩石の用途かもしれない。現存長75mm、幅48mm。

2号土坑（図版16、第43図）



第43図 1～6号土坑実測図 (1/30)

C-3区の1号墳主体部にて上面の半分以上が切られていたが全容はわかる。上面が主軸をほぼ南北におく113×163cmの精円形プランで、断面は台形状になり一部に段が付く。埋土の基本は茶褐色土であった。縄文晚期土器片と黒曜石・サヌカイト剝片が出土した。

出土遺物（第44図7）

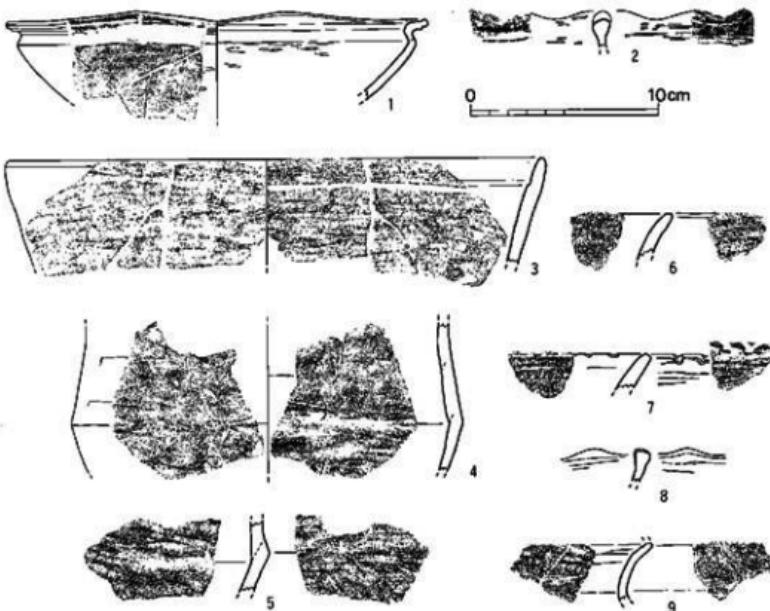
縄文土器 口唇部に竹のような原体で押圧して刻みを入れた粗製土器である。晚期。

3号土坑（図版15、第43図）

C-2区の北東端にあり、1号墳周溝としたSD5の下層から検出された。上面東側は段落ちで大きく削られている。底面はややいびつな精円形プランなので上面も同様であったろう。黄茶褐色土を埋土としていた。縄文晚期土器片が出土しているが図示できない。

4号土坑（図版17、第43図）

2号土坑の東側、1号土坑の南側にある。上面径70~75cmの円形プランで、断面は台形にな



第44図 土坑出土土器実測図（1/3）

る。床面からやや浮いて片岩の板石があった。縄文晩期土器片と黒曜石・サヌカイト剝片が出土した。

出土遺物（第44図8）

縄文土器 浅鉢口縁の突起部分である。精製品。晩期。

5号土坑（図版17、第43図）

C-2区の南寄りにあり、SD4に一部を切られている。底面径54×74cm、上面径76×102cmの精円形プランをなし、断面は台形を呈する。縄文晩期土器片、サヌカイト剝片が出土した。

出土遺物（第44図9）

縄文土器 半精製の鉢の頸部片である。上端は擬口縁を呈する。晩期。

6号土坑（図版17、第43図）

C-3区の南寄り、2号墳主体部のすぐ北にある。東側を段落ちで大きく削られているが、もともと円形もしくは梢円形プランであったろう。中に安山岩系の礫が7個入っていた。縄文晩期土器片が出土しているが図示できない。

4. 溝

C-1区にSD3、C-2・3区にSD4、C-3区にSD7があった。SD5・6は1号墳の周溝として既述した。ここから出土した石器類は後述する。

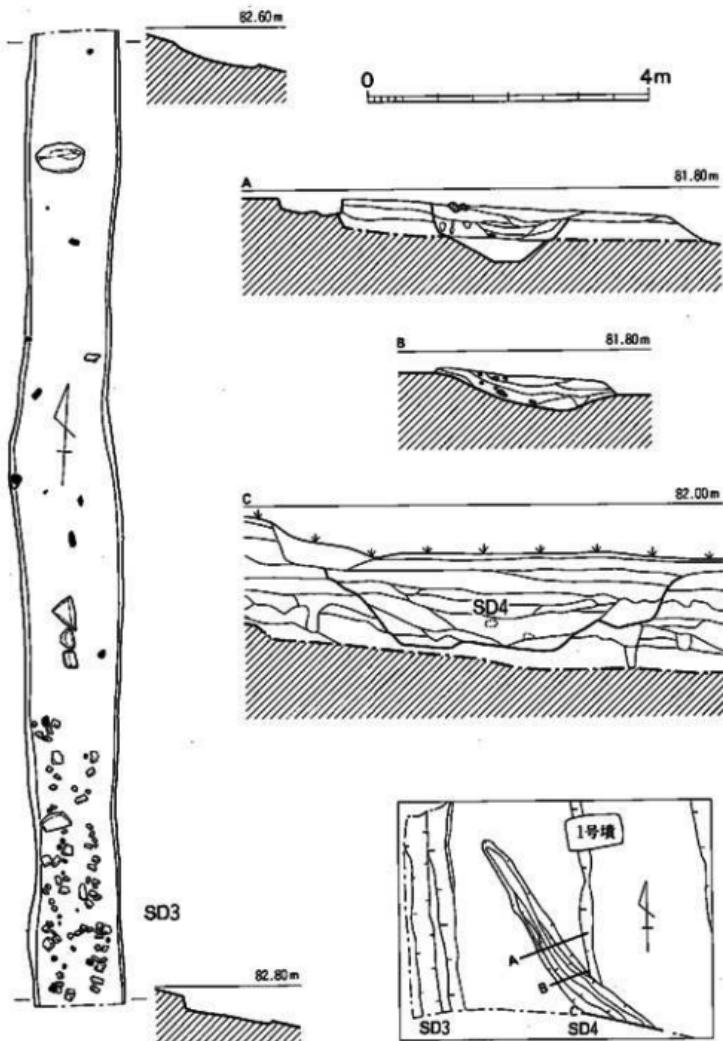
3号溝〔SD3〕（図版4、第45図）

C-1区にてほぼ南北方向に伸びる深い溝である。底面の幅102～140cmで、地形の傾斜に従って底面も東側へ低くなっている。深さは最大でも20cmほどしかない。埋土は灰褐色土であった。溝中の特に南半に花崗岩、安山岩、玄武岩などの大きささまざまの角礫が入っており、すり石・台石等もあった。また縄文晩期土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、陶器、染付といったあらゆる時期の遺物が量は少ないながらも出土している。最も新しいのは時期は江戸時代末か明治頃であろう。

出土遺物（図版22、第46図1～9、66図132・133）

弥生土器（1・2） 1は甕というより短頸甕とすべきか。底部は径約5cmが凸レンズ状の平底になるが、全体から見ればほとんど丸底といってよい。口径12cm、胴部径15.8cm、器高15.8cm。2も短頸甕で復元口径11cm。後期後半。

土師器（3） 瓶の底部片で内面に黒斑がある。孔径2.8cm。



第45図 SD3・4 実測図 (1/80・1/400)

須恵器（4・5） 瓢の破片で、外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕である。5の外面には自然釉が掛かっているので肩部付近の破片か。

瓦質土器（6・7） 6は土師器であるが瓦質に近く、時期が7と変わらないのでいのでここに含めた。坏のように図示したが違う器形の可能性もある。菊花文の押印が2箇所に見える。7は火鉢であろう。外面突帯には木の小口による刻目がある。

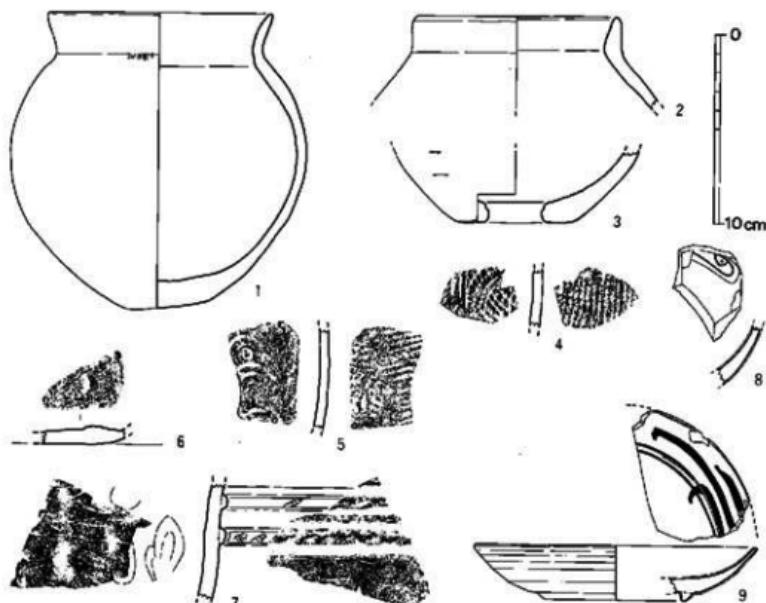
青磁（8） 中国・龍泉窯系の碗で内面には花文がある。

染付磁器（9） 内面に呉須で草文を描いた皿である。高台は貼り付けらしい。有田系であろう。復元口径15cm、底径7.6cm。

石器（132・133） ともに上面が磨れており、玄武岩質の台石とすべきものである。133は側縁に敲打痕があり、叩石としても用いたらしい。132の厚さ79mm。133は全長212mm、幅117mm、厚さ51mm、重さ1965g。

4号溝〔SD4〕(図版4・18、第5・45図)

C-2区の中央付近から南東に延び、C-3区南端へ続いていく溝である。検出したうちの上



第46図 3号溝〔SD3〕出土土器等実測図 (1/3)

面最大幅は2.3mであった。掘り直しがなされているよう、上層の床面から15~20cmの間に炭化物（木炭）、焼土が混入しており、また疊が多数検出された。下層は黄褐色~濃茶褐色粘土が堆積していた。下層からは混入と思われる土師器以外は弥生土器がおもに出土しているのでこの弥生後期末頃に掘られ、上層の8世紀代の須恵器の時期に再び利用されたのであろう。B区のS D1とは現状では直接は繋がらないけれども、一連のものとして通略的な性格があったのかもしれない。縄文晚期土器片のほか石斧、石錐、すり石、多数の黒曜石・サヌカイト剝片（第58~67図4・32・62・63・99・100・134・135）も出土しているが、これらは後述する。

出土遺物（図版22、第47図1~19）

縄文土器（8） 晩期土器の深鉢の底部であろう。

弥生土器（1~7・9~12） 1の長頸壺はかなり重量感のある土器である。胴部外面下半にはタキ痕がある。胴部径15cm。2は短頸壺であろう。3は把手の付くジョッキ形土器である。把手は大半を欠失するが他はほぼ完形である。口径5.3cm、底径7.1~7.4cm、器高7cmで、底部は少し歪んでいる。4は鉢で底部は径5cmほどが凸レンズ状の平底になる。口径15.6cm、器高9.3cm。5は高環の脚部片。6・7は甕、9は壺の底部であろうか。9は二次熱を受けているらしい。10は完形に近い「く」の字口縁の甕で、口径14.6cm、復元高21.5cm。外面に煤が付着している。11と12は壺とすべきだろう。復元口径は11が19.3cm、12が19.5cm。

土師器（13・18・19） 13は下層出土となっているが、上層からの混入であろう。18・19は中世の所産で、18の小皿は復元口径9.2cm、器高0.9cm。

須恵器（14~17） 高台の付く壺で、15~17は復元口径が14cm、14.8cm、15cmとなる。

7号溝【S D 7】（図版15、第5図）

C-3区の1号墳の周溝S D 6の直下およびその内側の下層から検出された浅い溝であるが、その性格等ははっきりしない。縄文晚期土器、弥生土器、土師器、台石、黒曜石・サヌカイト剝片が出土しているが、図示しうるものはない。

5. その他

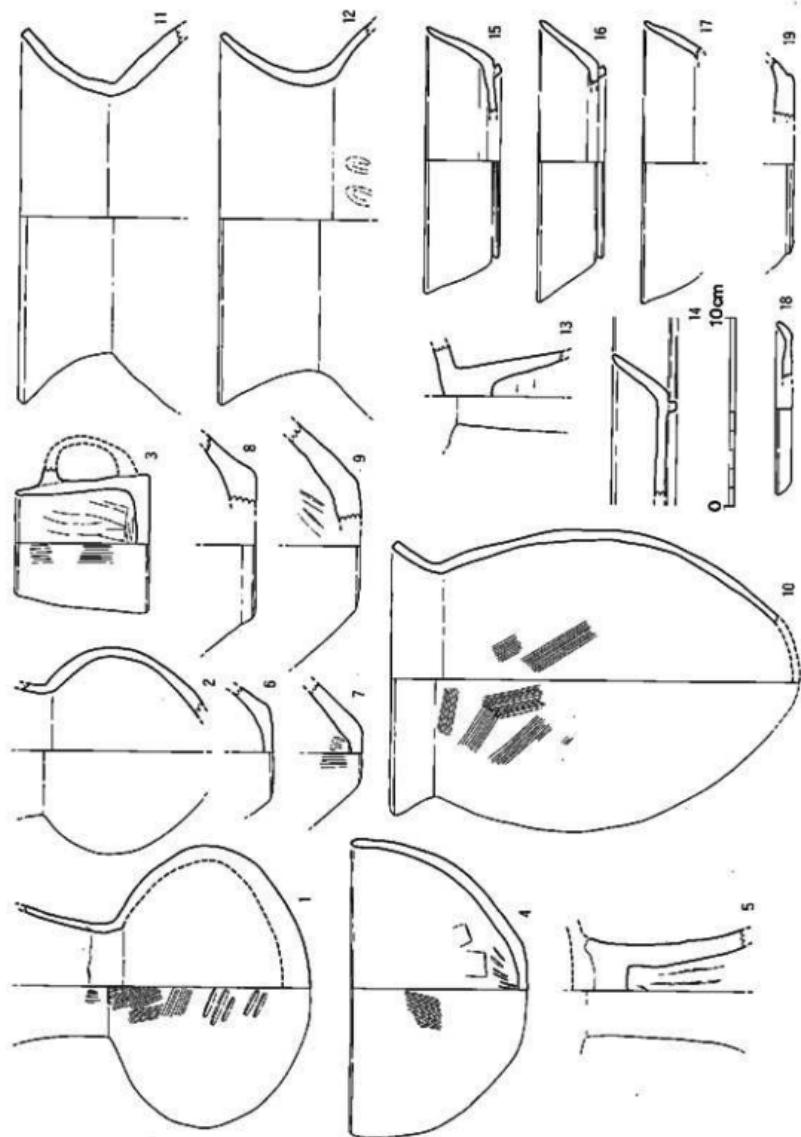
竪穴、掘立柱建物跡の可能性のあるもの、石垣、柱穴出土遺物、C・D区出土遺物についてこの項でまとめる。柱穴出土品を除いて石器・土製品はまとめて後述する。

a. 竪穴

S X 2（図版12、第48図）

C-4区の南端にあって、2・3号住居跡を切っており、南北5.4m、東西約4mの五角形に近い不整形のプランを呈する。面積は現状で15m²。竪穴住居の可能性もないではないが、平面形

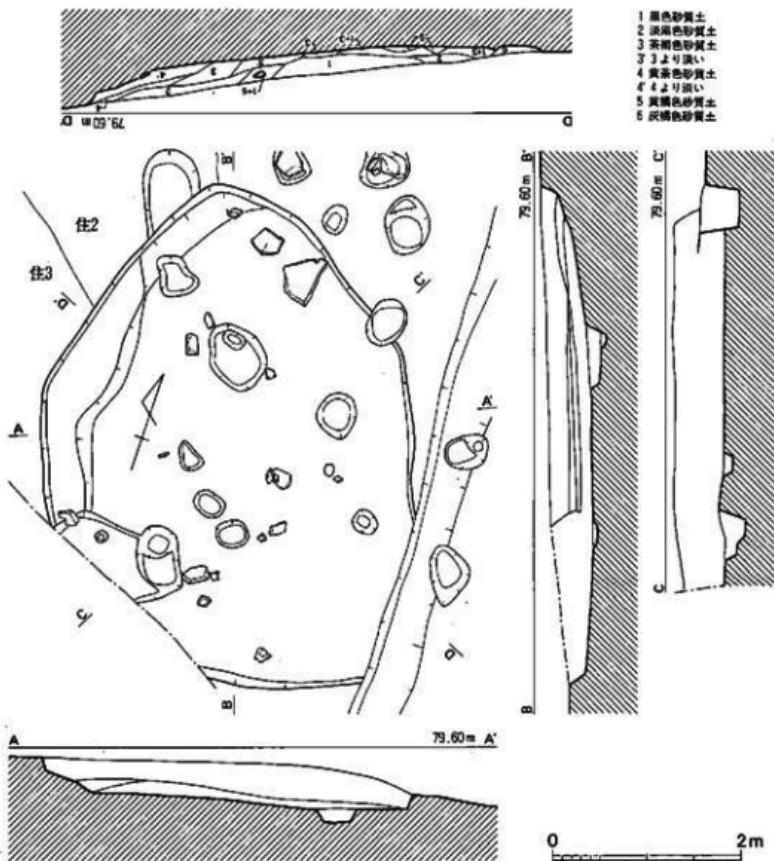
第47图 4号墓 (S 4) 出土土器等实测图 (1/3)



がいびつなので別扱いとしておく。床面に石材が遺存したりしているので古墳築造の際の作業小屋的な施設であったのかもしれない。土師器が最も多く、須恵器、縄文晩期土器片や土錐、石錐、石斧、石鎌、すり石、黒曜石・サヌカイト剝片も出土している（第59～65図10・11・43・44・85・107・108・118）が、土器以外は後述する。

出土遺物（図版23、第49図1～19）

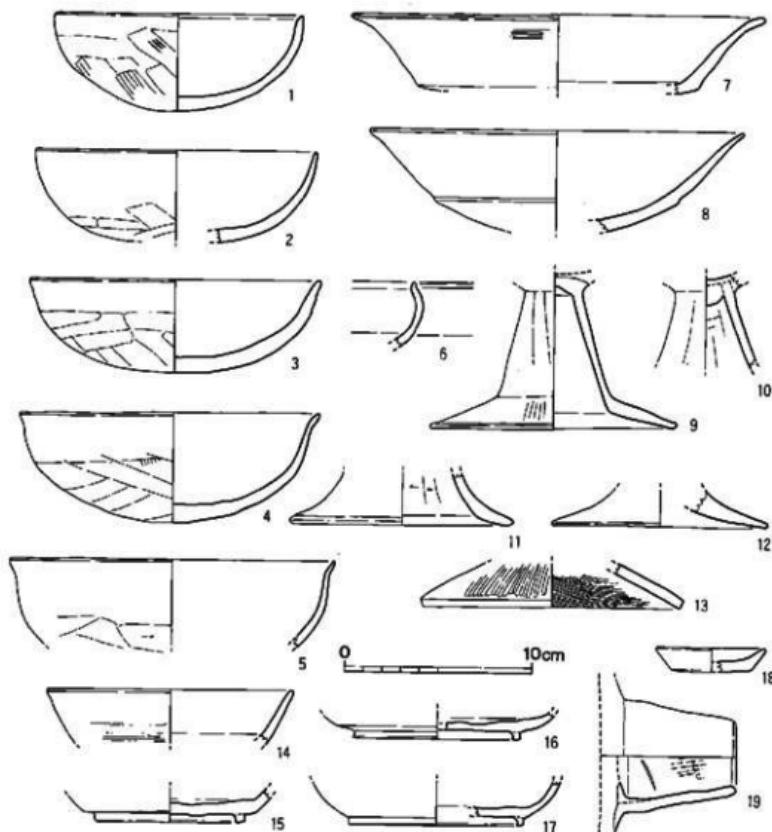
土師器（1～5・7～13・18・19） 1～5は精製の椀で、4・5の口縁部は外反する。2は二次



第48図 S X 2 実測図 (1/60)

熱を受けた痕跡がある。1は口径13.2cm、器高5.4cm。2は口径15cm。3は復元口径15.6cm、器高4.9cm。4は口径16cm、器高5.9cm。5は復元口径17.2cm。7～13は高環で全て精製品。8と9は同一個体の可能性が高い。この2点と11は二次熱を受けている。7は復元口径22cm、8は口径20cm、9の脚裾径13.2cm、11の裾径12cm、12の裾径11.4cm、13の裾径13.6cm。18は中世の小皿で、復元口径5.8cm、器高1.3cm。19は把手であろう。瓦質に近い。

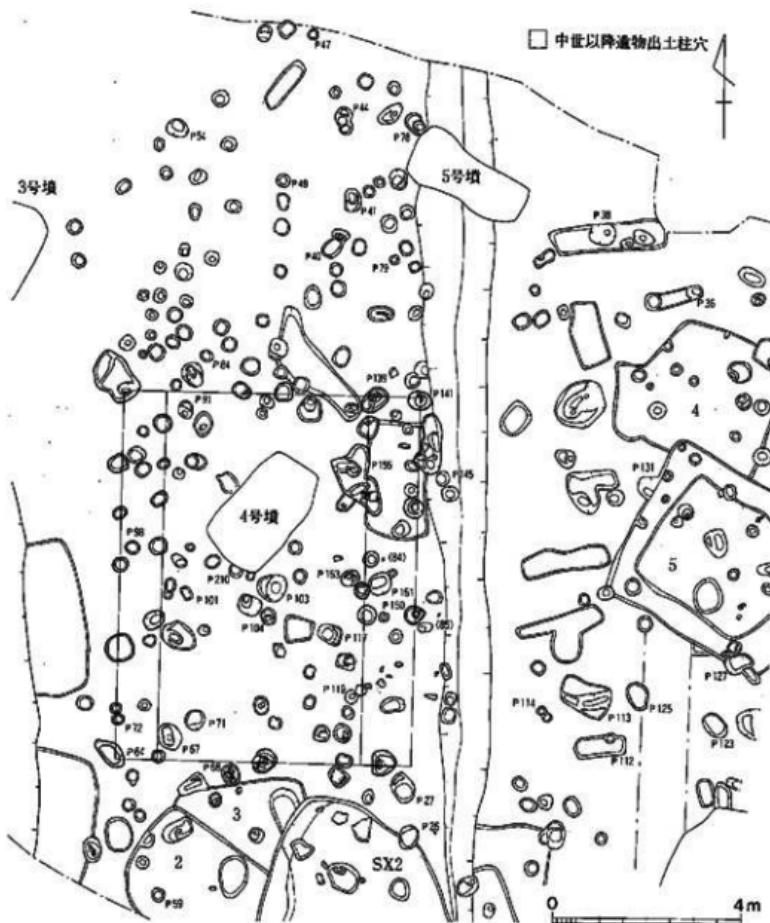
須恵器(6・14～17) 6は堀もしくは逆転して壺蓋であろう。14は高環の頸部らしい。15～17は高台付きの椀で16の内底面には敲打痕がある。底径9cm。



第49図 S X 2 出土土器実測図 (1/3)

b. 掘立柱建物跡 (図版18、第50図)

C-4・5区は柱穴もわりと多く、調査中にも掘立柱建物が建つのではないかとみて検討したが、結局のところ1棟も確定できなかった。しかし中世期の遺物がそこそこ出土していることを思えば、やはり建物が存したものと考えざるを得ない。いま、C-4区において可能性ある



第50図 C-4区掘立柱建物跡?実測図 (1/120)

ものを提示しておきたい。

もしこのように建物が建つとすれば、後述のP64の青磁、P151の擂鉢、P71・104・141の土錐などはこの建物に伴っていた可能性が高いものと考えられる。

c. 石垣 (図版4・19、第5図)

C-5区の南東端と、D区の南東部に舌状台地の先端部を限るように石垣造構があった。C区をSR1、D区をSR2・3としたが、もとより一連のものである。C区を1～5区に分ける基準とした柿畑造成時の段とこの石垣の方向とは異なっている。石垣周辺から出土した遺物は近世後半期以降のものが多いが、一部に中世期のものもある。それほど古い時期に築かれたものとは思えないが、少なくとも柿畑造成時に築かれたものではないと考えておきたい。以下の出土遺物は1～7、16～18がSR1、8・9がSR2からである。

出土遺物 (第51図1～9、22図16～18)

土師器 (1) 土鉢の破片である。硬質で瓦質に近い。5分の1ほどの小片なので不明部分が多いが、下部と胴中位に切れ目があるらしい。

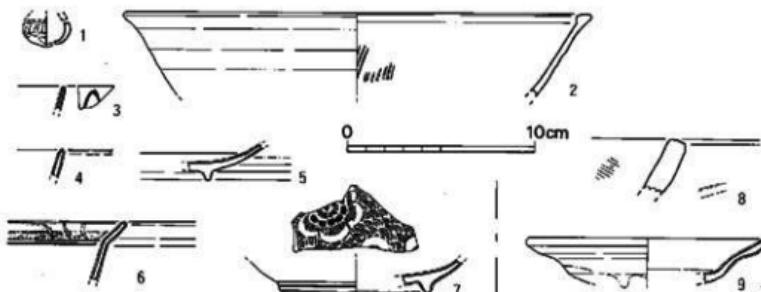
瓦質土器 (8) こね鉢か擂鉢であろう。

陶器 (2) 擂鉢の破片で内外とも鉄釉が掛かっている。復元口径25cm。

青磁 (4・5・9) 4は龍泉窯系の碗、5は同安窯系の皿であろう。9は朝鮮製の可能性もあるが國産とみておきたい。復元口径13cm。

染付磁器 (3・6・7) 3は碗の小片、6は鉢か深皿であろう。7の内面見込み文様は型紙刷りらしい。復元底径8.1cm。

鉄器 (第22図16～18) 16は釘先の破片か。新しいものであろう。17は釘のようにも見えるがはっきりしない。18は鐵の茎か。とすれば、本来はすぐ近くにある7号墳石室に属していたものであろうか。



第51図 SR1・2出土土器等実測図 (1/3)

d. 柱穴出土遺物

出土遺物（図版23・25・27・28・32・34、第52図1～21、58～67図1・8・12・30・31・55・98・138、70図1～5・10）

縄文土器（1～11） 1は早期の条痕文土器片で口縁に近い部分と思われる。粗製。P79出土。2は縄文土器であることはわかるが詳細不明。中期か。P101出土。3～5は後期土器で、3はP145、4はP41、5はP79の出土。6～11は晩期。8は黒色磨研土器である。6はP47、7はP123、8はP210、9はP54、10はP103、11はP139の出土。

弥生土器（12） 前期の壺の肩部である。ヘラ描きの山形文が施文される。P27出土。

土師器（13～15） 13は高杯の脚部で口径14.6cm。P26出土。14は甌で復元口径16cm。P155出土。15は二次熱を受けており、焼塙土器であろう。復元口径7.2cm、胴部径8.8cm。P119出土。

瓦質土器（16～18） 16・17は擂鉢、18は火鉢である。18の復元口径は25cm。16はP151、17はP12、18はP98の出土。

石鍋（19） 滑石製の鍋片で、外面全部と内面の一部に煤が付着している。P174出土。

育磁（20・21） ともに龍泉窯系の碗および皿で、21の復元底径6.2cm。20はP104、21はP64の出土。

石器（第58～67図1・8・12・30・31・55・98・138） 1は黄土色をしたチャートを素材とするナイフ形石器である。全長29mm、幅11.3mm、厚さ6.4mm、重さ2.2g。5号住居跡に切られたP131出土。

8は黒曜石の剝片利用の鎌であろう。全長24mm、幅16.4mm、厚さ3.8mm、重さ1g。P179出土。

12は黒曜石のつまみ形石器であろうか。基部を欠く。現存長18.6mm、幅18.8mm、厚さ4.9mm、重さ1.4g。P165出土。

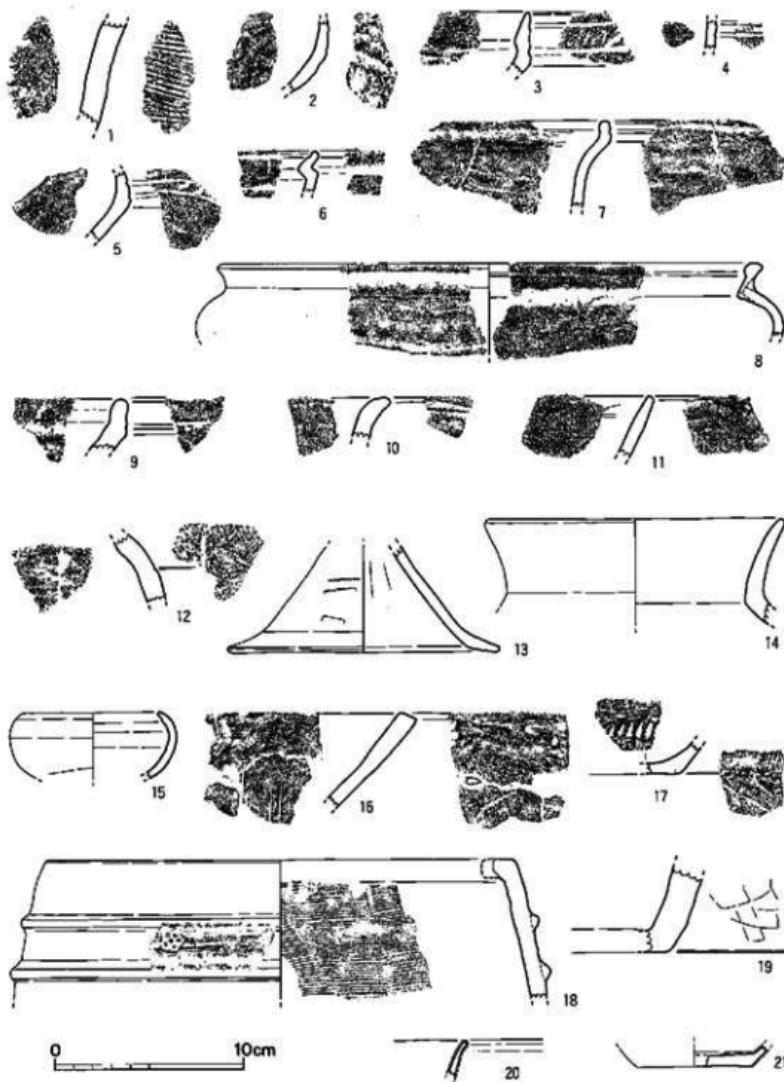
30・31は鎌。30は色の薄い黒曜石で、一側面が鋸歯状になる。全長19.9mm、幅14mm、厚さ4mm、重さ0.7g。P84出土。31はサヌカイトで、先端は紐掛けに再調整しているらしい。全長28.2mm、幅17.2mm、厚さ5.3mm、重さ1.8g。P164出土。

55は灰緑色片岩の十字形石器で、2脚を欠失する。くびれ部は紐掛けで擦れています。図示した反対の面は擦って平滑にしており、また反りがある。あえて表裏を捉えれば図示した面が裏であろう。現存長87mm、幅67.4mm、厚さ6.7mm、重さ45.6g。P117出土。

98は玄武岩質の打欠石鎌である。打欠部のひとつには紐掛けしたらしい痕跡がある。長さ49mm、幅42mm、厚さ20mm、重さ59.3g。

138は玄武岩質のすり石で、厚さ37mm。P212出土。

土製品（70図1～5） 全て管状土錐で4・5は半欠品である。1は長さ46.3mm、径11.2mm、重さ3.8g。2は長さ35.9mm、径14.2mm、重さ4.8g。3は長さ38mm、径11.6mm、重さ3.3g。4は径10.6mm。5は径10.9mm。1がP71、2がP104、3がP114、4がP141、5がP153からの出土。



第52図 C区ピット出土土器等実測図 (1/3)

玉（70図10） ガラス玉である。胎は緑青色だが表面は風化して荒れている。径8.5mm、高さ5.9mm、孔径3.6mm、重さ0.4g。P64からこの1個のみ出土した。

e. C・D区の遺物

遺構検出時や古墳の石室掘り形内、その他から出土した土器等を区ごとにまとめる。

[C-2区] (第53図1~7)

縄文土器（1~4） 1は精製の鉢で復元口径34cm。2は半精製。3・4は粗製の底部で、4の外底面には種子らしき圧痕がある。いずれも晩期。

土師器（5） 糸切り底の壺の破片。復元底径6.8cm。

青磁（6・7） 6は龍泉窯系の碗で鎌連弁が入る。7は同安窯系の碗で復元口径14cm。

[C-3区] (図版23~25、第53~55図8~80)

縄文土器（8~76） 8は押型文土器で外面に山形文がある。43~47号住居跡検出面出土。9は胎土中に滑石粉末を含む中期・阿高式系の土器。1号墳石室掘り形内出土。10の外面には親指の爪で約2cm間隔で施した爪形文がある。粗製の土器で後期初頭か。2号墳掘り形内出土。11~15は後期後半・西平式系の土器と思われる。16~76は晩期の土器である。21・22は復元口径は15.6cmと15.2cm。29は胴径26.6cm。56は壺形を呈し口径18.6cm。57~76の底部は形態にヴァリエーションがある。62・63はやや特異な形状で62の底径8.4cm。65・66・68・72・75の外底面には植物質織維または種子らしき圧痕がある。

弥生土器（77） 前期の壺で、口唇部には全面に細く鋭い刻み目が入る。復元口径17.6cm。

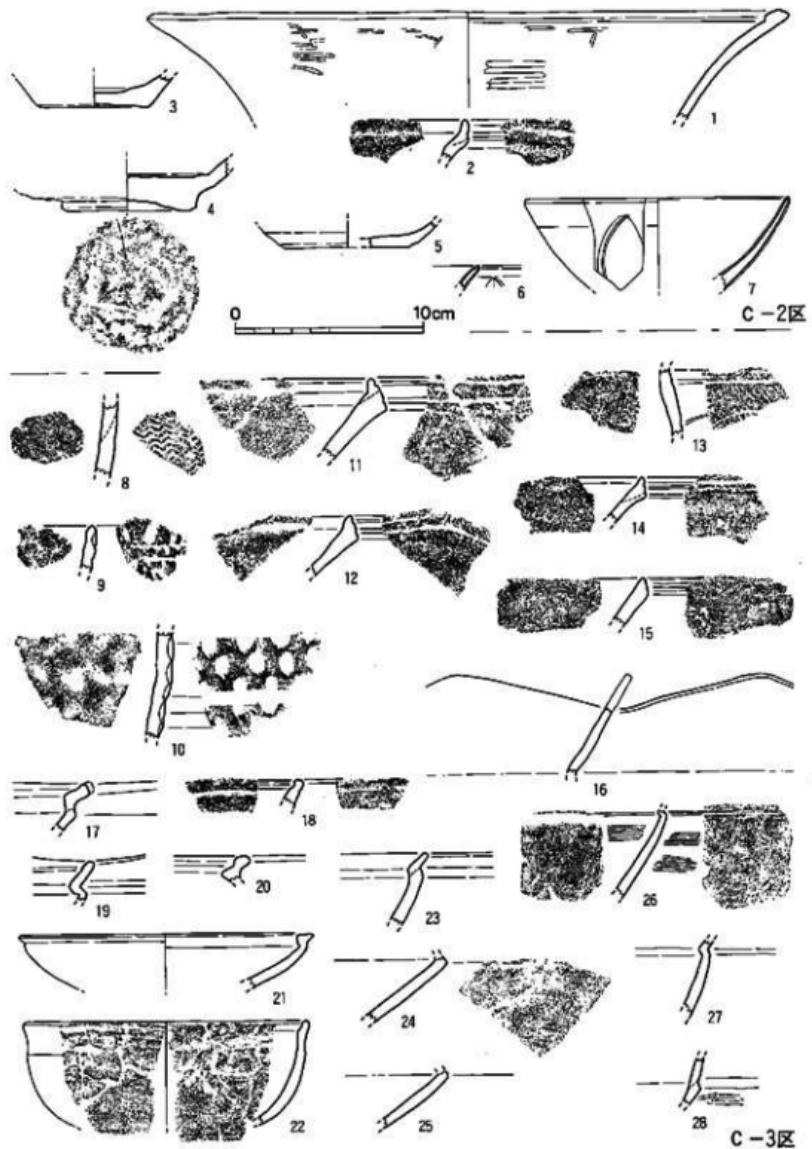
土師器（78） 壺の破片である。口縁上面には押圧痕がある。外面は黒く変色している。

磁器（79・80） 79は青磁の碗。中國産かどうか不明。80は青白磁合子で外面下半は露胎。復元口径5cm。

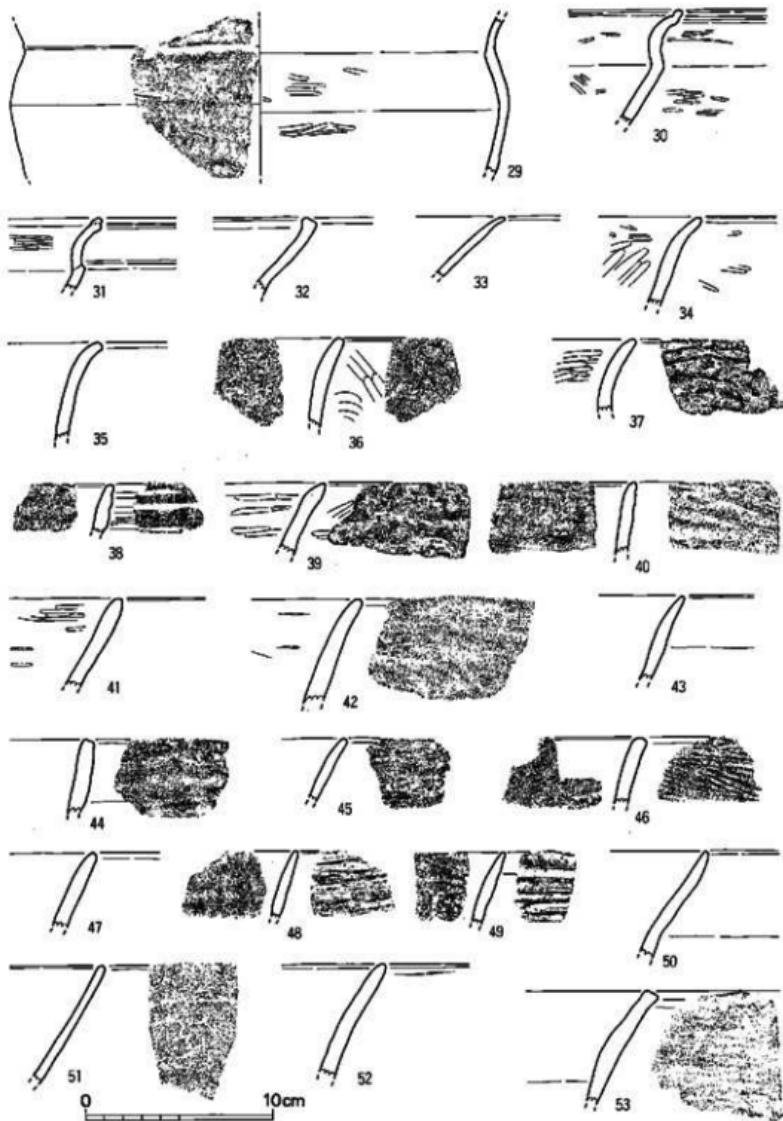
[C-4区] (図版23~25、第56・57図81~112)

縄文土器（81~100） 81・82は早期・押型文土器で81は内外に山形文、82は外面に横円文がある。85は器壁の厚い粗製土器で、外面に押引の沈線が入る。早期か。86は筒形の脚部から口縁が漏斗状に開くもので塞ノ神式にあたる。外面には植物質原体によるらしい沈線が施されるが風化していて詳細は不明。復元口径21cm。83・84は滑石粉末を含む薄い器壁の土器で阿高式系であろうか。以上の土器はほとんどがC-4区でも南部にて出土している。87・88は後期後半・西平式系か。87は口縁に押点文がある。

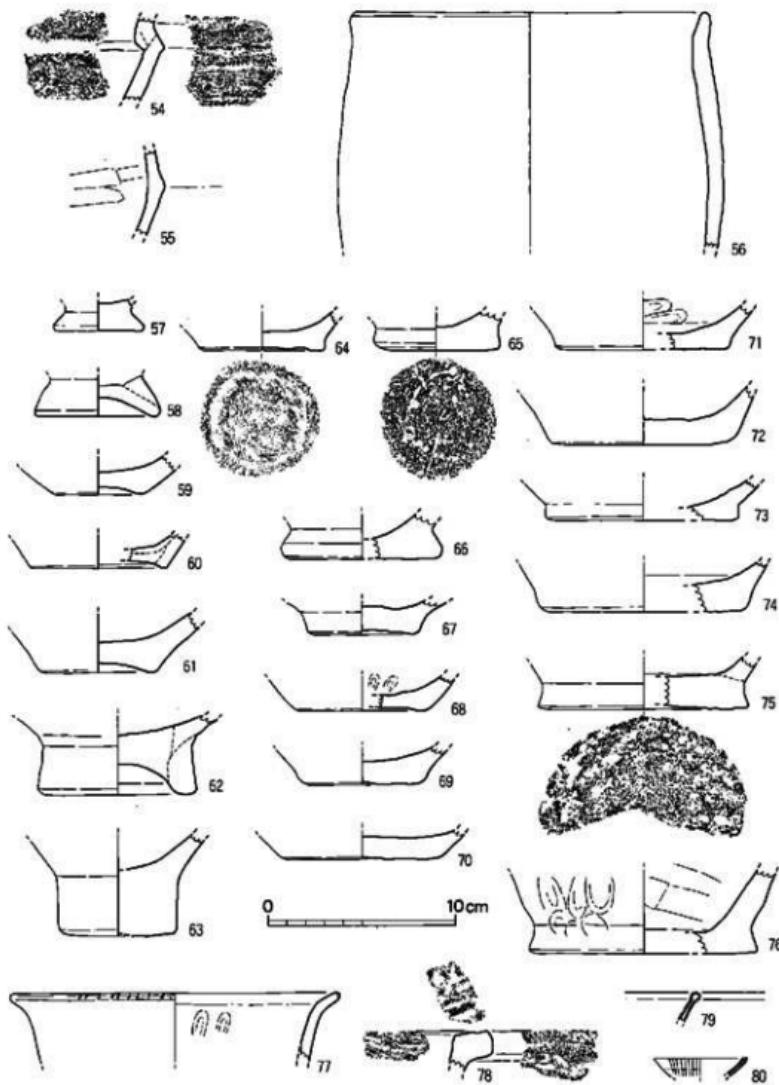
89~100は晩期土器で、図示したものは精製品が多い。98の内面は整形後に追加の粘土を貼り付けて成形している。底径7.2cm。



第53図 C・D区出土土器等実測図 1 < C-2・3区 > (1/3)



第54図 C・D区出土土器等実測図2 <C-3区> (1/3)



第55図 C・D区出土土器等実測図3 < C-3区> (1/3)

弥生土器 (101) 前期の壺で、口縁はくの字に近く屈折するらしい。外面肩部には沈線が入る。
土師器 (102~110) 102は壺。103は壺であろうか。104~107は高环で106と107は同一個体であろう。104の復元口径17.6cm。108は壺で復元口径15.2cm。109・110も壺であろう。108のみ粗製で他は精製土器である。

瓦器 (111) 梱の破片で、一部黒化している。

磁器 (112) 青磁で皿になろう。龍泉窯系か。

[C-5区他] (第57図113~123)

綱文土器 (113) 精製の鉢の破片で波状口縁になる。晩期。

須恵器 (114) 蓋の口縁部小片である。

土師器 (115~118) 115は片口になるこね鉢もしくは擂鉢。瓦質に近い。116も瓦質に近い楕で、底径7cm。117・118は小皿で、117の口径8cm、器高1.4cm。118の口径9cm、器高1cm。

青磁 (119) 龍泉窯系の碗で外面に鏡運弁が入る。

白磁 (120) 龍泉窯系の口禿げの皿になる。

青白磁 (121) 合子の破片で、復元口径5cm。

陶器 (122) 白黄色の釉の掛かった碗で国産品。

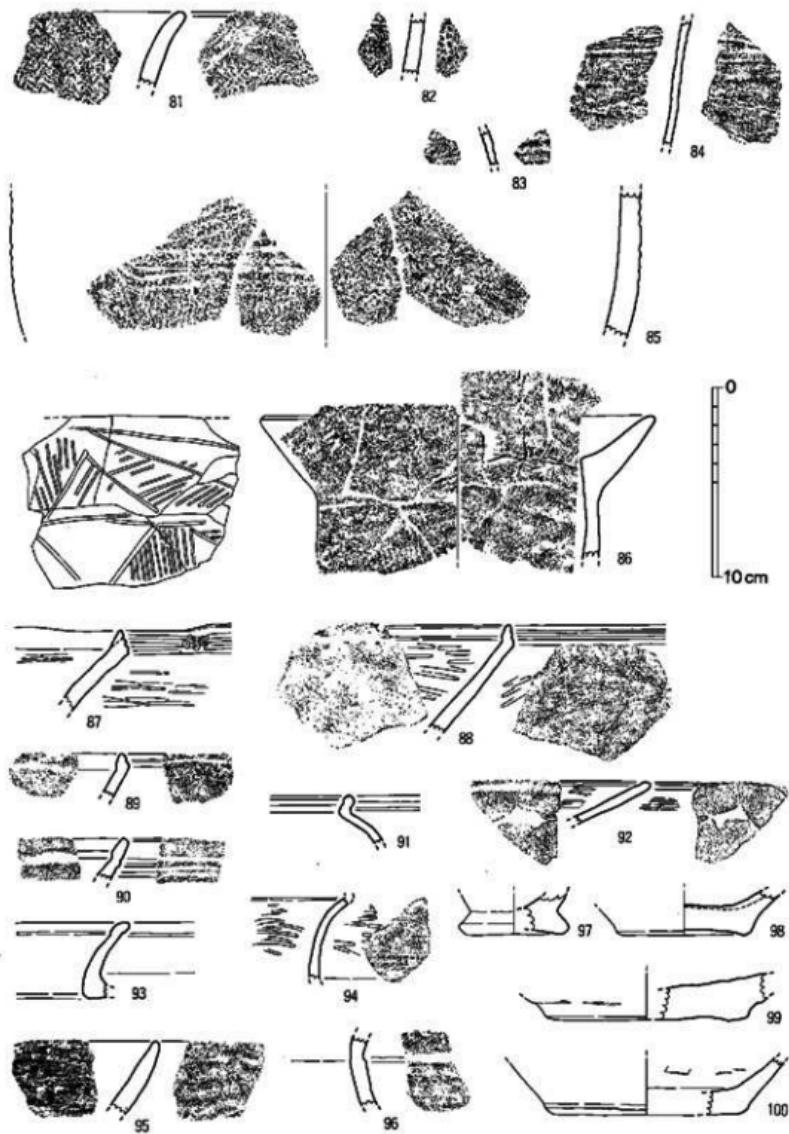
染付 (123) 瓶の破片で外面に唐草、内面に蘇鉄かと思われる文様を描く。復元口径14cm。

[D区] (図版25、第57図124~128)

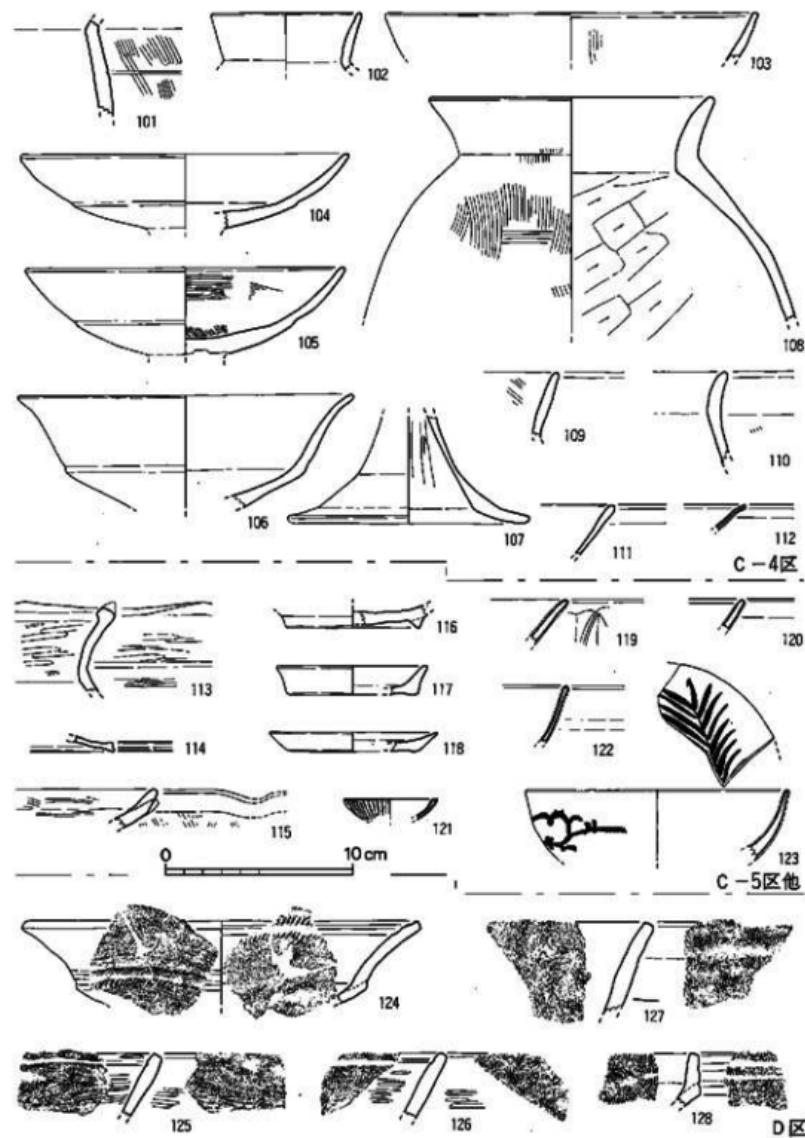
綱文土器 (124~128) 124は後期・三万田式の鉢で、外面の胴屈折部と口縁内側に、先端が丸みをもった原体による押し引き施文の刻み目がある。復元口径20.8cm。125~128は晩期。



Photo. 3 作業風景 ③



第56図 C・D区出土土器等実測図4 <C-4区> (1/3)



第57図 C・D区出土土器等実測図5 < C-4・5区、D区> (1/3)

【石器】(図版27~34、第58~69図1~169)

●旧石器時代石器 (1~5)

旧石器時代の所産と思われる石器が出土している。もとよりこの時期の遺構は見あたらないが、本来は黄褐色系の粘質土に属していたものであろう。

1はすでに柱穴の項で説明したナイフ形石器である。2はE区のP33出土。E区で後述する。

3は黒曜石の細石刃で長さ17.4mm、幅11.4mm、厚さ4.8mm、重さ1.4g。原材にある綺模様が見えている。C-3区の29~37号居跡周辺遺構検出面出土。

4は黒曜石のスクレイパーで、全長34.5mm、幅14.8mm、厚さ4.9mm、重さ2.4g。器表はやや風化している。SD4下層出土。

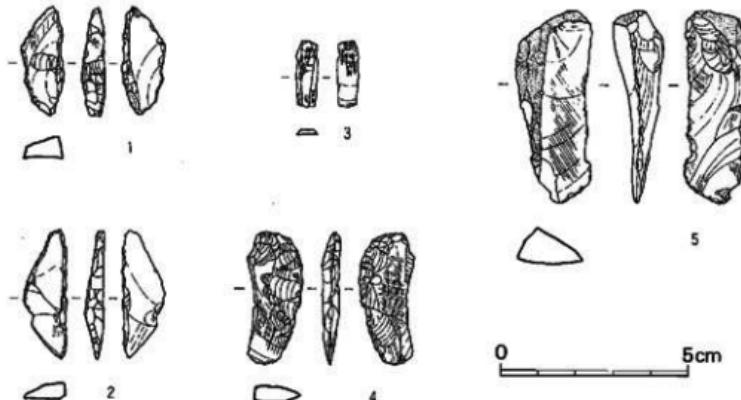
5は原材面を残す黒曜石の縦長の使用剝片で、剥離面が風化している。全長51.4mm、幅19.7mm、厚さ13mm、重さ8.9g。C-4区南東部出土。

●打製石器 (6~14・51~76)

・錐 (6~11) 6(住26)、7(住38)、8(P179)は既述。9は黒曜石でC-4区北西部出土。先端は擦れた痕跡は見えない。幅10.6mm、厚さ4.3mm。10・11はサヌカイトで、10は幅12.5mm、厚さ3mm。11は全長38mm、幅19.4mm、厚さ5.2mm、重さ3.4g。これも先端が擦れてはいない。

・つまみ形石器 (12・13) 12(P165)、13(住32)ともに既述。

・抉入石器 (14) 白っぽい黒曜石剝片に抉りを入れたものである。全長26.5mm、幅18.8mm、



第58図 旧石器時代遺物実測図 (2/3)

厚さ7.4mm、重さ2.6g。姫島産の石材か。C-1区出土。

・スクレイパー（51・52）ともにサヌカイト製で、51は全長72mm、幅39.8mm、厚さ13.4mm、重さ51g。住41出土。52は縦型で全長120mm、幅43.2mm、厚さ12.1mm、重さ54.7g。基部には原面が残る。SD 6下層出土。

ほかに、図示していないが、使用剝片やスクレイパーかと思える石器がC-2～5区より40点ほど出土している（図版28）。数としてはC-3区が最も多い。

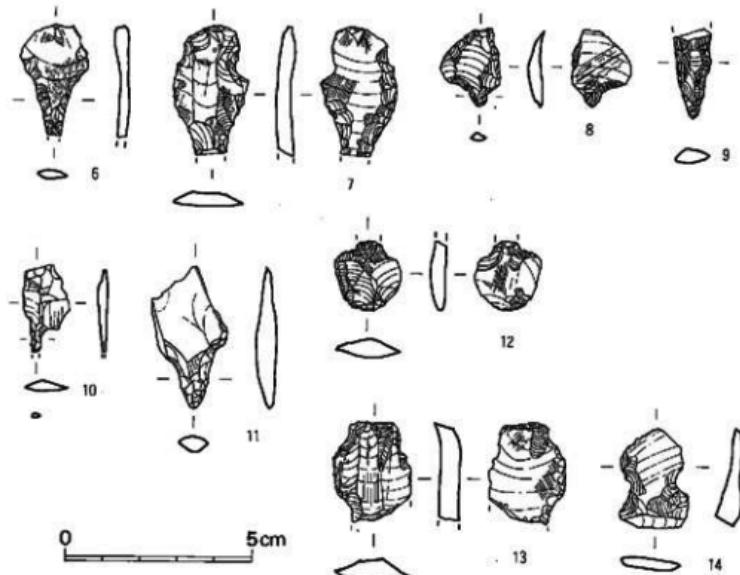
●打製石器（15～50）

住居跡・柱穴出土のものは全て図示し既述した。15（住21）、16～18（住22）、19（住29）、20（住32）、21～23（住38）、24・25（住41）、26（住42）、27～29（住43）、30（P84）、31（P164）である。32はサヌカイト製で先端を欠失する。幅14.8mm、厚さ4.2mm。SD 4下層出土。

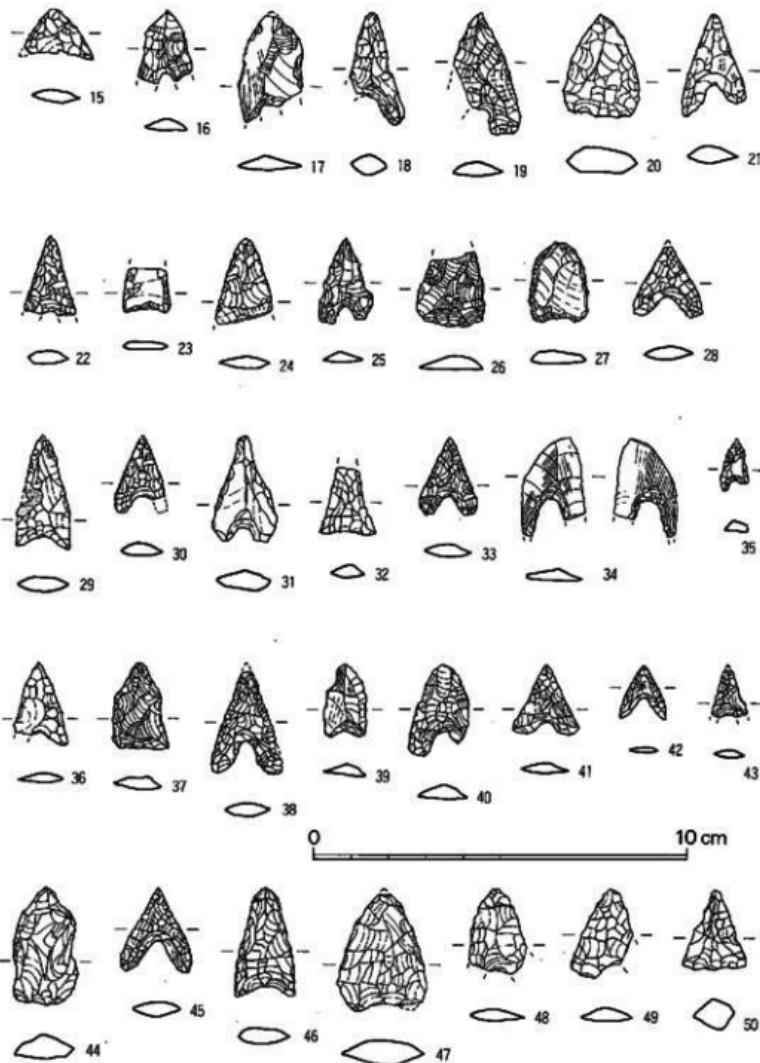
33は黒曜石で完形である。全長20.5mm、幅15.4mm、厚さ3.8mm、重さ0.7g。SD 5出土。

34は黒曜石の剝片錐で、全長26.5mm、幅16.7mm、厚さ3.7mm、重さ1.1g。C-2・3区検出面出土。

35も黒曜石で、全長13.3mm、幅7.2mm、厚さ3.1mm、重さ0.1g。住38西南検出面出土。

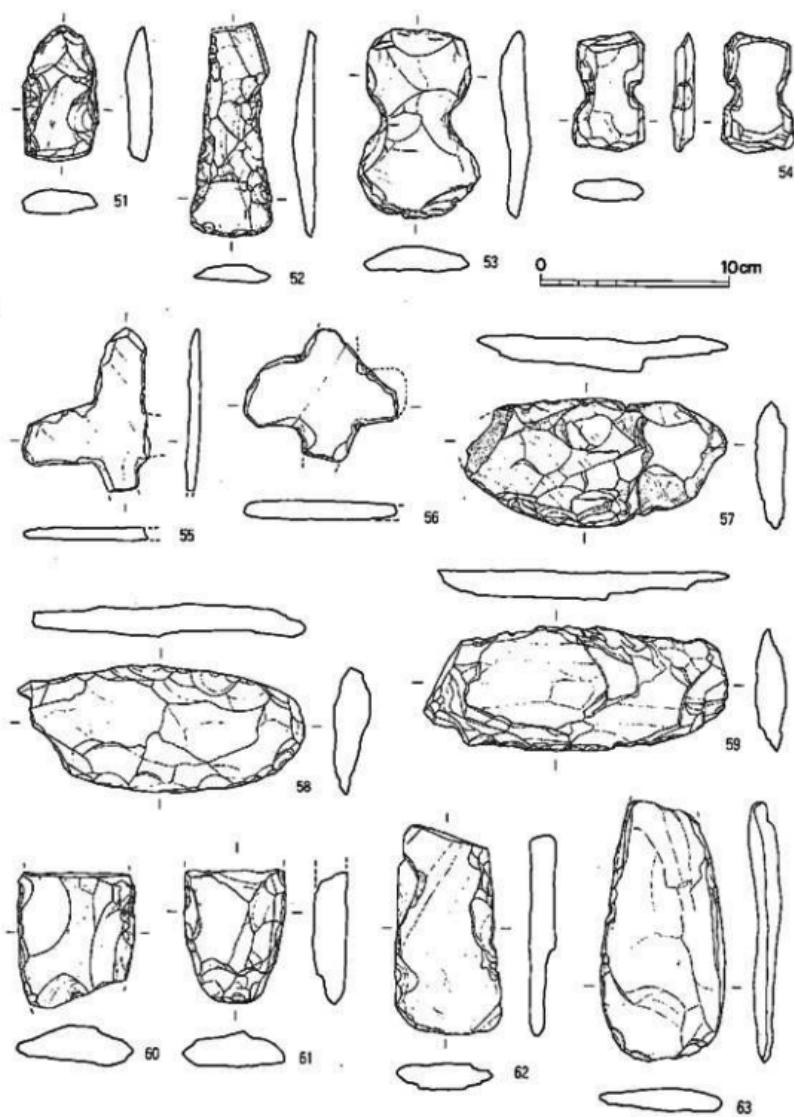


第59図 C・D区住居跡等出土打製石器実測図（2/3）



第60図 C・D区住居跡等出土打製石器実測図 (2/3)

- 36はサヌカイトで、全長21.7mm、幅14.1mm、厚さ2.7mm、重さ0.6g。SD 6出土。
- 37は黒曜石で、全長23mm、幅15mm、厚さ3.7mm、重さ1g。1号墳周辺包含層出土。
- 38も黒曜石で先端を欠失する。全長27.2mm、幅18.7mm、厚さ4.2mm、重さ1.3g。両脚は少し透明なところがある。住43～47上層出土。
- 39は黒曜石の剥片鐵で、全長19.6mm、幅11.1mm、厚さ3.6mm、重さ0.7g。1号墳周辺包含層出土。
- 40も黒曜石の剥片鐵で、全長24.8mm、幅15.4mm、厚さ4.3mm、重さ1.4g。片方の脚が短いがこれは欠損ではない。住29～37周辺検出面出土。
- 41はサヌカイトで、全長18.2mm、幅17.6mm、厚さ3.2mm、重さ0.6g。C-4区の西南部出土。
- 42もサヌカイトで完形品。全長14mm、幅12.6mm、厚さ1.7mm、重さ0.1g。扁平であり、器表に擦過痕を見る。C-4区検出面出土。
- 43・44はSX 2の出土。43は黒曜石で両脚を欠失する。現存長12.3mm、幅9mm、厚さ2.6mm、重さ0.1g。44はサヌカイトで未製品とすべきか。全長31mm、幅17.5mm、厚さ7.2mm、重さ4.5g。
- 45は瑪瑙質石材の完形品。全長22.2mm、幅18.7mm、厚さ4.1mm、重さ1.1g。C-4区北半部出土。
- 46はサヌカイトで完形品。全長28.6mm、幅16.1mm、厚さ4.4mm、重さ1.8g。C-4区検出面出土。
- 47もサヌカイトでごく一部を欠損する。全長31.1mm、幅24.1mm、厚さ7.3mm、重さ5.3g。C-5区5号墳石室の石抜き跡内出土。
- 48はサヌカイト剥片鐵で、全長22.2mm、幅15.3mm、厚さ3.6mm、重さ1.2g。住1出土。
- 49・50はともにサヌカイトで5号住居跡の出土。49は片方の脚を欠失する。現存長23.8mm、幅16.3mm、厚さ4mm、重さ1.2g。50は全長21.3mm、幅17.3mm、厚さ8mm、重さ1.7g。
- 以上の図示したもの36点のほかに、破片が大半だが、C-2区から6点、C-3区から25点、C-4区から11点、C-5区から1点、不明2点の合計45点が出土している（図版27）。図示したものと合わせると総数81点となり、C-3区での出土が最も多い。また、黒曜石製45点、サヌカイト製33点その他3点という内訳になる。
- 分鏡形石器（53・54）
ともに42号住居跡出土で既述。
- 十字形石器（55・56）
55（P117）、56（住41）ともに既述。
- 打製石斧（57～76）
57（住42）、60・61（住41）、66（住29）について既述。
58・59は石斧でなく穂摘形石器ではないかと考えて図示した。ともに片岩で58は先端部が磨耗した痕跡がある。幅67mm、厚さ19mm、重さ240g。SD 5出土。59は片方の側縁に穿孔具によると思われる抉りがある。全長161mm、幅67mm、厚さ16mm、重さ195g。住36～38西側検出時出土。

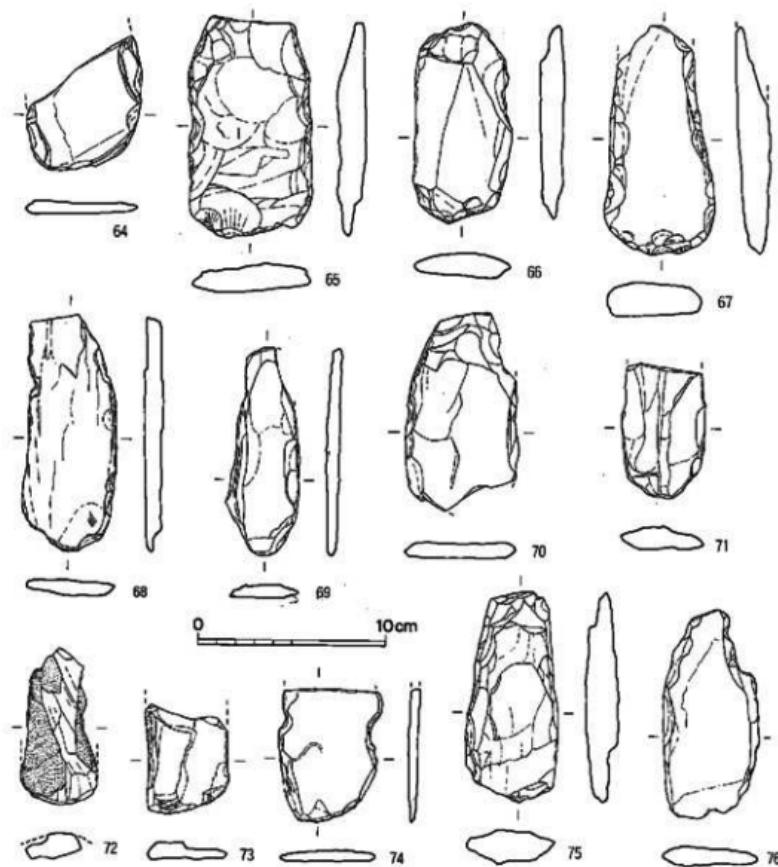


第61図 C・D区出土打製石斧・十字形石器等実測図 (1/3)

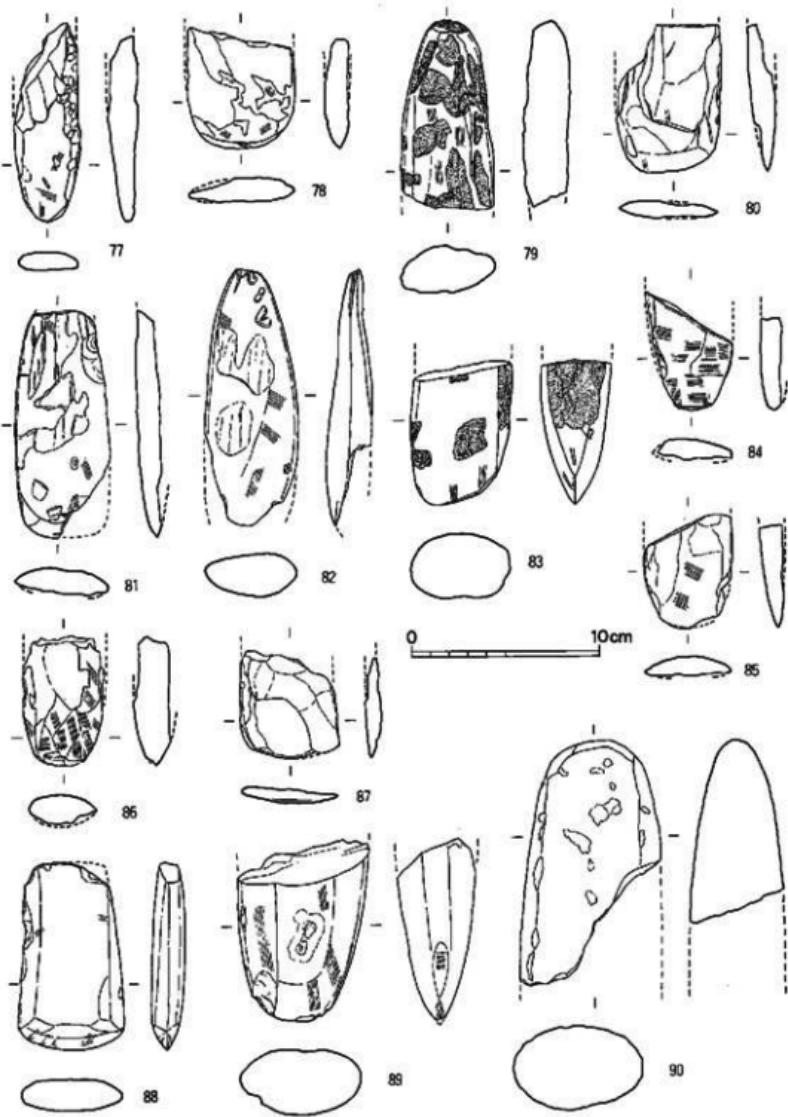
62・63はともに片岩でSD4出土。62は全長110mm、幅57mm、厚さ14mm、重さ135g。63は現存長137mm、幅66mm、厚さ14mm、重さ160g。

64は片岩で幅62mm、厚さ0.7mm、C-2区出土。

65～72はC-3区出土で、65が安山岩、67が玄武岩であるほかはみな片岩を素材とする。65は全長117mm、幅66mm、厚さ15mm、重さ165g。67は器面の片方が磨りてある。最大幅59mm、厚さ18mm。68は側縁に敲打痕が多く、抉りも入っている。また一部に磨きがあり局部磨製と称してもよい。



第62図 C・D区出土打製石斧実測図 (1/3)



第63図 C・D区出土磨製石斧実測図 (1/3)

全長125mm、幅50mm、厚さ9mm、重さ100g。69は全長110mm、幅40mm、厚さ8mm、重さ475g。70は幅60mm、厚さ8mm g。71は幅44mm、厚さ12mm。72は幅41mm。73は片岩でC-4区出土。刃部が磨かれており、局部磨製である。幅46mm、厚さ10mm。74・75はともに片岩でC-5区出土。74は側縁に抉りがある。幅53mm、厚さ7mm。75は全長113mm、幅49mm、厚さ18mm、重さ135g。76は片岩でD区のS R 2出土。全長111mm、幅52mm、厚さ11mm、重さ98.5g。

●磨製石斧 (77~90)

77(住22)、78・79(住41)、84(住29)については既述。

80はC-2区のS D 5出土で片岩製。擦過痕はあまり見られない。幅55mm、厚さ13.5mm。

81~83・86~89はC-3区出土で、82・88が蛇紋岩であるほかはみな片岩を素材とする。81は頭部のやや下寄りに紐掛けしたらしい痕跡がある。現存長120mm、幅50mm。82はよく磨かれているが、それでも素材原面を残す所がある。現存長136mm、幅50mm、厚さ23mm、重さ185g。83は肉厚のつくりで側面に敲打痕がある。幅54mm、厚さ34mm。86は擦過痕が著しく、刃部には欠損がある。幅43.5mm。87は局部磨製とすべきもので、幅52.2mm、厚さ8.5mm。88は頭部の一部に欠損があるがほぼ完形でよく磨かれており整美な形状を呈する。刃部の使用痕からすると図の右側に柄が付くらしい。全長99.8mm、幅55.9mm、厚さ17.7mm、重さ148g。89は大型の破片でよく磨かれている。幅71mm、厚さ35mm。

85は片岩でC-4区のS X 2出土。幅46.6mm、厚さ12.1mm。

90は結晶片岩で石斧頭部と思われる。D区のS R 3出土。現存長130mm、幅76mm。

●打欠石錐 (91~111)

住居跡・柱穴出土の91~93(住22)、94~97(住41)、98(P68)は既述した。

110が石英斑岩かと思われる以外は全て玄武岩質の石材である。表裏面ともによく磨かれたものが多い。

99・100はC-2区のS D 4出土。99はやや大きめで全長56mm、幅43mm、厚さ19mm、重さ71.1g。100は全長39mm、幅32mm、厚さ15mm、重さ26.9g。

101~105はC-3区出土。101は欠損し幅45mm、厚さ13mm。紐ずれの痕跡がある。102は長さ40mm、幅40mm、厚さ16mm、重さ37.1g。103にも打欠部に紐ずれの痕跡がある。長さ42mm、幅39mm、厚さ14mm、重さ33.8g。104も打欠部に紐ずれの痕跡がある。長さ55mm、幅47mm、厚さ25mm、重さ87.6g。105は全長50mm、幅39mm、厚さ23mm、重さ69.6g。

106~110はC-4区出土で、107・108はS X 2、109は住2、110は住3からである。106は長さ51mm、幅37mm、厚さ16mm、重さ47.8g。107は長さ54mm、幅48mm、厚さ20mm、重さ66.9g。108は打欠部に紐ずれの痕跡がある。長さ45mm、幅47mm、厚さ24mm、重さ68.1g。109も打欠部に

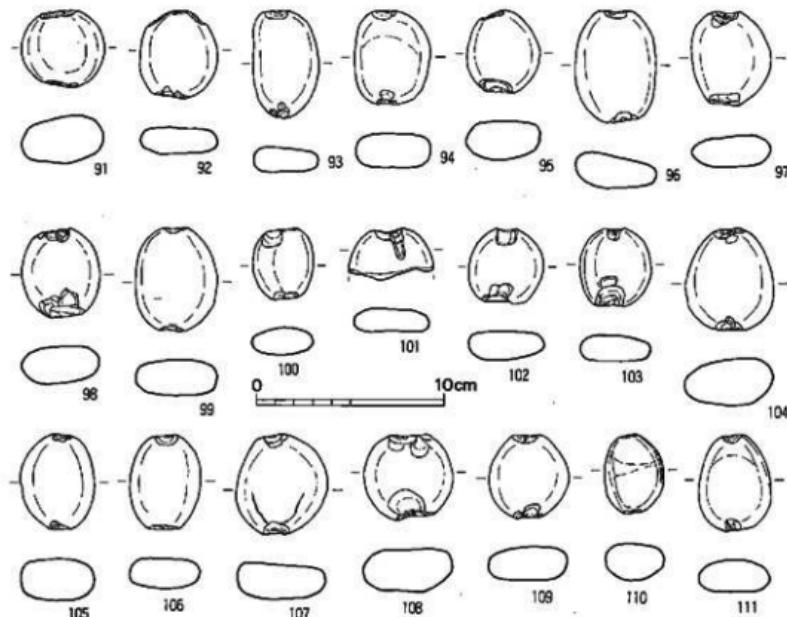
紐ずれの痕跡がある。長さ46mm、幅42mm、厚さ18mm、重さ48.1g。110の打欠部は浅い。側面には小さな敲打痕がある。長さ42mm、幅31mm、厚さ20mm、重さ34.7g。

111はC-5区の5号住居跡出土で、打欠部に紐ずれの痕跡がある。また一部がすすぐたように黒ずんでいる。長さ51mm、幅39mm、厚さ18mm、重さ52.8g。

●棒状石器（112～120）

円柱棒状の石器をこのように仮称しておくが、磨製石斧のような光沢のある磨きが施されているのではないけれども器面に滑らかな部分があり、打製石器のように剥離面のみでないものを取り上げている。完形でなく破損品が多いので石斧の未製品の可能性もある。また端部および側面に敲打痕を見るものがあるので叩石としての用途も考えうる。図示したのは9点だが別にまだ多くが出土している（図版30～32）。

住居跡その他出土の112（住41）、113（住42）、114（土坑1）は既述した。全て片岩もしく



第64図 C・D区出土石錐実測図（1/3）

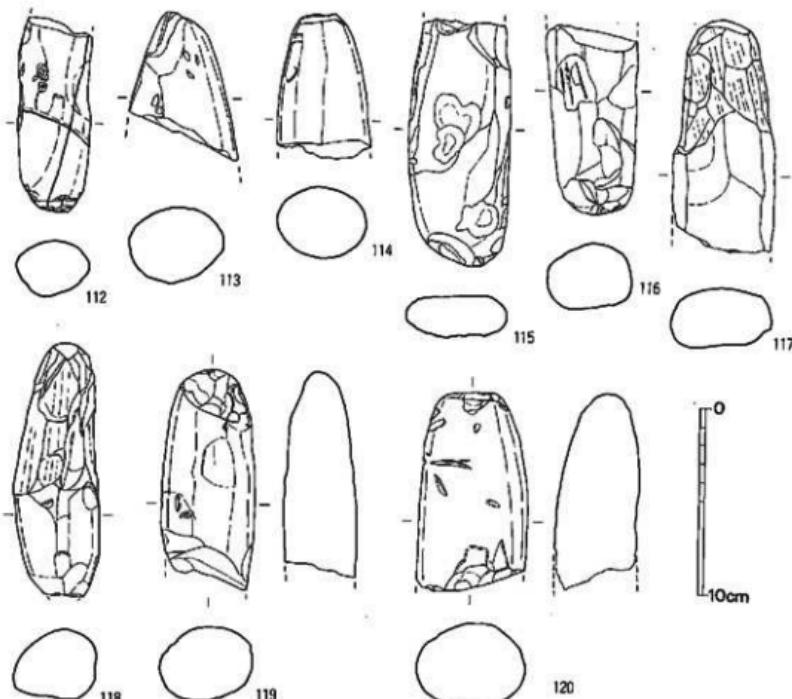
は結晶片岩を素材としている。

115はC-2区のSD5出土。やや扁平であり叩石かもしれない。現存長132mm、幅54mm、厚さ22mm、重さ310g。

116・117はC-3区出土。ともに叩石かもしれない。116は幅49mm、厚さ35mm。117は半分は側面を残す。幅55mm、厚さ31mm。

118はC-4区のSX2出土。これも器面の半分強が粗削りのままで残りは器面調整をしていると見て取れる。現存長136mm、幅45mm、厚さ32mm、重さ400g。

119・120はC-5区の5号住居跡出土。ともに器面は敲打による面取りのあと滑らかに仕上げているが磨かれてはいない。119は現存長117mm、幅50mm、厚さ39mm、重さ365g。120は石斧の頭部のようである。現存長107mm、幅59mm、厚さ43mm、重さ475g。



第65図 C・D区出土棒状石器実測図 (1/3)

●すり石・叩石・台石 (121~165)

器表面が滑らかに磨れていたり敲打による浅い窪みがあるもの、側面を面取りしたり敲打痕があるものを、すり石・叩石・台石としたが、もとよりその区分は明確ではない。

住居跡・柱穴等出土のもの、121(住22)、160(住29)、122(住37)、124・125(住38)、123・126~128(住41)、129~131(住43)、132・133(SD3)、138(P212)は既述した。

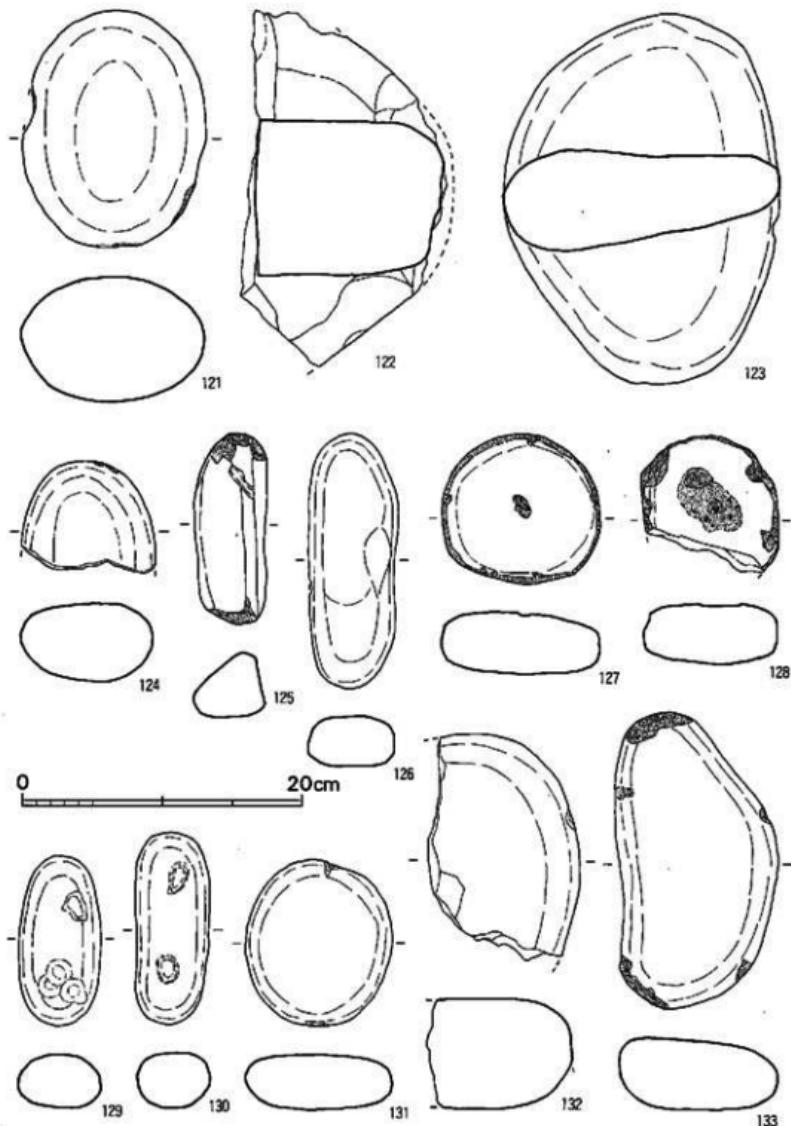
134・135はC-2区のSD4出土。ともに玄武岩質石材で、134は幅73mm、厚さ52mm、135は幅158mm、厚さ58mm。

136・137・139~146・149~158はC-3区出土。144が安山岩、151が凝灰岩質、158が石英質であるほかは全て玄武岩質である。136は幅86mm、厚さ46mm。137は全長107mm、幅71mm、厚さ40mm、重さ415g。139は全長187mm、幅135mm、厚さ42mm、重さ1610g。140の上面は磨れて平らになっている。幅122mm、厚さ76mm。141は表裏両面と側面に敲打痕が著しい。全長147mm、幅112mm、厚さ46mm、重さ1025g。142は全長96mm、幅67mm、厚さ37mm、重さ320g。143は扁平で両側面に抉りらしき所があり鍤かとも考えうる。全長70mm、幅61mm、厚さ13mm、重さ74.5g。144は側面を一周して敲打痕があり、かつ表裏とも中央に窪みを形成している。全長60mm、幅56mm、厚さ24mm、重さ105g。145は側面が擦れて面取りされている。幅82mm、厚さ43mm。146は残存する側面を一周して敲打痕があり、かつ片面には中央に窪みがあり、その反対面は平らになっている。全長120mm、幅89mm、厚さ35mm、重さ515g。150は長辺の両側面が擦れており、片面中央には敲打による浅い窪みがある。全長170mm、幅112mm、厚さ66mm、重さ1970g。149・150はSD6からの出土。151は全長97mm、幅103mm、厚さ50mm、重さ575g。152は表裏ともよく磨れている。全長104mm、幅89mm、厚さ46mm、重さ545g。153は全長114mm、厚さ49mm、重さ685g。154は表裏面とともにとてもよく磨れていて平らに近く、両側面も面を取り、そこには磨ったときの条痕がある。全体として二等辺三角形跡状の整った形である。全長138mm、幅108mm、厚さ39mm、重さ940g。155の残存する側面はよく磨れている。全長130mm、幅103mm、厚さ31mm、重さ565g。156も周縁の敲打痕が著しい。約3分の1が赤変している。全長114mm、幅86mm、厚さ38mm、重さ625g。157も周縁に敲打痕がある。厚さ49mm。158は直方体状をなし、器表に微細な擦痕があるが使用によるものかどうか不明。全長81mm、幅65mm、厚さ56mm、重さ538g。

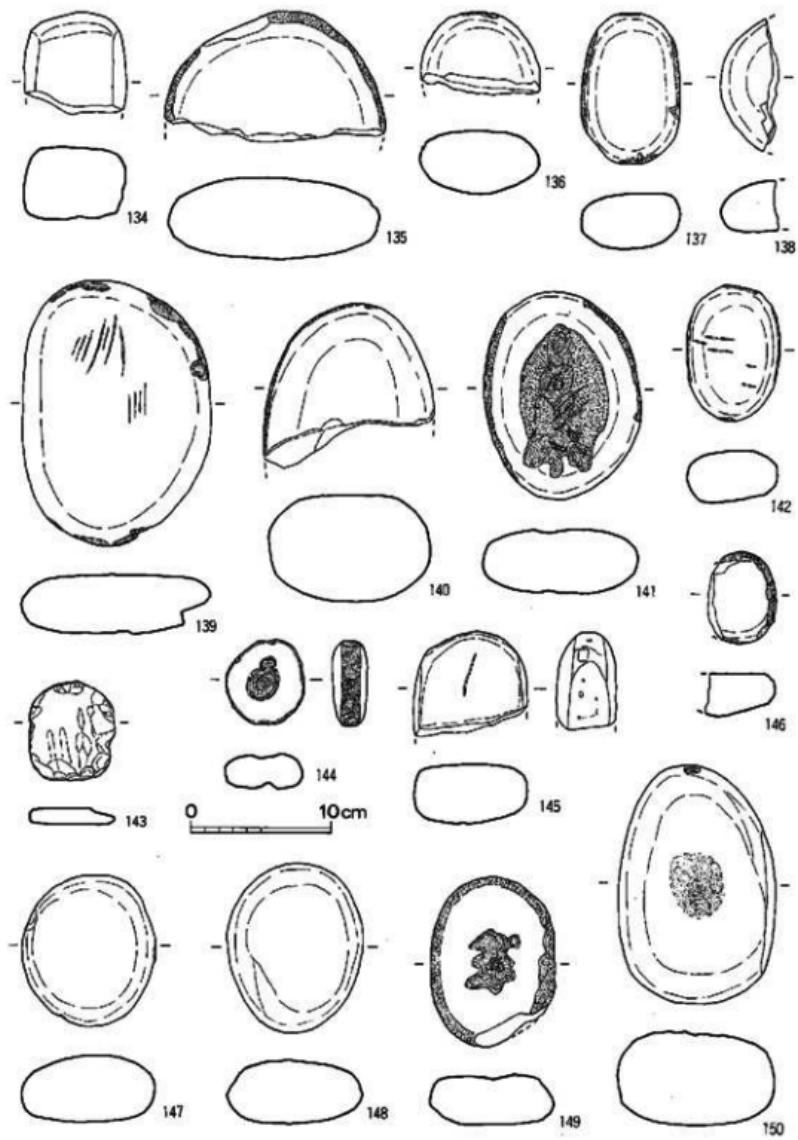
159はC-4区出土。表裏面ともにとてもよく磨れていて側面には敲打痕がある。全長130mm、幅113mm、厚さ44mm、重さ1020g。

147・148・161はC-5区出土で、147・148は7号住居跡からである。147は全長107mm、幅96mm、厚さ47mm、重さ665g。148は全長120mm、幅97mm、厚さ45mm、重さ765g。161は器表中央と両側縁に敲打痕がある。全長107mm、幅87mm、厚さ49mm、重さ615g。

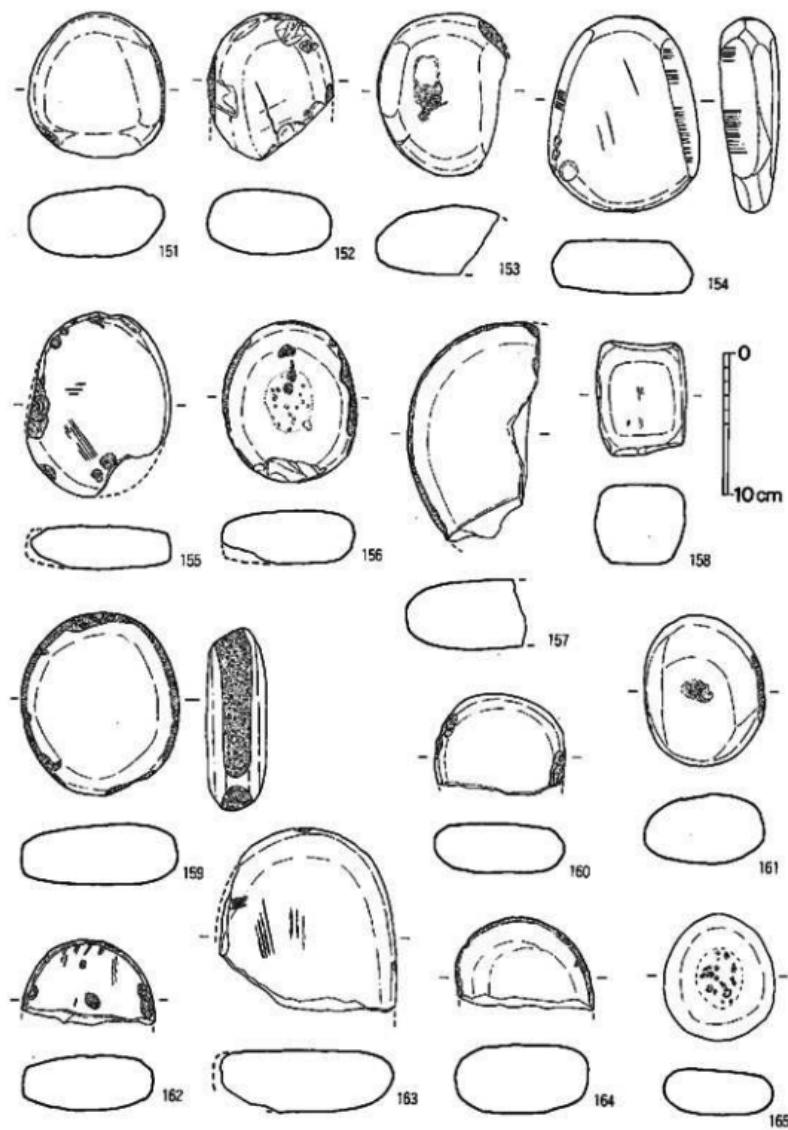
162~164はD区出土。162・163はSR3からである。162は表裏面ともによく磨かれ、側縁も



第66図 C・D区出土すり石・叩石実測図1 (1/4)



第67図 C・D区出土すり石・叩石実測図2 (1/4)



第68図 C・D区出土すり石・叩石実測図3 (1/4)

面を取っている。幅95mm、厚さ39mm。163は所々に条線が見える。厚さ44mm。164の周縁も敲打痕が著しい。幅100mm、厚さ49mm。

165は地区不明の採集品。上面は敲打痕の上を磨っており、少し産み気味である。全長90mm、幅79mm、厚さ32mm、重さ350g。

● 砥石 (168・169)

ともにC-5区出土である。168は砂岩の中砥で下端の破損部以外はきれいに面を取っている。現存長81mm、幅53mm、厚さ10mm。169は粘板岩らしい石材の仕上砥である。破片にて本来の法量は不明。

【土製品】(図版34、第70図1~9)

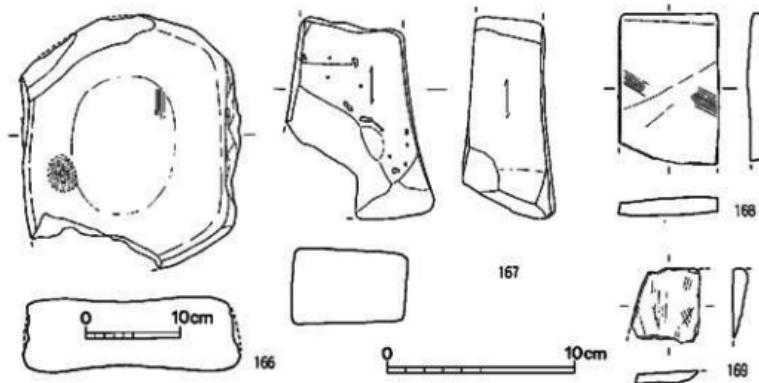
● 管状土錐 (1~8)

1 (P71)・2 (P104)・3 (P114)・4 (P141)・5 (P153)については既述した。P104は青磁・白磁片、P114は青磁片を伴っているので中世期に属するものであろう。

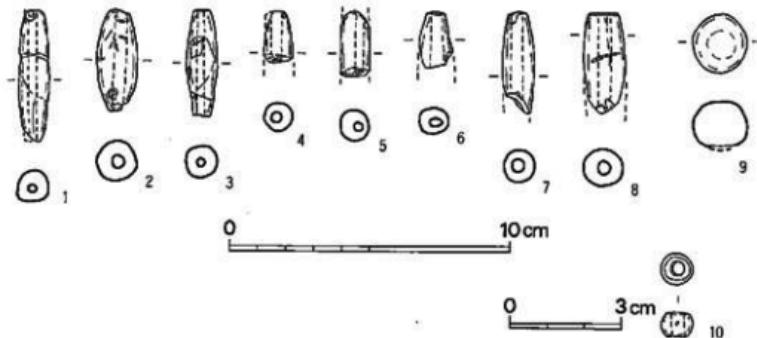
6はC-4区北東部出土の破片。少し楕円形に歪んでいる。残存長20.2mm。7はC-4区のSX2出土で約3分の2が残る。径11.4mm。8はC-5区7号墳周辺の出土で、現存長35.3mm、径14.9mm。

● 玉 (9)

C-4区の遺構検出時に出土した土製の玉で、完全な球形ではなく、孔は穿たれていない。径19.2~21mm、重さ6.3g。



第69図 古墳その他出土石器実測図 (1/3・1/6)



第70図 C・D区出土土錐・土玉・ガラス玉実測図 (1/2・2/3)

C. E区の遺構と遺物 (第71~82図)

東西に長い調査区の東半分に柱穴や包含層が見られた。西側は柱穴すらもなく、西端に近い方は一段低くなっている。

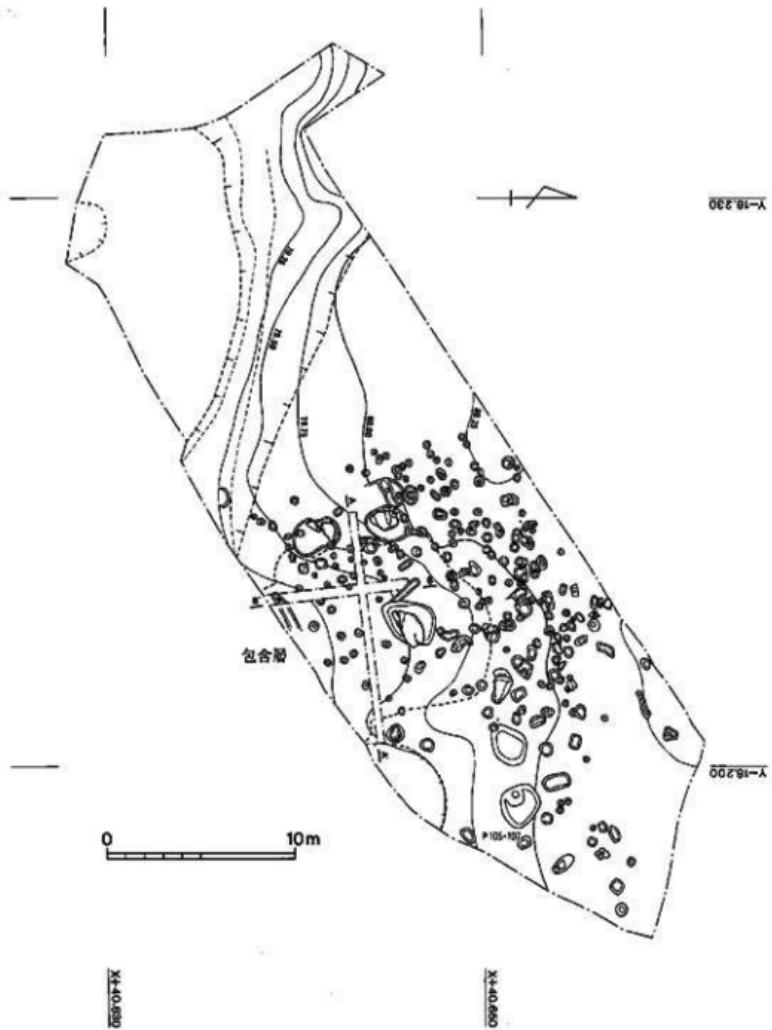
東半分の柱穴内とその周辺、包含層からは多くの縄文土器と中世の遺物が出土しているが、僅かに弥生土器、須恵器もある。柱穴群は疊層を切り込んで掘られており122個を数えたが、大石を据えるためと思われるものもあった。柱穴群の間にも遺物が散布しており、それらは一定のまとまりごとに40箇所ほどで取り上げたが、このうちの中世期の遺物に関しては、調査中には建物としては1棟も把握できなかったものの、やはり建物が存在した結果としてのものとみるのが妥当であろう。確定できないけれども可能性のある所を図示しておきたい (第72図)。

包含層は柱穴群のある東半部のうちの西南端付近に径9mほどの範囲で認められた。ここは深さ30cmほどの浅い埋み状になり、最下層は縄文のみであった。

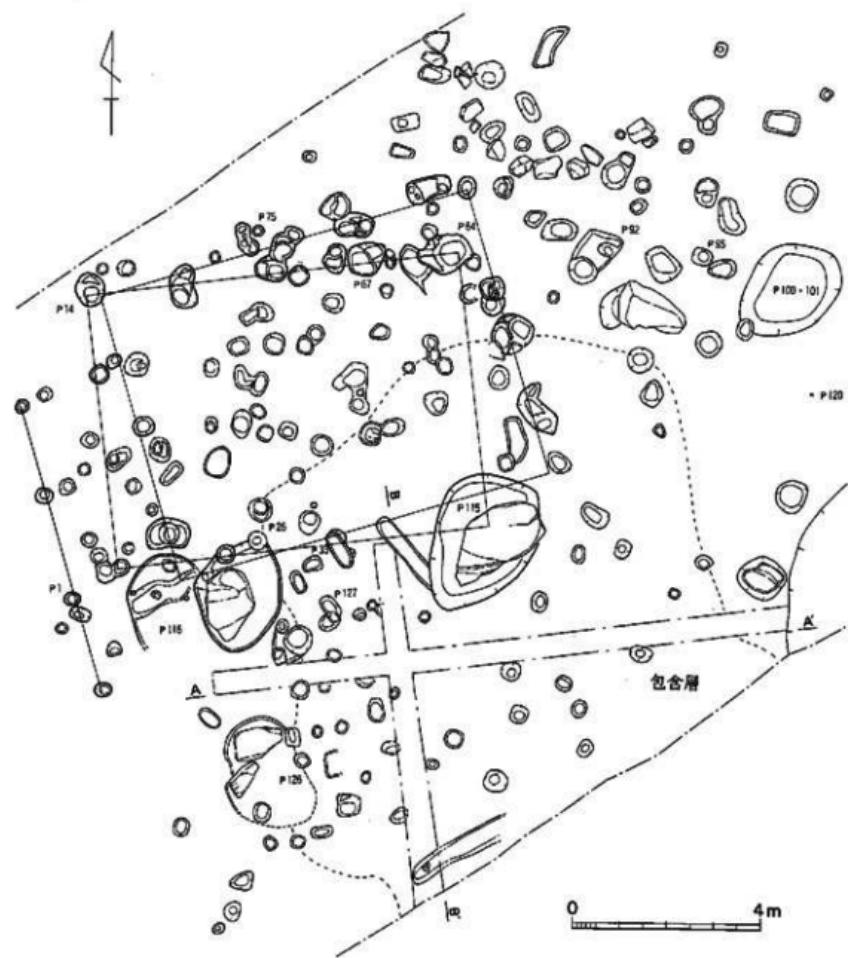
なお調査区中央東寄りの北端部からは湧水もみられた。

●柱穴出土遺物 (図版27、34~36、第74~76図1~51・54~57・59~63・65~76・78、58図2、82図1・2・7・12・13・14・16)

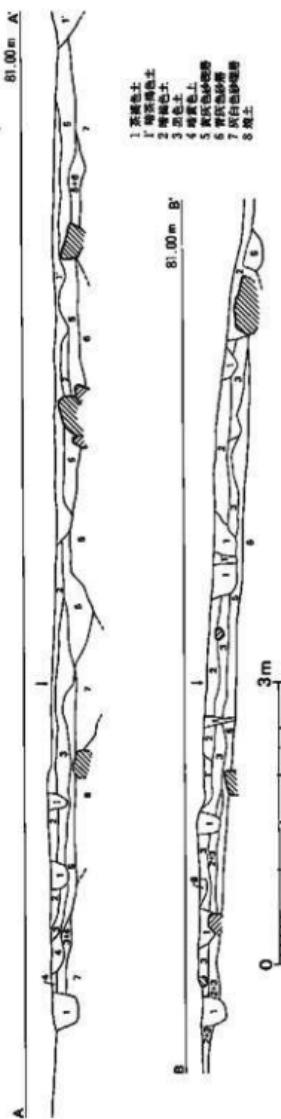
変則的な説明になるが、縄文・弥生など中世以前の土器等をひとまとめにし、また柱穴でもいくつかまとめて出土しているものは柱穴ごとに遺物を掲示する。1個のみの出土についてはまとめて記述する。なお土師器の小皿・壺の底部は全て糸切りである。



第71図 E区遺構配置図 (1/300)



第72図 E区掘立柱建物跡？実測図 (1/120)



縄文土器 (1~11) 1は押型文土器のようでもあるが、器壁が薄いのでやはり晩期か。2~11は晩期土器である。11は口縁の可能性もあるが不明。

弥生土器 (12) 壺の口縁部片である。終末期であろう。

須恵器 (13・14) ともに壺の口縁部片とみられる。14の胎は紫色を呈する。

・P14 (15~21) 全て土師器である。15は手捏ねのミニチュアの壺である。ほぼ完形。口縁の一部に二次熱を受けた所がある。口径4.8cm、器高2.9cm。16~18は小皿で18はやや深い。17の口縁には二次熱を受けた所があり、内面の一部には煤が付着している。灯明皿として使用した痕跡とみてよい。口径7.4~7.8cm、器高1.7~2.1cm。19~21は壺で、19の復元口径14cm。

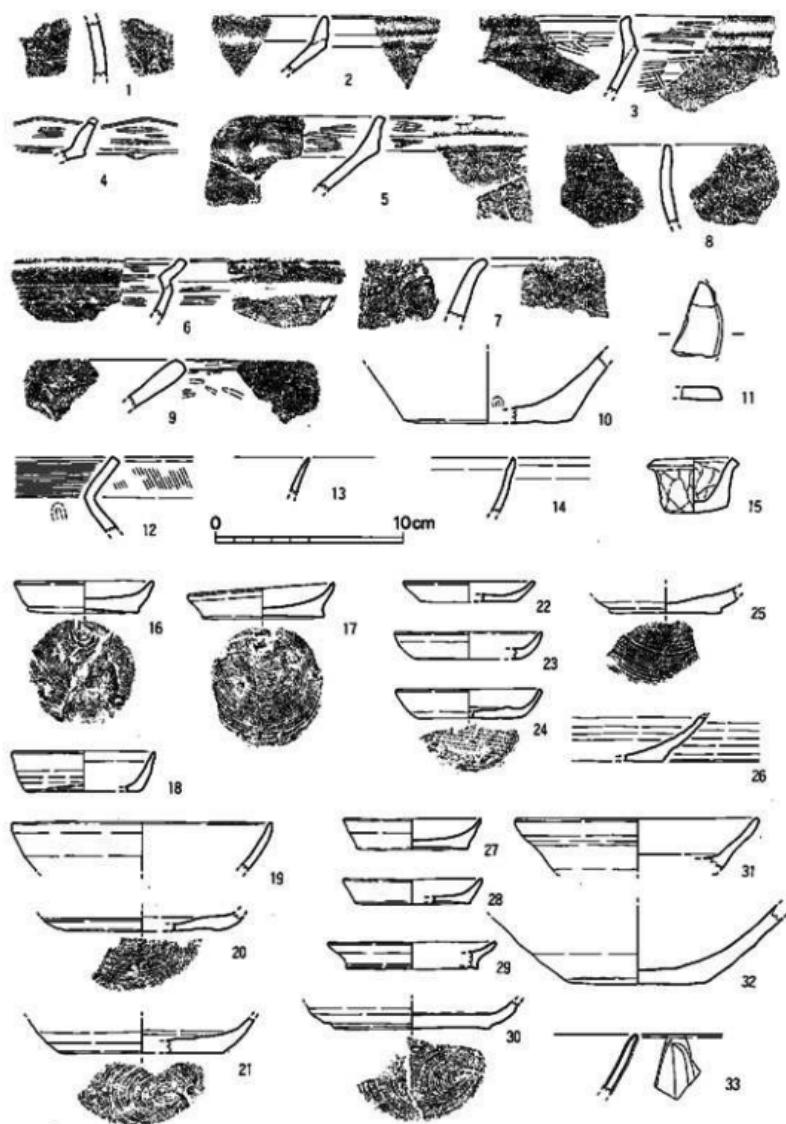
・P57 (22~26) 土師器である。22~24は小皿で、22の内面の一部には煤が付着している。24には板目痕がある。口径7~8cm、器高1.1~1.5cm。25・26は壺。

・P115 (27~33) 27~29の土師器小皿は口径7.4~9cm、器高1.3~1.6cm。30・31は土師器壺の破片で31の復元口径13cm。32は東播系の須恵質土器のこね鉢。33は龍泉窯系の青磁碗片。

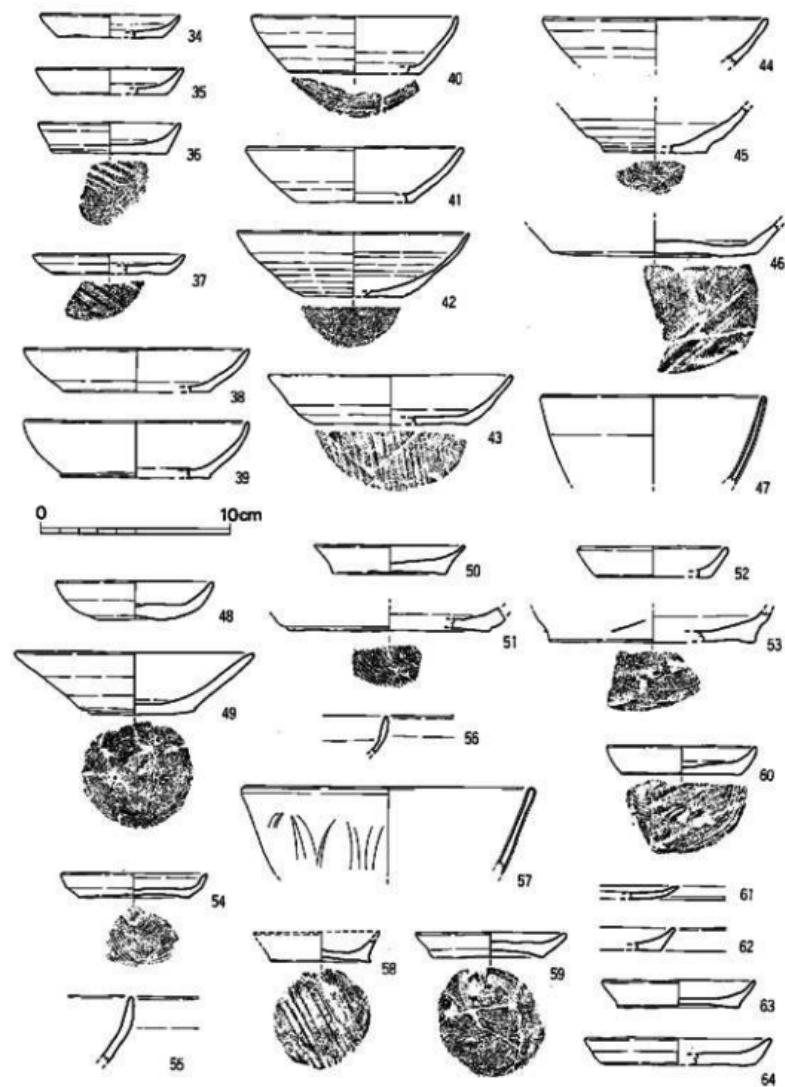
・P84 (34~47) 34~37の土師器小皿は口径7.4~8cm、器高1.1~1.6cm。34は二次熱を受けている。36・37は板目痕がある。38~45は土師器壺で口径11~13cm、器高2.3~3.4cm。46の土師器はかなり大きめなので皿か。43・46には板目痕がある。47は龍泉窯系と思われる青磁碗で復元口径12cm。

・P26 (48~49) ともに土師器。48の小皿は口径8.4cm、器高2cm。49の壺はかなり強い二次熱を受け、一部は赤褐色に変色している。口径12.6cm、器高3.3cm。

・P82 (50・51) ともに土師器で50の小皿は口径



第74図 E区出土土器等実測図1 <ピット> (1/3)



第75図 E区出土土器等実測図2 <ピット> (1/3)

8 cm、器高1.5cm。51は坏底部分。

・P24 (54・55) ともに土師器。54の小皿は口径7.8cm、器高1.3cm。55は坏口縁部片。

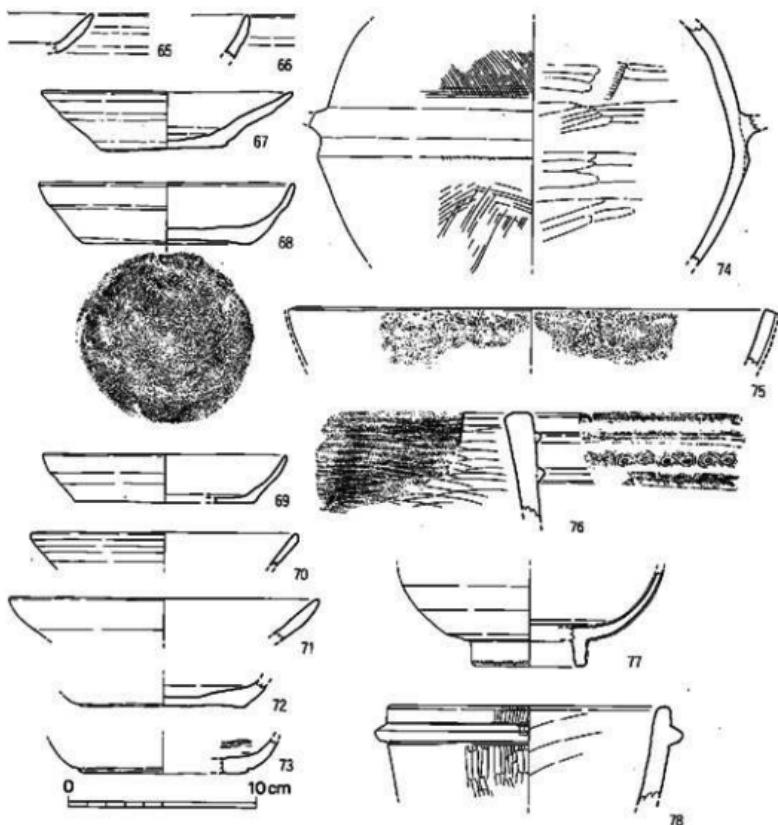
・P92 (56・57) 56は土師器小皿片。57は龍泉窯系の青磁碗で蓮弁文に鏽は見られない。復元口径15.6cm。

土師器小皿 (59~63) 59は口縁に二次焼を受けた所がある。

土師器坏 (65~73) 67は口径13.4cm、器高3.1cm。68は口径13.6cm、器高3.3cm。

瓦質土器 (74~76) 74は羽釜で腹部突帯より下半には煤が付着する。74はこね鉢であろうか。

76は火鉢片。



第76図 E区出土土器等実測図3 <ピット> (1/3)

石鍋（78） 滑石製で外面はすすぐて黒色である。復元直径16.4cm。

石器（第58図2、82図1・2・7・12・13） 第58図2はサスカイトのナイフ形石器で全長33.7mm、幅11.4mm、厚さ4.8mm、重さ1.4g。P33出土。第82図1・2はすり石もしくは叩石。ともに玄武岩質でP116出土。1は全長106mm、幅95mm、厚さ47mm、重さ575g。2は長さ109mm、幅108mm、厚さ40mm、重さ605g。同7は粘板岩製の仕上げ砥石で現存長122mm、幅36mm、厚さ10mm。P95出土。同12・13は打製石鎌で、12は長さ16.3mm、幅15.7mm、厚さ3.2mm、重さ0.5g。黒曜石製。P1出土。13はサスカイト製で、長さ17mm、厚さ3.2mm。P126出土。

土製品（第82図14） 管状土錐でP75出土。全長28.9mm、径13mm、重さ4.2g。

鉄器（第82図16） 刀子であろうか。P50出土。

●造構検出面出土遺物（図版32、34～36、第77～79図52・53・58・64・77・79～170、82図3・8・9・15・17～19）

縄文土器（79～98） 79・80は後期西平式系か。他は晩期で、粗製深鉢が多い。

土師器（99） この环は中世の所産でなく次の須恵器と同じ時期であろう。

須恵器（100・101） 碗であろう。100の胎は紫色を呈する。

土師器小皿（52・58・64・102～117） これらの口径は64・117を除くと6.9～8.8cm、器高1.1～1.6cmである。116は片口状になっている。

土師器环（53・118～155） 118は椀状の器形で口径9.9cm、器高3.7cm。他は小破片で法量が多いが、口径12～13.6cm、器高2.4～3.5cmの間にある。121は糸切りのあと板目痕がはっきりしている。125は油煙のような黒色物が付着している。153の内底面にはヘラ先で施した条線がある。

須恵質土器（156～159） 東播系のすり鉢・こね鉢である。

瓦質土器（160～167） 160・161はともに外面に煤が付着している。鍋であろうか。164はこね鉢の底部か。165・166は瓦の破片であろう。166の外面は黒化している。167は陶器とすべきかもしれない。車輪文と花文の印刻がある。

青磁（77・168～170） みな龍泉窯系と思われる。170の内面には目あとがある。

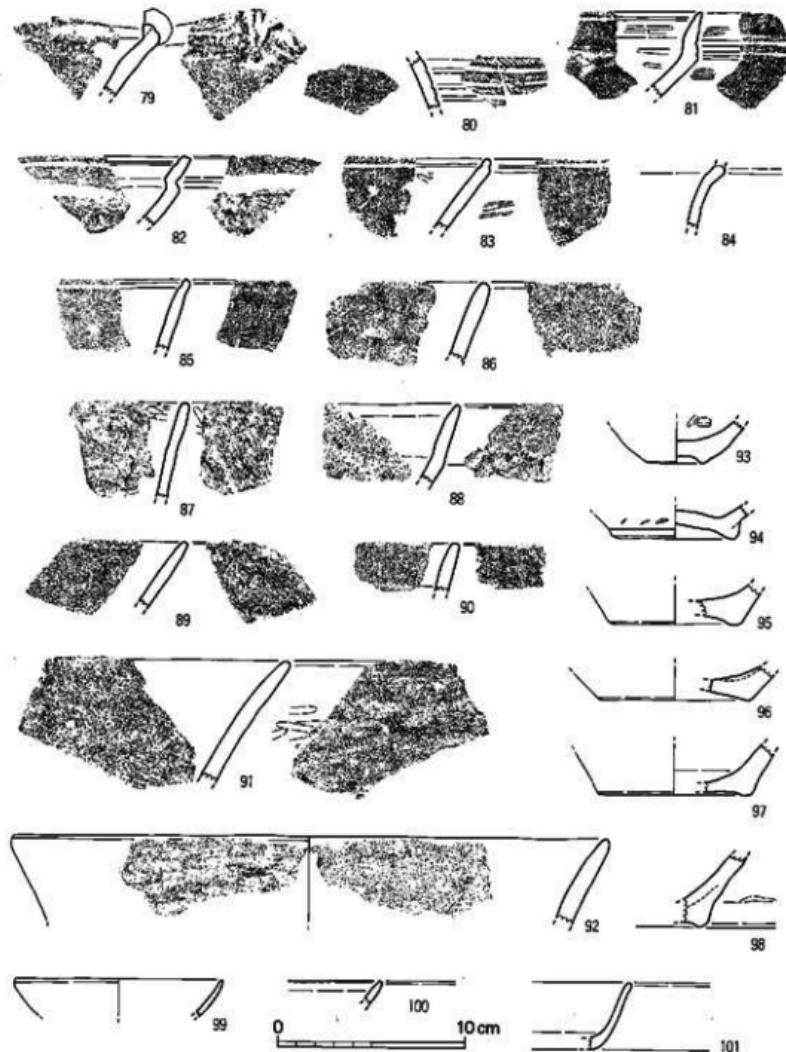
石器（第82図3・8・9・10） 3は台石とすべきであろうか。火熱を受けた所がある。玄武岩質で幅174mm、厚さ58mm。8・9は粘板岩製の仕上げ砥石で、7は幅35mm、厚さ6mm。10は玄武岩質の打欠石錐で長さ56mm、幅42mm、厚さ22mm、重さ83.7g。

土製品（第82図15） 棒状品で用途不明。径10.4mm。

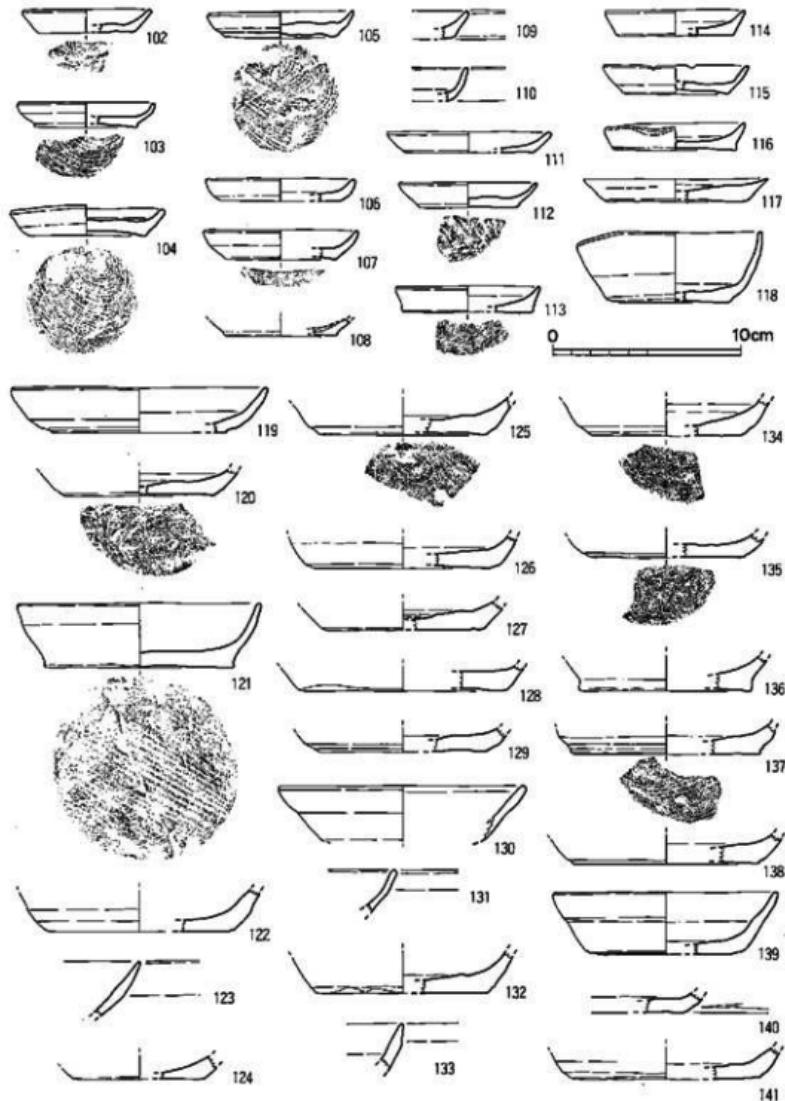
鉄器（第82図17～19） 17・18は釘であろうか。19は不明品。

●包含層出土遺物（図版35・36、第80・81図171～204、82図4～6・11）

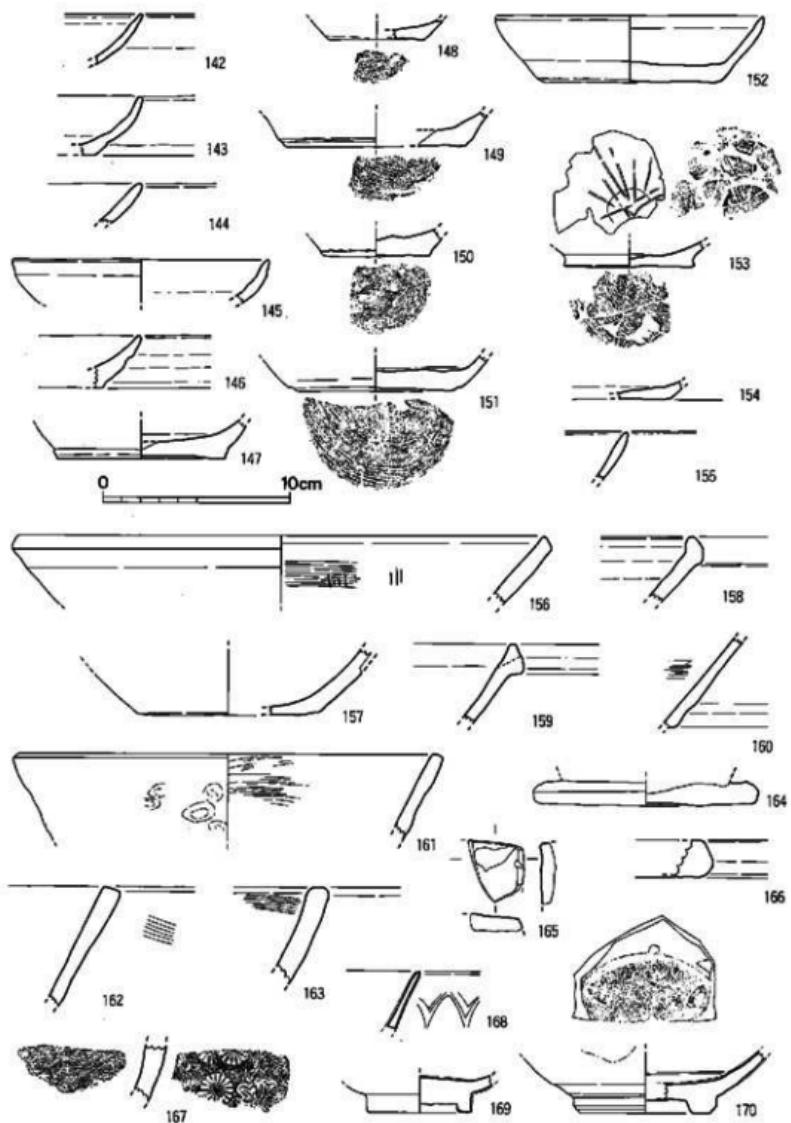
包含層遺物は黄褐色土（192～196）、黄色土（171～191）、黑色土（197～199）、黒褐色土（197～204）の4層で取り上げているが、黄色土～黄褐色土は下層であって土層図の4・5層に



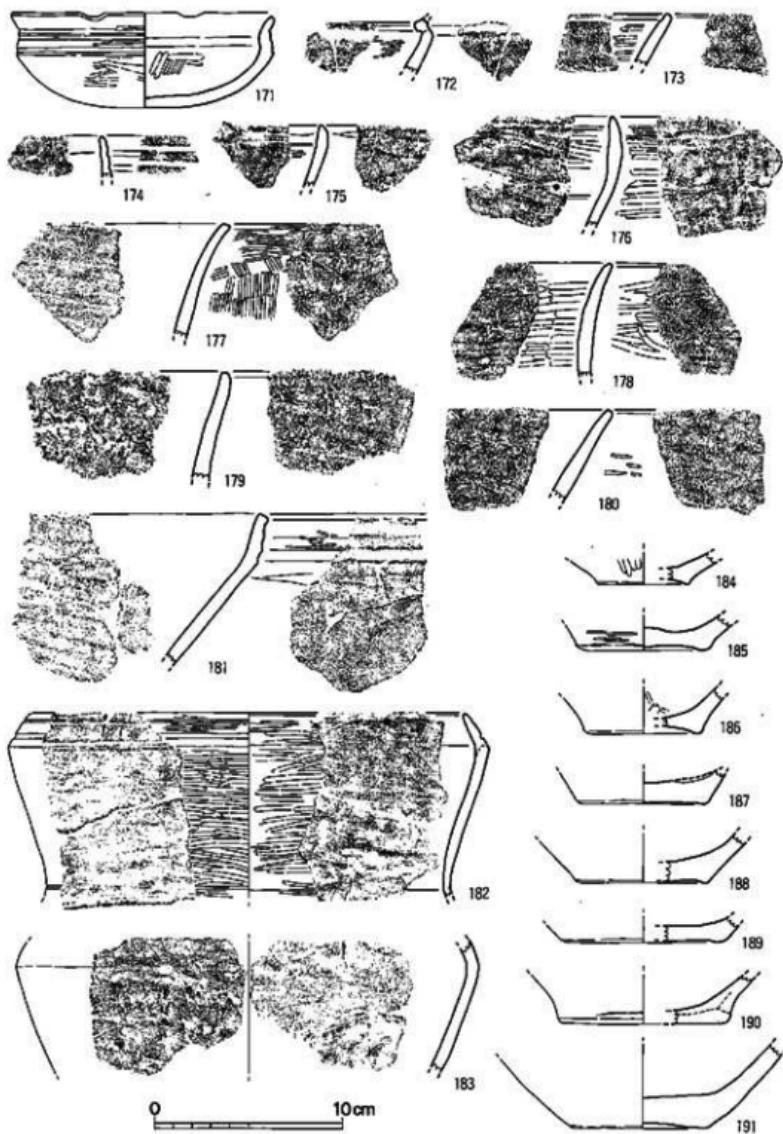
第77図 E区出土土器等実測図 4 〈遺構面〉 (1/3)



第78図 E区出土土器等実測図 5 〈遺構面〉 (1/3)



第79図 E区出土土器等実測図 6 <造構面> (1/3)



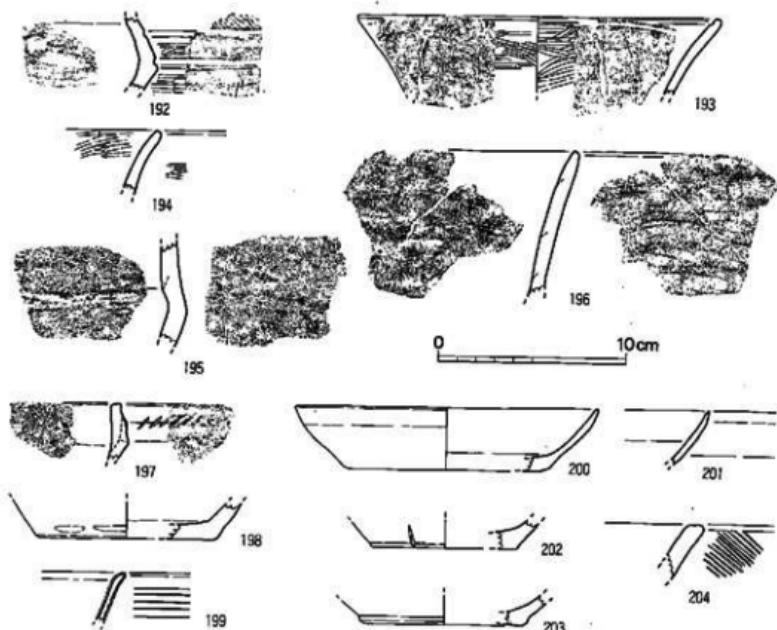
第80図 E区出土土器等実測図7 〈包含層〉(1/3)

あたる。土師器数点も出土しているが、ほとんど縄文土器である。黒色土～黒褐色土は上層の1～3層にあたり、土師器その他のが多い。

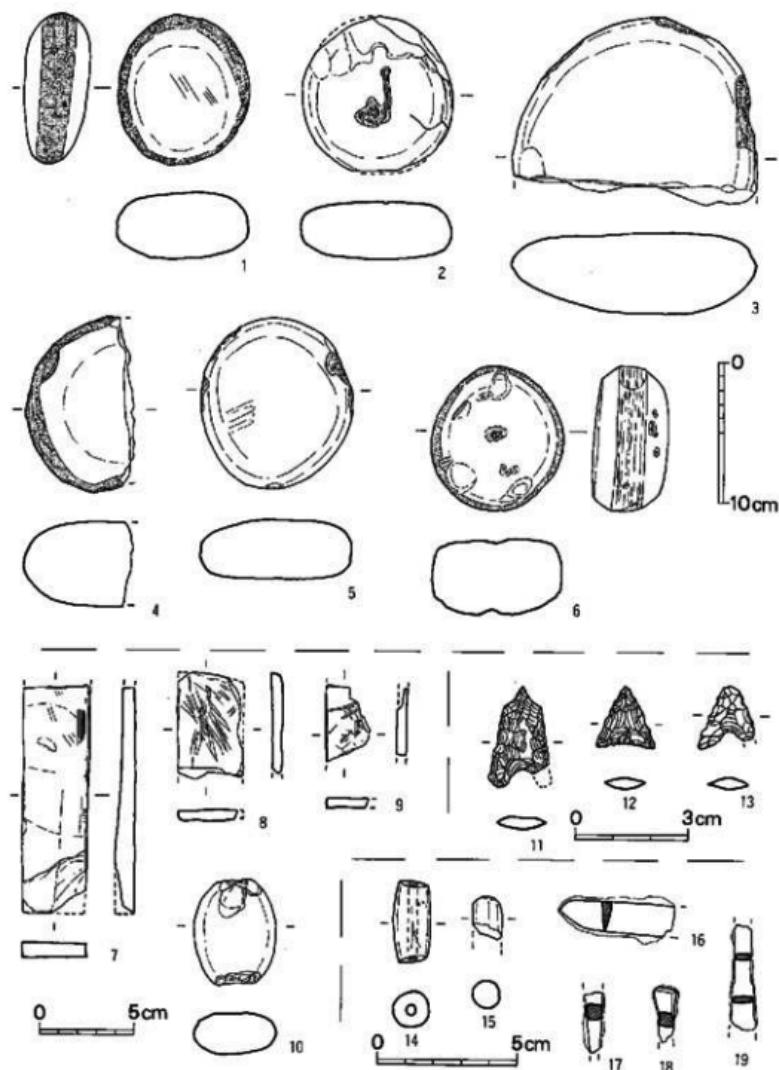
・ 黄色土～黄褐色土 (171～196) 図示できるのは全て縄文土器である。192が後期であるほかは皆晩期に属し、いずれかというと精製土器が多い。171は復元口径14.2cm。182の口径は23.4cm。石器 (第82図5・11) 5は玄武岩質のすり石で、表面は磨製といってよいくらいに磨かれている。全長122mm、幅108mm、厚さ42mm、重さ860g。11は黒曜石の打製石鎌で、片方の脚を欠失する。長さ27.1mm、幅16.2mm、厚さ3.6mm、重さ1.3g。

・ 黒色土～黒褐色土 (197～204) 197・198は縄文晩期土器。197の外面口縁下には刻みが入る。200～203は土師器環で200の口径16.2cm。204は瓦質の鉢。199は緑黄色釉の掛かった青磁碗で龍泉窯系であろう。

石器 (第82図4・6) ともに玄武岩質のすり石で、側縁は敲打痕が著しい。6は表裏面の中央に窪みがある。4は長さ125mm、厚さ61mm。6は全長102mm、幅95mm、厚さ54mm、重さ785g。



第81図 E区出土土器等実測図 8 <包含層> (1/3)



第82図 E区出土石器・土製品・鉄器実測図 (1/4・1/3・1/2・2/3)

IV 総 括

筆頭遺跡ではA・B・C・D・E区において実に多様な時期の遺物が検出された。古くは旧石器時代後期のナイフ形石器から近世まであるが、全ての時期の遺構があるわけではない。主体をなすのは縄文時代晚期の住居群と遺物、古墳時代中期～後期の古墳と住居跡、中世の遺物群ということになろう。以下、時代ごとにまとめておく。

● 旧石器時代

遺物としてナイフ形石器2点、細石刃1点などが出土した。遺構はわからない。遺物包含層としても正しく把握できていないが、基盤層の上にある黄色系粘質土がこの時期のものであつたかもしれない。他の時期の遺構等から出土した黒曜石・サヌカイトの剝片のなかにもまだこの時代のものがいくらか埋もれている可能性があろう。

ナイフ形石器はC-5区のP131とE区のP33から出土したが、この時期の遺構があるとしたらA～D区の南方に続く丘陵台地上であろう。朝倉町原の東遺跡¹¹¹では同様のナイフ形石器や台形石器が出土し、同鎌塚遺跡、山ノ神遺跡、外之隈遺跡でもナイフ形石器・三稜尖頭器・角錐状石器などが出土しているので、今後この地域の旧石器時代の様相も解明が進むことと思われる。

● 縄文時代

早期・前期・中期・後期・晚期と各時期の土器があるが、最も多いのは晚期であった。小谷を挟んで東側に位置する天園遺跡で前期土器が多量に出土していることは、この谷筋において時期を異にして占地形態が違うことの様相が窺えるものである。

まず早期～前期には押型文土器、条痕文土器、塞ノ神式土器などがあり、これらはC-3・4区から出土している。遺構はない。押型文土器は天園・夕月・上池田の杷木町内遺跡のほか、朝倉町では長島・上ノ宿・稗畑などの遺跡で出土しているが、これら山間部の遺跡のみならず低台地上に位置する塔ノ上・中道・上の原等の遺跡でも検出されている。塞ノ神式土器はこの近辺では殆ど例を見ない。

中期は阿高式系のものがC-2～4区より出土しているが、ごく僅かな点数である。

後期はC-2～4区、D区、E区より計10数点の破片が出土している。殆どが西平式系のものである。

晚期になるとC-2・3区に住居群が営まれるとともに調査区のほぼ全域から土器等が検出されている。竪穴住居跡はプランを把握するのに難渋したが、著しい重複を見せながら27軒が検出された。切合いと段落ちとで削平されたものが殆どであって、完全に平面プランのわかる

住居は1軒もなかった。ただ方形もしくは長方形を基調とするプランであることはわかる。支柱穴配置もよくわからない。23・29号住居跡には床面に炉かと思われる焼土が検出されたが、その他にはみられなかった。炉が明確でなく、柱穴もはっきりしないことから住居跡としての機能そのものに一抹の不安もあるが、縄文晩期から弥生早期～前期にはこのような重複の著しい集落の検出例が増えてきている。42号住居跡出土の棒状品は土偶の可能性もあることを指摘しておく。

石器については時期の帰属を明確にしがたいものが多いが、土器の量に比例して大半は晩期の所産であろうと考えている。黒曜石・サヌカイトの製品・剥片は大量とはいわないでもかなりの量がある。黒曜石は姫島産かと思われるものはただ1点のみに気づいただけである。サヌカイトも材質が一種類ではないようだ。瑪瑙質の剥片も1点があった。.

片岩を主体とした扁平の打製石斧は土掘り具であろうが、徳島具形石器としたものはその名稱どおりの用途であったかどうかは確証があるわけではない。棒状石器としたものなどはすり石・叩石・台石などとセットで用いられた物かも知れない。敲打痕のある叩石もしくは窪み石が多く目立つことも含めて当時の生業の一端が窺い知れるところである。

打欠石錐もありと目立っているが、これは筑後川の流れが今と同じ所であったかどうか不明であるけれども、そこまで出かけて使用したものとみられる。この石錐の表裏面が滑らかであるのは使用による結果なのであろうか。

十字形石器は最近になってその出土例が増えている。近い所では杷木町クリナラ遺跡、朝倉町長田遺跡^{註10}、浮羽町法華原遺跡^{註11}、夜須町柿ノ上遺跡^{註12}、北野町赤司一区公民館遺跡^{註13}、同良積遺跡^{註14}、星野村十篭星野小学校遺跡^{註15}、立花町白木西原遺跡などでも知られている。抉り部に紐擦れの痕跡を見る例があることから紐を巻き付けたことは確かであり、木柄に緊縛するなどして使用されたかもしれない。突起先端に刃部を持つ例もある。

この遺跡は縄文時代における住環境としては最適の立地であったことだろう。

●弥生時代

まず41号住居跡から刻目突帯文土器片が2点、前期の土器片がC-3区の1号墳付近とC-4区のP27および北半部から計3点出土していることに注目しておこう。前期の初め頃からの足跡が見られることは、同じ杷木町白木の畠田遺跡における住居跡・支石墓等の意義を考えるうえで参考となるものである。遺構はない。

中期はB区のS X 1が末頃かと思われるのみで、他に遺構・遺物はない。

後期は後半～末に溝状遺構SD 1・4がある。この溝は現状ではB区とC区とに途切れて別々に検出されたが、本来は蛇行した一連のものであった可能性もある。とすればA～C調査区の南側に該期の集落が存することも予想されよう。

SD 4 下層出土のジョッキ形土器は福岡市湯納遺跡で出土した際に熊本県を中心に21例が集成されているが、あと福岡県・佐賀県を中心に管見に及ぶものに朝倉町上原遺跡、同中道遺跡^{註17}、夜須町東小田峯遺跡^{註18}、小郡市三国の鼻遺跡^{註19}、新宮町夜白・三代地区遺跡群^{註20}、若宮町小原遺跡^{註21}、北九州市祇園町遺跡^{註22}、佐賀県では基山町千塔山遺跡^{註23}、大和町慈惠遺跡^{註24}、武雄市みやこ遺跡などがある。古くは中期中頃に遡って丹塗りのものがあるが、大半は後期に属し文様を持つものもある。出土地域としては有明海沿岸が多いように見受けられ、細かい検討を行っていないが、円形・長方形の透孔を有する器台などと分布が重なり合うかもしれない。

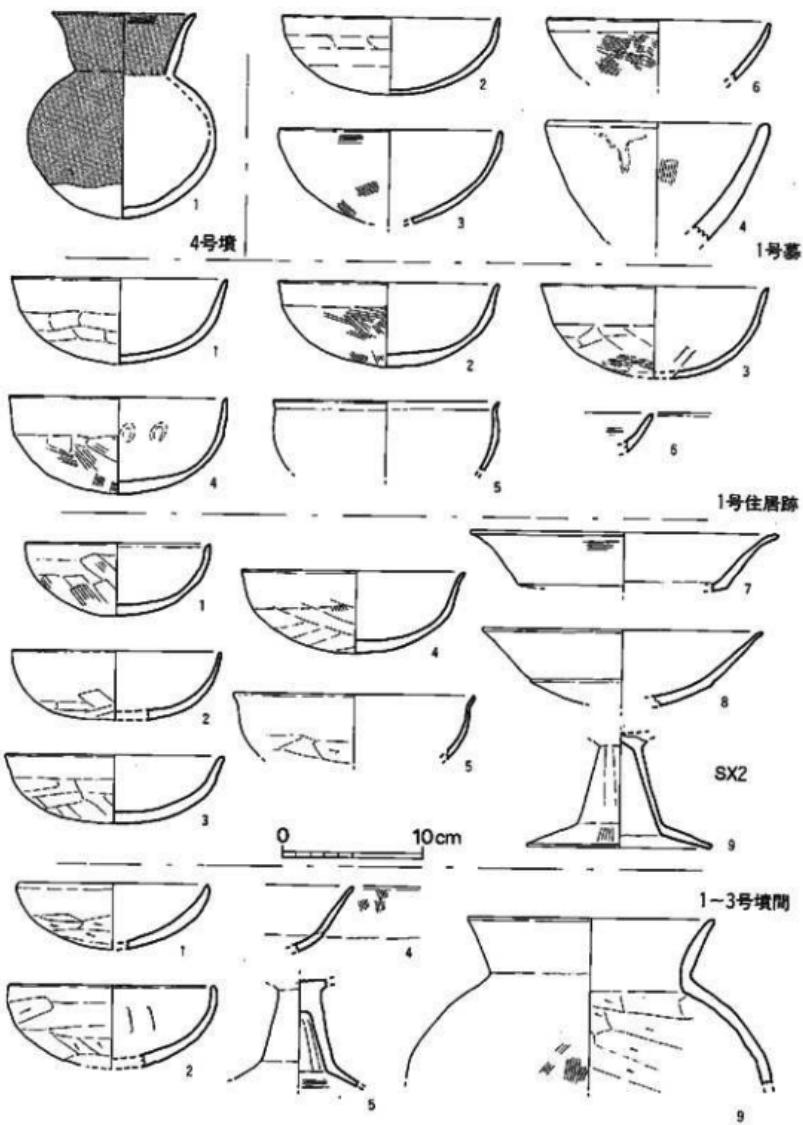
● 古墳時代

古墳8基と木棺墓1基、住居跡9軒があった。古墳は8基とも全て墳丘が削平されており、主体部もかなり破壊されたものが多い。周溝らしきものが遺存していたのは1・8号墳のみであった。

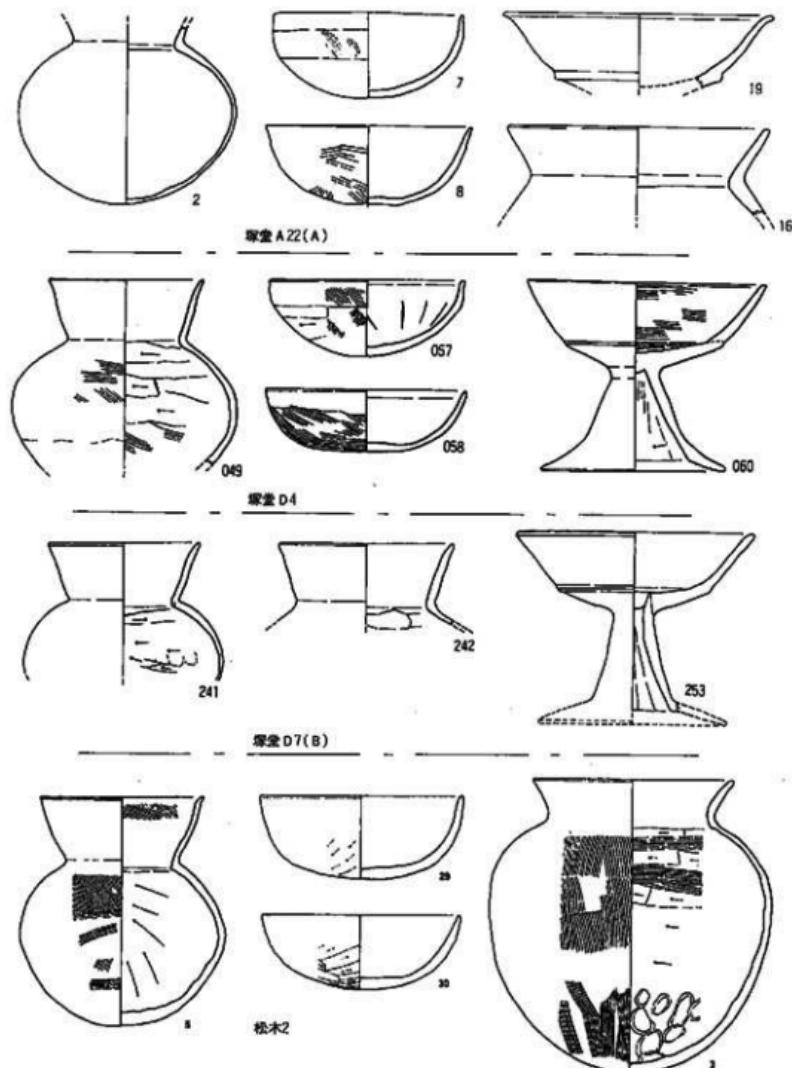
2・4・5・7号墳は竪穴式石室であり、いずれも石棺系の石室である。中間氏の分類で言えば2号墳がA3類、他の3基がA2類ということになろうが、4号墳はA3類とすべきかも知れない。この4基の築造時期については、これまでに知られている同様な例から大まかにはほぼ5世紀代とみられる。近い所では甘木市柿原古墳群で「竪穴式石室・石棺系竪穴式石室」がG地区で2基、H地区で4基、S地区で1基、I地区で59基の計66基調査され、H地区C-4を除いて5世紀初頭～後葉に比定されている。出土遺物のうち土器はほとんどが周溝からであるがただ1基のみI地区のC-39は棺内に陶質土器と初期須恵器とが副葬されていた。棺内への土器副葬は甘木市池の上・古寺墳墓群に見るように渡来系の要素が強く感じられる。

当箇限遺跡4号墳には土師器壺が副葬されていた。口径10.2cm、胴部径13.3cm、器高14.5cmのほぼ完形になる丸底壺で、外面と口頭部内面には丹塗りが施されている。これは日常用の土器ではない。この1個体のみでは時期の判断に苦しむが、近い所での類似例に吉井町塚堂遺跡^{註25} A地区22号A（新）住居跡、同D地区4号住居跡、7号B（古）住居跡、9号住居跡出土品がある。9号住居跡からは陶質土器の甕が伴出している。そのほかでは那珂川町松木遺跡37号住居跡および2号住居跡にやや似た器形があるが、箇限例はこれらの中間的様相かもしれない。前者は松木IV期、後者は須恵器生産開始期である松木V期の資料とされている。また松木V期^{註26}は樽形甕の出土した春日市赤井手遺跡43号住居跡とほぼ併行関係にあるとされている。さらに那珂川町今光遺跡溝2の今光V期や、志摩町御床松原遺跡15号住居跡の御床松原V期にも近い形状の壺があるが、箇限例はこれらよりやや古いもののように思われる。

以上の諸例からすると、箇限4号墳の壺は松木IV期～V期、すなわち須恵器生産開始期を前後する頃に位置づけられよう。実年代としては5世紀初頭前後と考えるが、箇限4号墳の年代としてはいまはやや幅をもたせて5世紀初頭～前半と捉えておきたい。



第83図 箕輪遺跡出土土師器 (1/4)



第84図 塚堂遺跡・松木遺跡出土土師器〈各報告書より引用転載〉(1/4)

他の3基についてもその位置関係からしてほぼ同じ頃に築造されたものと見てよかろう。7号墳に付属していたと思われる1号墓出土の土師器碗も同じ頃と見られる。

また、1号住居跡、S X 2や「1～3号墳間出土」の土器も上述の4号墳出土土器と近い時期の所産と捉えられるが、1号住居跡の碗はやや深みがあり他より新しく位置づけられよう。

4号墳主体部からは土師器壺のほかに鉄鎌が出土したのみである。2・7号墳には、鉄器として刀・鎌・鎌・斧・刀子といった武器・農工具が遺存していたが、装身具類などは見られなかった。副葬でなくとも陶質土器あるいは初期須恵器が出土してもよい時期であるのに全く見られない。前述の柿原古墳群と比べると、鉄器の所有についてはほぼ同じであるのに、陶質土器・初期須恵器が欠けていることは大きな違いである。杷木町志波の中町裏1号墳と宝満宮古墳群からは初期須恵器が出土しているので、そこには地域的な問題のみならず階層性も考慮すべきだろう。

1・3・6・8号墳は竪穴系横口式石室もしくは横穴式石室を主体部とするが、これらに伴う確実な土器が見あたらない。「1～3号墳間出土土器」は当初は1号墳に関連するものかと考えていたが、むしろ2号墳あたりとの関連が強そうである。石室形態から見れば当然前述の2・4・5・7号墳よりは後出するものと考えざるを得ないので、5世紀前半～中頃に比定しておく。1号住居跡はこれらの古墳に関連した施設であったかもしれない。竪穴式石室と横口系あるいは横穴式石室が混在する例は近い所では上ノ宿遺跡でも見られる。

9軒の住居跡はみな方形プランである。カマドを有するのは1号住居跡のみであったが、このカマドにしても袖が見られないなど明確でないところがあった。出土遺物は1・5号住居に少しまとまっていたのみでごく少ないが、これらはおおよそ近い時期に営まれたものであろう。年代としては上述のとおり5世紀初頭～前半に比定する。S X 2は年代的には竪穴式石室群とほぼ同じと思われるが、それらに関する作業小屋的な施設であったのかもしれない。

東側対岸の丘陵西斜面のあまり広くない地には天園遺跡1～3号墳が7世紀初葉～後葉に並んで築造されている。笹原遺跡の調査区内には同時期の古墳は見られない。わざわざ狭隘の地を墓域として選んだのは、その時期にはここ笹原1～8号墳の墳丘がまだ顕現していたためにあえて避けたためであろうか。

●奈良時代

土器がSD 4とS X 2から出土している。SD 4はこの時期に掘り直しがなされているらしいが、S X 2は覆土中からの出土でもあり、近くに該期の遺構が存するのだろう。P119の焼塙土器は胴部が球形を呈しており8世紀代のそれとやや器形を異にするため時期比定に慎重であるべきだが、いまはこの時期としておく。

●中世期

A～D区でも土師器小皿・坏や東播系須恵質土器、瓦質土器、輸入陶磁器、石鍋などが出土しているが、その量はごく少ない。反面E区には特に土師器の小皿・坏が多く、上記と同じもの以外に瓦の小片も出土している。C区のピットから多くが出土した管状土錐は時期が特定しにくいが、青磁・白磁等と伴っているものがあるので中世期のものと捉えておきたい。

土師器小皿・坏は全て糸切り底で、小皿は口径7～8cmに器高1～1.6cm、坏は口径12～13cmに器高3cm前後の法量を示し、これを中心に輸入陶磁器をも考慮するとはば14世紀代を中心とした時期に比定されよう。しかし古くは13世紀に遡るものや、E区P64・26・20出土の坏のように底径の小さくなつた新しい時期のものもあり、後者は16世紀代に下るものであろう。もとよりE区での時期ごとの変遷は捉えられなかつたが、14世紀を中心として13世紀から16世紀にかけての生活の痕跡があることになる。

この遺跡の近くには「玉泉寺」や「永楽寺」という寺跡があつたとされ、それは江戸時代に加藤一純が編纂した『筑前國統風土記附錄』の「久喜宮村」の項にも記事が見える。その中の「永楽寺跡」の一項には「……町の北十五町はかり山の中に金福寺といふ寺跡あり。其邊に經塚一基あり。猶村中に寺跡あれとも寺号しれず。皆大友家の兵火に焼亡せりといふ。」との記述もある。金福寺という寺とともに經塚があつたということも興味深い。

戦国時代末期にこのあたりは大友・龍造寺・島津の各氏に秋月氏を交えた攻防で戦乱が激しかつたのであろうが、寺があつたということと、それが焼失したというのが史実であれば、16世紀後半を特徴づける遺物は少ないものの、E区における柱穴群などがそれに関連する可能性は高いものとなる。巨石などはあるいは礎石として使用された可能性もないではない。しかしながら寺に直接関連するような遺構を明確には把握できなかつた。もしE区の巨石を礎石として使用したのであれば瓦が多量に出土してもよいはずである。一方で草庵風の建物であったとすればその限りでないが、ともかくE区においては多くの土師器小皿・坏のほか鍋・壺鉢・陶磁器が出土しており、この近くに輸入陶磁器を所有しうる階層の人たちが住んでいたことは疑いないところである。それが寺に関連する施設であったとしてもおかしくはない。

註

1. 福岡県教育委員会が昭和62・63（1987・88）年度に調査した。平成10年度報告予定。
2. 福岡県教育委員会 1992 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－22－」
3. 福岡県教育委員会 1996 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－40－」
4. 福岡県教育委員会 1996 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－42－」
5. 福岡県教育委員会 1995 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－34－」
6. 福岡県教育委員会 1991 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－20－」
7. 福岡県教育委員会 1987 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－9－」

- | | | |
|--|---------|---|
| 8. 福岡県教育委員会 | 1996 | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-39-』 |
| 9. 福岡県教育委員会 | 1995 | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-33-』 |
| 10. 福岡県教育委員会 | 1994 | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-30-』 |
| 11. 九州歴史資料館 | 1982 | 『田中幸夫寄贈品目録』 |
| 12. 北野町教育委員会 | 1996 | 『赤司一区公民館遺跡』
北野町文化財調査報告書 第4集 |
| 13. 北野町教育委員会 | 1996 | 『良積遺跡Ⅰ』
北野町文化財調査報告書 第5集 |
| 14. 星野村教育委員会 | 1994 | 『十箇星野小学校遺跡』
星野村文化財調査報告書 第2集 |
| 15. 立花町教育委員会 | 1995 | 『白木西原遺跡Ⅱ』
立花町文化財調査報告書 第8集 |
| 16. 福岡県教育委員会が昭和61(1986)年度に調査した。平成10年度報告予定。 | | |
| 17. 福岡県教育委員会 | 1970 | 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集』 |
| 18. 小郡市教育委員会 | 1988 | 『三国の鼻遺跡Ⅲ』
(みくに野第二土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告-8-)
小郡市文化財調査報告書 第43集 |
| 19. 新宮町教育委員会 | 1993 | 『夜臼・三代地区遺跡群 第一分冊』
新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集 |
| 20. 福岡県教育委員会 | 1977 | 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-11-』 |
| 21. 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 | 1994 | 『紙屋町遺跡Ⅰ』
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第143集 |
| 22. 基山町遺跡発掘調査団 | 1978 | 『千塔山遺跡』 |
| 23. 佐賀県教育委員会 | 1990 | 『慈庭遺跡』
佐賀県文化財調査報告書 第96集
(九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(11)) |
| 24. 武雄市教育委員会 | 1986 | 『みやこ遺跡』
武雄市文化財調査報告書 第15集 |
| 25. 中間研志「豊六式石室・石棺系竪穴式石室」 | | |
| 福岡県教育委員会 | 1986 | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-6-』 |
| 26. 福岡県教育委員会 | 1984 | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-4-』 |
| 27. 甘木市教育委員会 | 1979 | 『池の上墳墓群』
甘木市文化財調査報告 第5集 |
| 甘木市教育委員会 | 1982 | 『古寺墳墓群』
甘木市文化財調査報告 第14集 |
| 甘木市教育委員会 | 1982 | 『古寺墳墓群Ⅱ』
甘木市文化財調査報告 第15集 |
| 28. 福岡県教育委員会 | 1984・85 | 『堀塚遺跡Ⅱ・Ⅳ』
一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2・4集 |
| 29. 那珂川町教育委員会 | 1984 | 『松木遺跡Ⅰ』
那珂川町文化財調査報告書 第11集 |
| 30. 春日市教育委員会 | 1980 | 『赤井手遺跡Ⅰ』
春日市文化財調査報告書 第6集 |
| 31. 東急不動産株式会社 | 1980 | 『今光遺跡・地余遺跡』 |
| 32. 志摩町教育委員会 | 1983 | 『御床松原遺跡』
志摩町文化財調査報告書 第3集 |
| 33. 福岡県教育委員会 | 1991 | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-21-』 |
| 34. 山本信夫「土器の分類」 | 1983 | 太宰府市教育委員会『大宰府条跡Ⅱ』
太宰府市の文化財 第7集 |
| 35. 加藤一純・鹿取周成 | 1798 | 『筑前國統風土記附錄』 文獻出版 1977 |

図 版

PLATE



1 篠原遺跡遠景（北から）



2 篠原遺跡遠景（西：高山から）



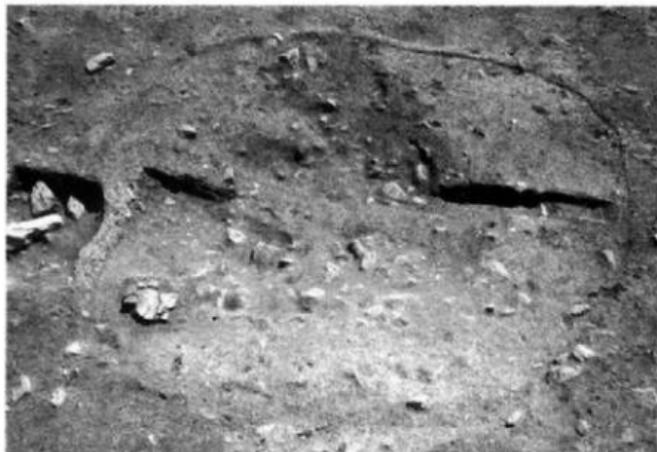
1 萩隈遺跡全景気球写真（東上空から）



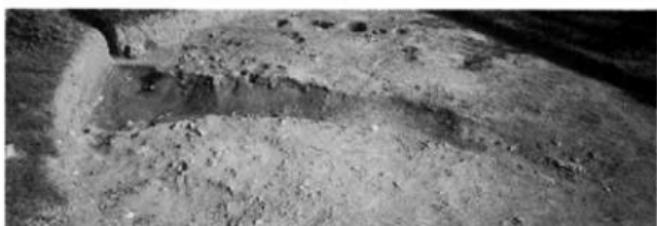
2 萩隈遺跡全景（東から）



1
A・B区気球写真
(東上空から)



2
B区S X 1
(北から)



3
B区S D 1
(北から)



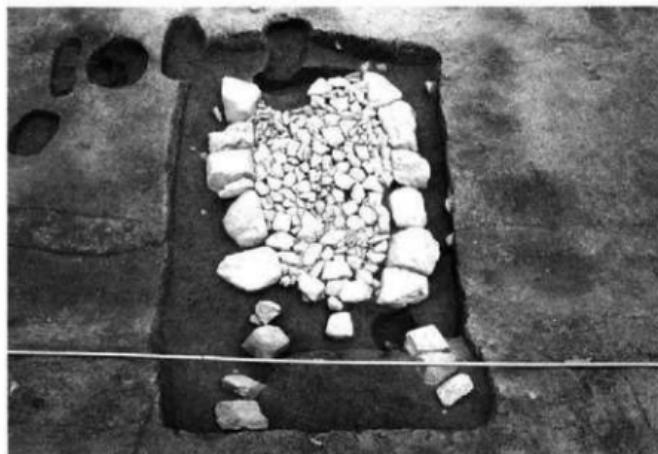
1 C・D区気球写真（北上空から）



2 C-2~4区気球写真



1
1号墳気球写真



2
1号墳石室
(西から)



3
同上
(南から)



1
2号墳石室
(東から)

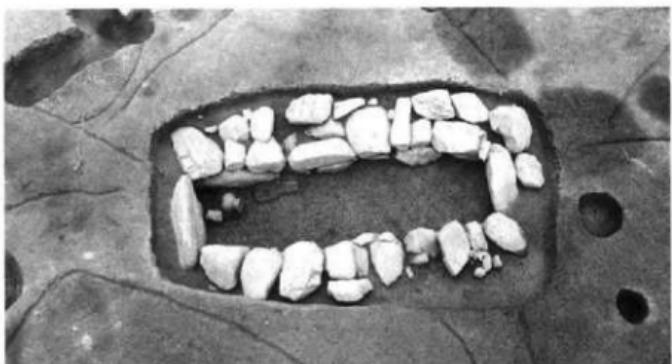


2
同 鉄器出土状態
(北から)



3
3号墳石室
(東から)

1
4号墳石室
(西から)



2
同 遺物出土状態
(南から)



3 同 遺物出土状態 (西から)



4 同 (北から)



1
5号墳石室
(北から)



2
6・7号墳
(北から)



3
6号墳石室
(東から)



1 7号墳石室（西から）



2 同上（北から）



1
7号墳石室
(北東から)



2 同 遺物出土状態 (南から)



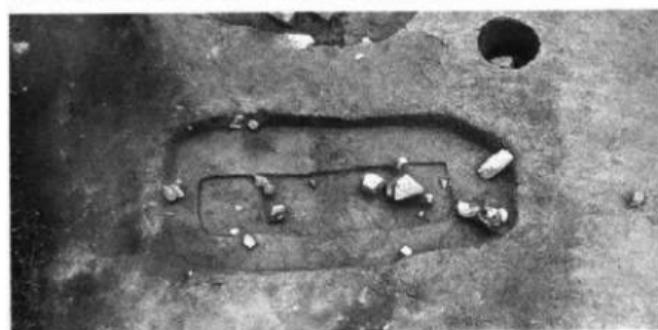
3 同上 (北から)



1
8号墳全景
(西から)



2
8号墳石室
(北東から)



3
1号墓
(北から)



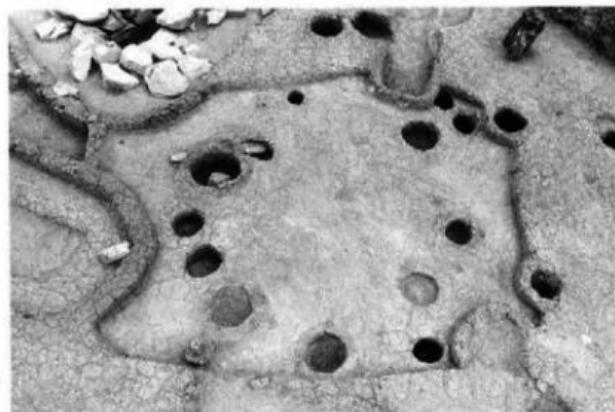
1 2・3号住居跡、SX2（東から）



2 4・5号住居跡（南から）



1
6号住居跡
(西から)



2
7号住居跡
(北から)



3
1号住居跡カマド
(南西から)



1 C-2・3区住居群全景（東から）



2 29~42号住居跡（東から）



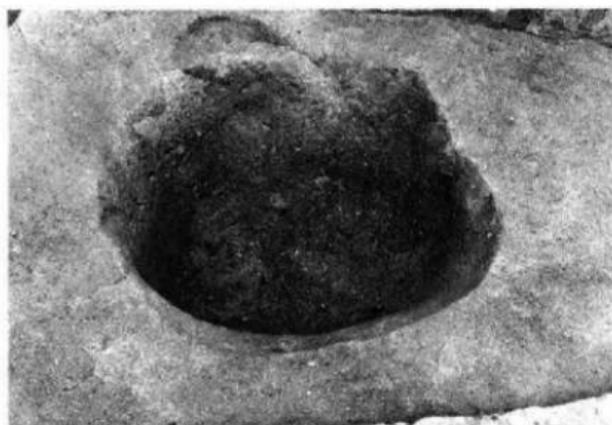
1 37~47号住居跡（東から）



2 21~28号住居跡（東から）



1
1号土坑
(南から)



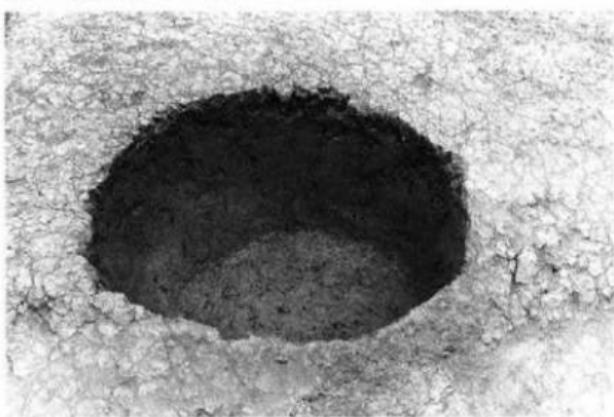
2
同上
(南から)



3
2号土坑
(西から)



1
4号土坑
(北から)



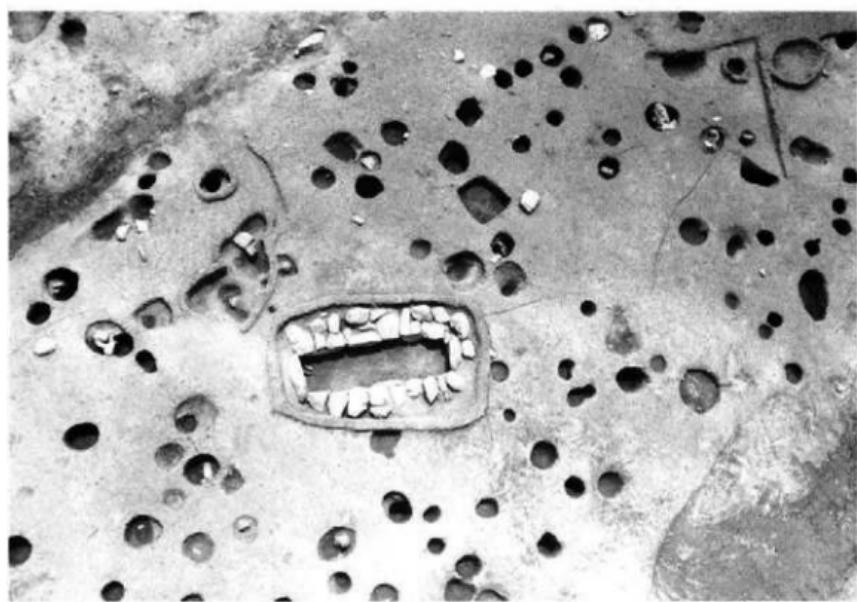
2
5号土坑
(南西から)



3
6号土坑
(東から)



1
SD 4
(北西から)



2 4号填石室周辺柱穴群気球写真



1 SR1 (南から)



2 同 (東から)



3
SR3
(南西から)



4
同
(東南から)



1 E区気球写真（南上空から）



2 E区全景（東から）



1 E区包含層（西から）



2
E区P100・101
(北から)



3
E区P106・107
(南から)



6



住1-4



4号墳-1



住42-17



1号墓-2



住41-19



住1-1



SD1-1



住1-2



SD3-1



住1-3



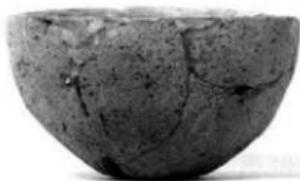
SD3-3



SX2-1



SX2-2



SD3-4



SX2-4



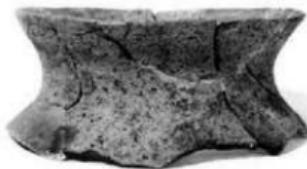
SD3-10



SX2-9



C区58



SD3-12



C区105



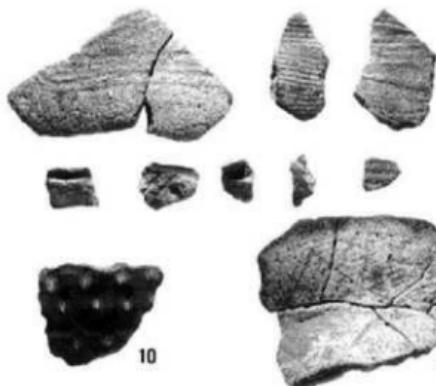
P26-13



C区108



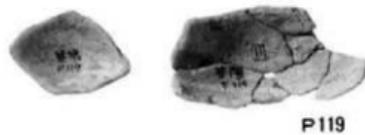
41·42号住居跡出土土器、押型文土器



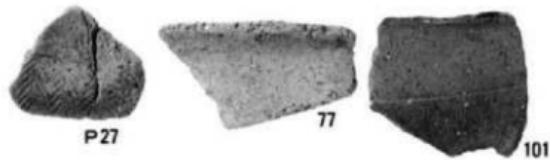
縄文前期・中期土器



縄文後期土器

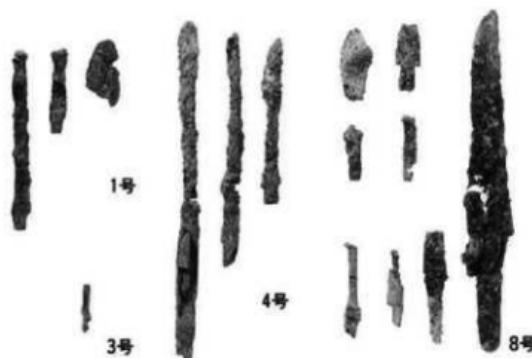


P 119



弥生土器・焼塩土器

縄文土器・弥生土器・焼塩土器



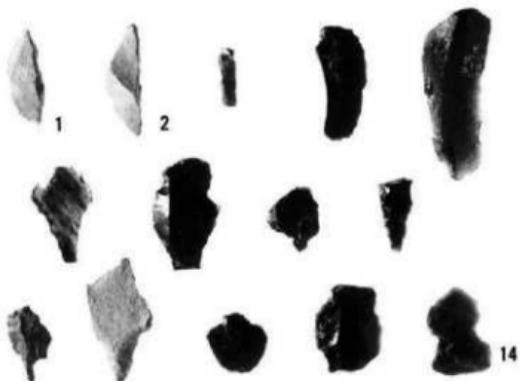
1・3・4・8号填铁器



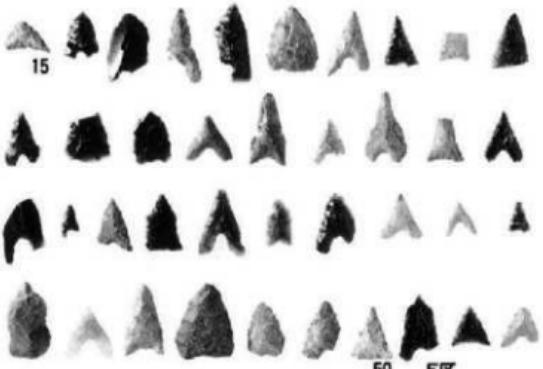
2号填铁器



7号填铁器



ナイフ形石器・兼他



打製石鏃

50 E区



打製石鏃

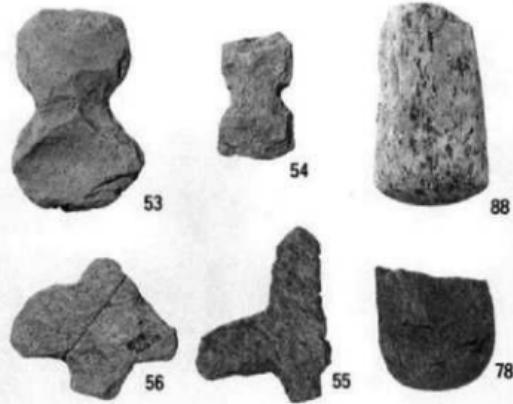
ナイフ形石器・兼・打製石鏃など



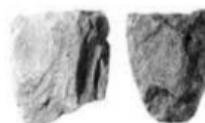
スクレイバーなど



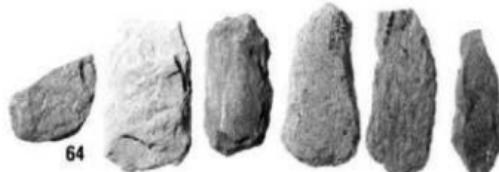
使用剥片



十字形石器など



打製石斧など



打製石斧



磨製石斧

打製石斧・磨製石斧など



棒状石器



打製石斧



棒状石器など



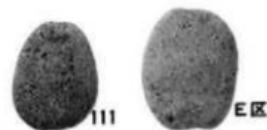
棒状石器



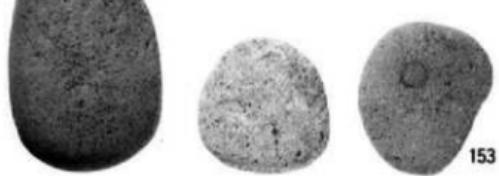
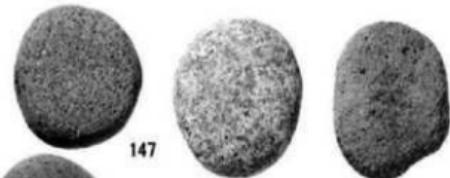
棒状石器

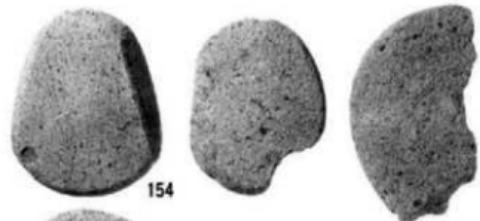


打欠石錐

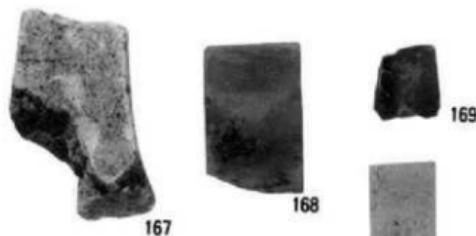


打欠石錐

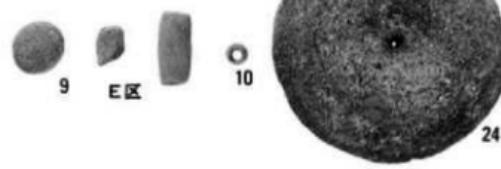




すり石・叩石



砥石



土錘・ガラス玉など

すり石・叩石・砥石・土錘など



16



105



17



115



49



121



59



152



67



169



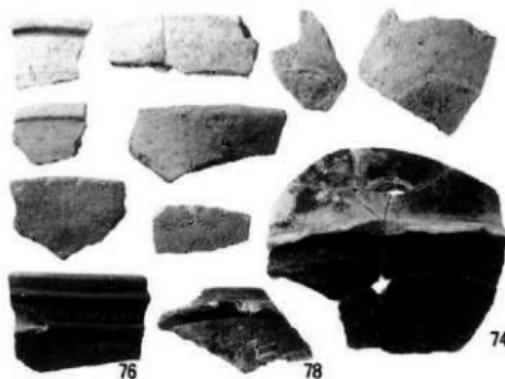
68



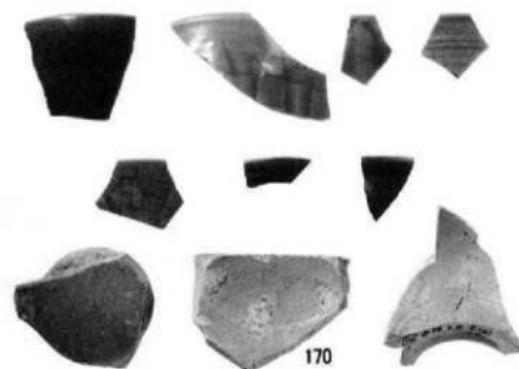
104



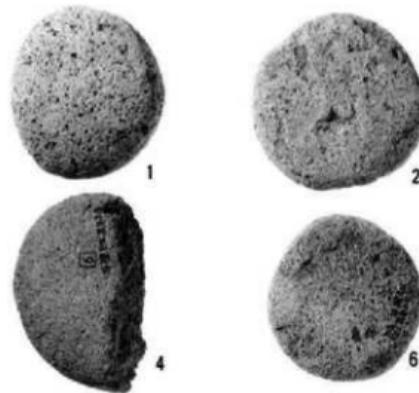
171



E区出土瓦質土器等



E区出土陶磁器



E区出土すり石

報告書抄録

ふりがな	ささくまいせき
書名	笠置遺跡
副書名	
番次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係歴史文化財調査報告
シリーズ番号	44
編著者名	伊崎俊秋
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL 092-651-1111
発行年月日	西暦 1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ...	東經 ...	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
笠置	福岡県朝倉郡 鹿本町大字 久喜宮字笠置 152-146-1ほか	404411	580157	33° 21' 59'	130° 48' 14'	19870605 ～ 09870919	2,366	道路 (九州横断 自動車道) 建設に伴う 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
笠置		旧石器		ナイフ形石器・細石刃	
	集落 包含層	縄文	竪穴住居跡 土坑	27軒 6基	早期～晚期の土器 打製石器・石斧・石鎚 十字形石器
	集落	弥生	土坑 溝	1基 2条	土器 ジョッキ形土器
	墓地 集落	古墳	古墳 木棺墓 竪穴住居跡	8基 1基 9軒	土師器 鉄器(刀・鎌・鍬・ 斧・刀子)
		奈良		須恵器・焼塙土器	
	寺?	室町	擬立柱建物跡	2棟?	土師器・輸入陶磁器
		近世	石垣		

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 H 8	登録番号 7

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—44—

平成9年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7-7

印刷 株式会社 チューエツ福岡工場

福岡市博多区東比恵2丁目9番1号